

# 観音寺遺跡(Ⅳ)

道路改築事業(徳島環状線国府工区)関連埋蔵文化財発掘調査報告書

《第3分冊 木簡編》

2 0 0 7

徳島県教育委員会  
財団法人 徳島県埋蔵文化財センター

# 観音寺遺跡(Ⅳ)

道路改築事業(徳島環状線国府工区)関連埋蔵文化財発掘調査報告書

《第3分冊 木簡編》

2 0 0 7

徳島県教育委員会  
財団法人 徳島県埋蔵文化財センター



勘籍木簡（201号）出土状況（南西から撮影）



勘籍木簡（201号）出土状況（南東から撮影）





148号木簡出土状況（西から撮影）



178号木簡出土状況（西から撮影）



131号 (裏2/3)



131号 (表2/3)



201号 (裏2/5)



201号 (表2/5)



113号 (表1/1)



93号 (表2/3)



114号 (表1/2)





190号 (表1/1)



141号 (表1/1)



149号 (表1/1)



203号 (表3/4)



191号 (表1/1)



147号 (表1/1)



193号 (表1/1)



144号 (表1/1)



186号 (表1/1)



175号 (表1/1)

161号 (表1/1)



172号 (表3/4)



211号 (表1/1)



185号 (表1/1)



148号 (表1/1)



188号 (表3/4)



187号 (表1/1)





102号 (表1/1)



214号 (表1/1)



184号 (表1/1)



162号 (表1/1)



134号 (表1/1)



215号 (表1/1)

193号 (表1/1)



180号 (表1/1)



200号 (表3/4)

140号 (表1/1)



137号 (表1/1)



183号 (裏4/5)



183号 (表4/5)





133号 (裏1/1)



151号 (表2/3)



182号 (表1/1)



206号 (表1/1)



202号 (表3/4)



178号 (裏3/4)



178号 (表3/4)





121号 (表1/1)



173号 (表1/1)



150号 (表1/1)



124号 (表2/3)



165号 (表1/1)



92号 (裏1/1)



92号 (表1/1)



91号 (表1/1)



87号 (表2/3)



87号 (表2/3)



105号 (表1/1)



89号 (1/1)



88号 (表2/3)





# 凡例

一 木簡の番号は報告書によって新たに割り振ったものを使用している。番号を付ける際の基準は以下の通りである。

①自然流路（SR三〇〇一）内の対応層位のうち、より新しい年代から。

②自然流路（SR四〇〇一・SR五〇〇一）出土のものについては、SR三〇〇一との層位の時期的な対応関係から。

二 木簡の積文には以下のような書式を用いた。法量mmを「長さ×幅×厚み」で積文の下に表し、括弧（ ）は本来の形状を留めていない部分の法量であることを示す。

型式番号は奈良文化財研究所のものを用い、三桁の数字で以下の通りに記す。

〇一型式 短冊形

〇一五型式 短冊形で側面に穴を穿ったもの。

〇一九型式 一端が方頭で、他端は折損・腐食で原形の失われたもの。

〇三一型式 長方形の材の両端の左右に切り込みをいれたもの。方頭、圭頭など種々の作り方がある。

〇三二型式 長方形の材の一端の左右に切り込みをいれたもの。

〇三三型式 長方形の材の一端の左右に切り込みをいれ、他端を尖らせたもの。

〇三九型式 長方形の材の一端の左右に切り込みがあるが、他端は折損・腐食して不明のもの。

〇四九型式 長方形の材の一端を羽子板の柄状にしているが、他端は折損・腐食などによって原形が失われたもの。

〇五一型式 長方形の材の一端を尖らせたもの。

〇五九型式 長方形の材の一端を尖らせているが、他端は折損・腐食で原形の失われたもの。

〇六一型式 用途の明瞭な木製品に墨書のあるもの。

〇六五型式 用途未詳の木製品に墨書のあるもの。

〇八一型式 折損・腐食その他によって原形の判明しないもの。

三 積文に用いた符号は以下の通りである。

「」 木簡の上端ならびに下端が原形を留めていることを示す。

< 木簡の上端・下端などに切り込みのあることを示す。

。 穿孔のあることを示す。

くく 抹消された文字であるが、字画の明らかな場合に限り原字の左傍に付した。

■ 抹消により判読の困難なもの。

□ 欠損文字のうち字数が確認できるもの。

□ 欠損文字のうち字数が推定できるもの。

□ 欠損文字のうち字数が数えられないもの。

『』 異筆、追筆。

、 合点。

∴ 表面の剥離により字画の存在が不明確なもの。

× 前後に文字の続くことが内容上推定されるが、折損などにより文字が失われているもの。

・ 木簡に裏表のある場合、その区別を示す。

〔 校訂に関する註で、原則として積文の右傍らに付し、本文に置き換えるべき文字を含む場合。

カ 筆者が加えた註で疑問の残るもの。

四 木簡の実測図には、大橋の観察により木簡表面の「ケズリ」や「ワリ」といった考古学的情報を優先して書き入れた。

五 実測図は基本的に1/2の縮尺である。それ以外の縮尺は1/3、1/4で、個々にスケールを付けてある。

六 図版の木簡赤外線写真は、文字が読めるものについては原寸大もしくは縮尺2/3とした。文字部分のみ切り取ったものは原寸大とした。文字が不明瞭で釈読できなかったものについては、縮尺1/2または1/4とした。

七 写真の撮影は、発掘時の状況については調査時の各担当が、木簡については、独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所の中村一郎氏が撮影した。なお、巻頭図版は保存処理前の状態を、赤外線写真図版は保存処理後の状態を撮影したものである。

八 本書の執筆と編集は大橋育順が担当した。但し、「II-2 出土木簡の積文と内容」は、独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所への「徳島市観音寺遺跡・敷地遺跡（阿波国府推定地）出土木簡の総合的研究業務委託」の成果として、都城発掘調査部史料研究室 渡辺晃宏氏の記述をもとに大橋が作成し、京都教育大学名誉教授 和田 萃氏に加筆、監修していただいたものである。

## 本文目次

I 木簡出土遺構の概要	1
一 自然流路（SR三〇〇一）（第七図）	1
二 自然流路（SR四〇〇一）（第三四図）	2
三 自然流路（SR五〇〇一）（第五六図）	2
四 木簡の出土状況	3
II 出土木簡の観察と積文	6
一 出土木簡の概要	6
二 出土木簡の積文と内容	6
三 その他	67
III まとめ	70
一 観音寺遺跡出土木簡の年代について	70
二 木簡の形態について	71



# 挿図目次

第四九八図	自然流路 (S R三〇〇一) の地形とV層出土木簡分布図	4
第四九九図	自然流路 (S R三〇〇一) III層・IV層出土木簡分布図	5
第五〇〇図	木簡実測図① (八七号〜九二号)	8
第五〇一図	木簡実測図② (九三号〜九九号)	12
第五〇二図	木簡実測図③ (一〇〇号〜一一一号)	16
第五〇三図	木簡実測図④ (一一二号〜一二〇号)	20
第五〇四図	木簡実測図⑤ (一二一号〜一三一号)	24
第五〇五図	木簡実測図⑥ (一三二号〜一四〇号)	28
第五〇六図	木簡実測図⑦ (一四一号〜一五一号)	34
第五〇七図	木簡実測図⑧ (一五二号〜一六〇号)	38
第五〇八図	木簡実測図⑨ (一六一号〜一七一号)	42
第五〇九図	木簡実測図⑩ (一七二号〜一七八号)	46
第五一〇図	木簡実測図⑪ (一七九号〜一八七号)	50
第五一一図	木簡実測図⑫ (一八八号〜二〇〇号)	54
第五一二図	木簡実測図⑬ (二〇一号〜二〇八号)	60
第五一三図	木簡実測図⑭ (二〇三号・二〇九号〜二一五号)	64
第五一四図	その他実測図	68
第五一五図	木簡の型式別組成	72

# 表目次

表二二	各層位の木簡出土数	6
表二三	木簡型式別出土数	71
表二四	木簡	74
表二五	その他	79

# 図版目次

・ 巻頭カラー	
巻頭図版四	勘籍木簡 (二〇一号) 出土状況 (南西から撮影)
	勘籍木簡 (二〇一号) 出土状況 (南東から撮影)
巻頭図版五	一四八号木簡出土状況 (西から撮影)
	一七八号木簡出土状況 (西から撮影)
巻頭図版六	木簡
巻頭図版七	木簡
巻頭図版八	木簡
巻頭図版九	木簡
巻頭図版十	木簡
巻頭図版十一	木簡
巻頭図版十二	木簡
巻頭図版十三	木簡
巻頭図版十四	木簡
巻頭図版十五	木簡
巻頭図版十六	木簡

・赤外線写真図版

図版八二	木簡（八七号～九二号）	9
図版八三	木簡（九三号～九九号）	13
図版八四	木簡（一〇〇号～一一一号）	17
図版八五	木簡（一一二号～一二〇号）	21
図版八六	木簡（一二一号～一三一号）	25
図版八七	木簡（一三二号～一四〇号）	29
図版八八	木簡（一四一号～一五二号）	35
図版八九	木簡（一五二号～一六〇号）	39
図版九〇	木簡（一六一号～一七二号）	43
図版九一	木簡（一七二号～一七八号）	47
図版九二	木簡（一七九号～一八七号）	51
図版九三	木簡（一八八号～二〇〇号）	55
図版九四	木簡（二〇一号～二〇八号）	61
図版九五	木簡（二〇三号・二〇九号～二一五号）	65
図版九六	その他	69

・付図

二〇一号木簡赤外線写真（原寸大）



# I 木簡出土遺構の概要

## 一 自然流路 (SR三〇〇一) (第七図)

位置と規模 大グリッド Loc.F-1、中グリッド γ・δ-III・IVにまたがる、幅約九〇mの流域をもった自然流路である。

形状 東西幅六〇mで設定された調査区に対して、自然流路 (SR三〇〇一) は南東から北西方向に流域をもつ。中グリッド γ・IV、小グリッド S・T-1~7において、南東から北西へのSR三〇〇一の南岸の肩を確認した。一方北岸は中グリッド δ-III・IV、小グリッド Q・S-17~9において肩を検出した。

### 層位の設定

自然流路 (SR三〇〇一) は複数の年度にわたって分割調査を行った結果、流路内の複雑な堆積層を細部にわたって年代を対応させることが困難であった。そのため、鍵となる層と出土遺物を手がかりに、大きくI~IXの九層に再構成した。特に二〇〇二年度以降は周辺住宅への影響を考慮して、標高二・五m付近の粗砂層 (VIII層) 以下への掘削が制限されたため、IX層に対応するのは二〇〇〇年度一区に限定される。

基本的な層序は、最も広い面積を調査した二〇〇〇年度一区の層位の観察結果を重視した。それ以降の年度の調査は、この結果を基に層の対

応関係の把握を行った。一九九八年度一区は他の調査地点と少し距離があったため層位の対応は困難であったが、二〇〇七年度の調査の結果によって明確になった。鍵となる層位は木製品を多く含むIII層上部の砂層、シルトと細砂が互層に堆積し、自然木などの有機物を多く含むVI層、層厚が五〇cm以上の粗砂からなるVIII層である。

ここでは各層位の観察結果から、SR三〇〇一の各段階での様相を下層から順に概観する。まず最下層のIX層は、二〇〇〇年度一区のみで削した層である。標高二・五m以下に存在する細砂及び粘質土からなる。遺物は少ないが、「里」表記の木簡が出土している。VIII層は、すべての年度の調査区から検出されている。層厚〇・五~一mの粗砂層である。粒子の大きな粗砂が厚く堆積するという状況から、この当時の自然流路 (SR三〇〇一) は水量が多く、幅約九〇mの流域のほとんどに流水が及んでいたものとみられる。比較的大きな遺物が粗砂に埋もれた状態で出土し、土器片には著しい摩滅がみられた。第六図 (一分冊) の柱状図をみると、約一m堆積した部分もある。上面ではかなりの起伏があり、南区の中央部の南東から北西方向に (第六図の◎と①) に隆起した部分が見られる。VII層はSR三〇〇一の南東部の一九九八年度一区のみで確認できた (第四四七図)。主にシルト層で構成されている。VI層はシルトと細砂が互層に堆積する。平面的には五〇cm程の起伏があり、遺物をほとんど含まない。VIII層の上に約三〇cmの厚さで堆積しているが、南区北東部 (第六図の◎と①) では特に標高三・五mより高い位置に堆積している。木簡を多く包含するV層が堆積した時期には、流路の北岸または中洲として水面上に位置していたと推測できる。この時期のSR三〇〇一はシルトと細砂が短いスパンで堆積することから、流量が

不安定な時期であったと推測される。SR三〇〇一の南半部分の調査時(二〇〇四・二〇〇五年度)に、VI層上面の起伏を等高線で表した(第四九八図の上)。その結果、SR三〇〇一の南岸の下場は $\delta$ IV・A11から $\delta$ III・D20への方角でSR三〇〇一の検出時の南肩の方角と同一であった。また $\delta$ IV・E7から $\delta$ IV・E11で東西方向に約二五m、幅約一〇mの中洲状の高まり(中洲A)と、 $\delta$ III・E20から $\delta$ IV・F4でも同様の高まりを検出した(中洲B)。特に前者は調査区外の東側へ延びているため、現時点では、V層段階の流路は南西からの流れと、東からの流れが、合流していたのではないかと考えられる。なお、 $\delta$ IV・C5周辺においてVI層の堆積が薄く、V層の堆積が厚い部分が見られた。V層は木簡が最も多く出土した層である。細砂混じりのシルトが主に堆積する。この段階では、流路内に複数の中洲状の高まりが存在することから、水量は少なく、VI層段階に形成された起伏が中洲となり、その間を縫うように水が流れたと推測できる。IV層段階では粒子の細かい粘質のシルトが堆積する。VI層によってできた中洲は埋没していくが、第六図の柱状図BやC、Hのように、北東部から北岸では堆積がみられず、流路の中央からやや南側に厚く堆積している。流れもV層に比べて安定していたと推測できる。III層は、ほぼ全域に堆積しているが、南東側に厚く、その他は薄い傾向がみられる。I・II層はSR三〇〇一が埋没した後の堆積層で、遺物はほとんど出土しない。現在の舌洗川に隣接した部分では、自然流路の堆積がみられたが、それ以外の大部分は低湿地又は水田としての土地利用が考えられる。上層は平均して約二mの盛土によって、現地盤の標高は七〜八mになっている。

## 二 自然流路 (SR四〇〇一) (第三四図)

位置と規模 大グリッドLoc.F11、中グリッド $\epsilon$ III・IVにまたがる、幅約七m、調査区内での延長約七〇mの自然流路である。

形状 東西幅六〇mで設定された調査区に対して、自然流路(SR四〇〇一)は南東から北西方向に直線的に流れる。 $\delta$ IV・J11から $\epsilon$ III・P19の方向を軸にしている。

## 三 自然流路 (SR五〇〇一) (第五六図)

位置と規模 SR四〇〇一とほぼ同じ位置であるが、大グリッドLoc.F・G11、中グリッド $\epsilon$ ・ $\alpha$ III・IVにまたがる幅約三〇mの自然流路である。調査区内での延長は約九〇mである。

形状 東西幅六〇mで設定された調査区に対して、自然流路(SR五〇〇一)は南東から北西方向に直線的に流れる。自然流路(SR四〇〇一)と同方向を軸に、東は $\epsilon$ IV・J13から西は $\alpha$ III・B18にまたがる。



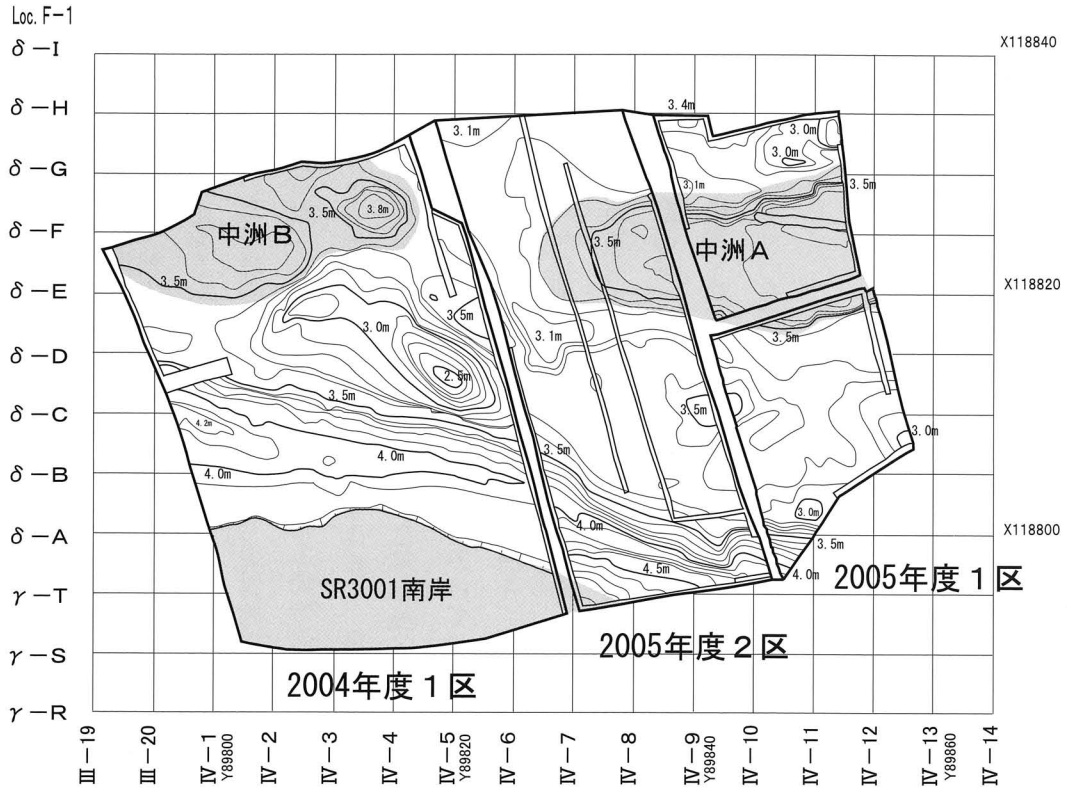
#### 四 木簡の出土状況

出土した木簡は、調査時に木簡と確認できたものについては、出土位置を座標で記録している（第三四・五六・二三一・二三七・二六一・二六六・二七二・二七五・四九八・四九九図・表二四）。特に、二〇〇四年度と二〇〇五年度に調査したSR三〇〇一の南半では、木簡が多く出土したV層を取り除いた時点のVI層上面において、流路内の微地形を記録した（第四九八図の上）。ここでは、各層ごとに木簡の出土位置を地形図をもとに記述する。まず、VI層上面の地形をみると、調査区の南西隅にSR三〇〇一の南岸の肩がみられ、南西から北東方向への傾斜が確認できる。一方調査区北東部δ-IVのE-7、11にかけての部分では、東西方向へのびる幅約一〇mの中洲状の微高地（中洲A）がみられる。これによってSR三〇〇一は南東方向からの流れと東からの流れが合流していた可能性が考えられる。さらに西側のδ-III・E-20からF-4にかけても東西方向の微高地（中洲B）がみられた。この二ヶ所の微高地が埋没後に二次的な浸食を受けていないと仮定すると、V層が堆積した時期にはこのような部分的な微高地の間を、比較的小さな流れが流路を変化させながら流れていたと推測できる。

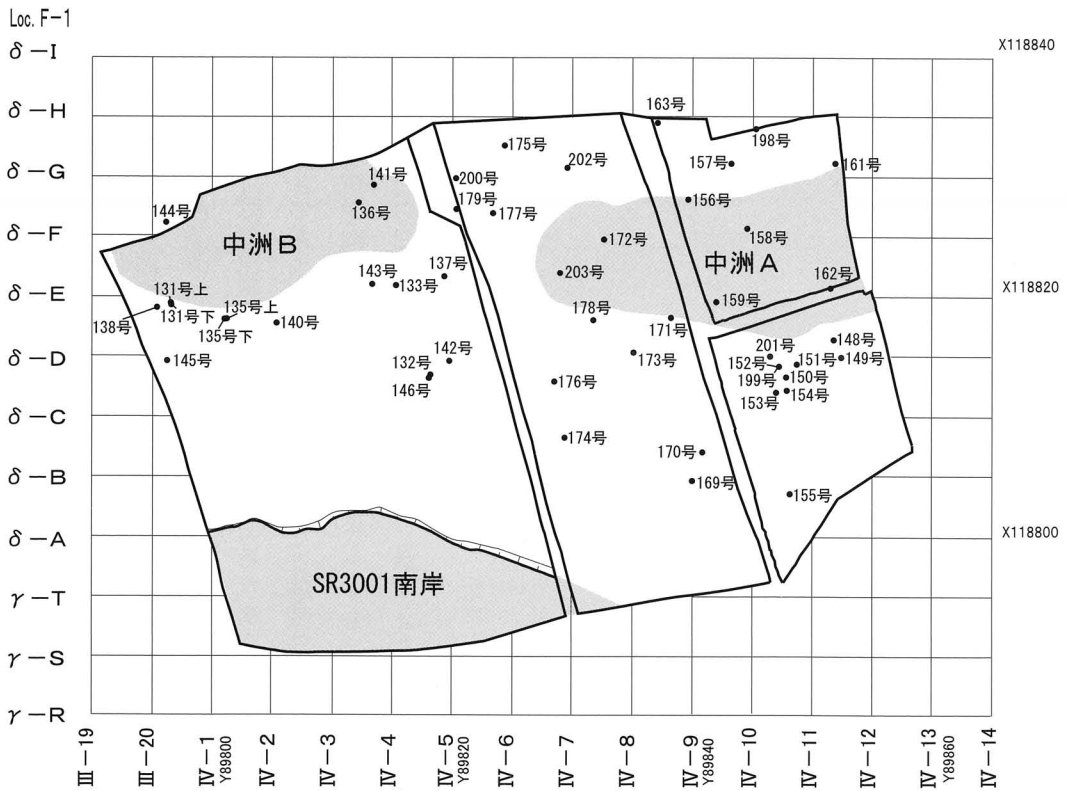
V層段階では、木簡は南岸の傾斜部分ではほとんど出土していないが、流路内の広範囲で出土している（第四九八図の下）。その中でも中洲Aの周辺には木簡の分布が多くみられる。とりわけ勘籍木簡（二〇一号）を含む九点からなる集中部が中洲の南側にみられるのは注目される。また西の中洲B周辺にも集中部がみられる。このことから、これらの木簡が主に南東方向からの流れによって運ばれてきたもの、中洲から

投棄されたものという二つの可能性が考えられる。しかし、多くの木簡の出土状況が散発的であることから、投棄地点は距離の離れた上流であると推測される。また、中洲Aの北側にも木簡が出土しているため、東からの流れにも木簡は含まれていたと考えられる。

IV層が堆積した時期には中洲A・Bはほとんど埋没していたことが、断面の観察で確認された。木簡も中洲上から出土している（第四九九図の上）。この時期の流れを平面的にとらえられなかったが、主に南東方向からの流れであったと推定される。またIII層段階では、木簡の分布が南西から北西方向に細長く分布していることから、かなり流れの幅は狭くなっていたのではないかと考えられる（第四九九図の下）。



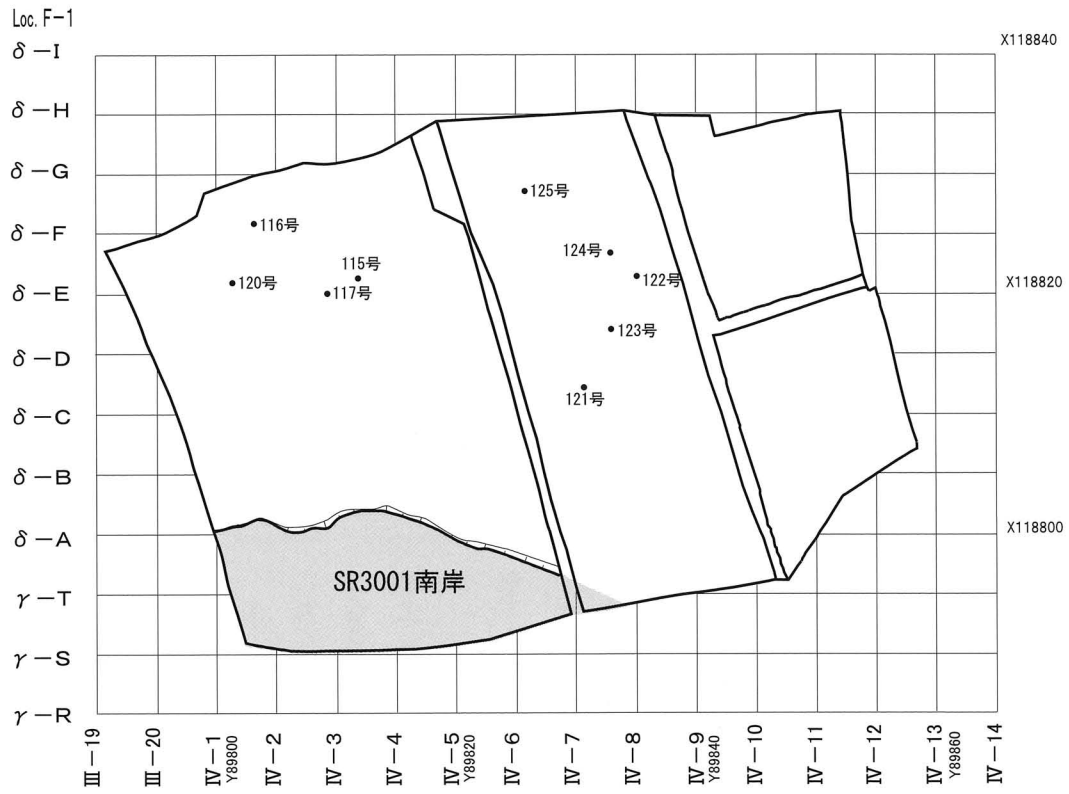
VI層上面の微地形



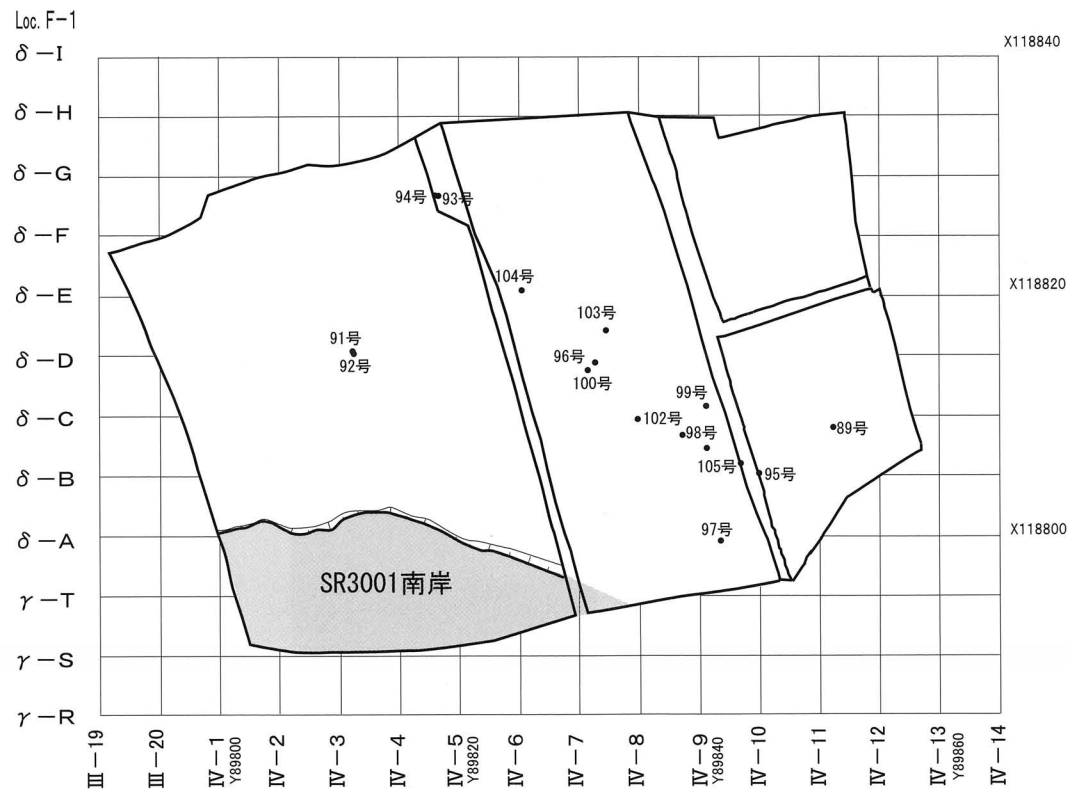
V層

第498図 自然流路 (SR3001) の地形とV層出土木簡分布図





IV層



III層

第499図 自然流路 (SR3001) III層・IV層出土木簡分布図

## II 出土木簡の観察と釈文

### 一 出土木簡の概要

表22 各層位の木簡出土数

近世以降	2
II層	2
III層	21
IV層	19
V層	73
VI層	1
VII層	5
VIII層	1
IX層	5
合計	129

出土した木簡は、合計一

二九点である。この中の一二五点はS R三〇〇一から出土し、三点がS R四〇〇一、一点がS R五〇〇一からである。先の国道一九二号南環状道路部分で出土し

### 二 出土木簡の釈文と内容

以下、八七号木簡から二一五号木簡について釈文を掲げ、簡単な説明を加えるが、その際に関連して国道一九二号南環状道路から出土した八六点にも言及することがある。一号木簡から八五号木簡については、二〇〇二年に『観音寺遺跡I（観音寺遺跡木簡篇）』（財徳島県埋蔵文化財センター 二〇〇二）として公刊されたので、それらの木簡は一号木簡（南）のように記す。

また凡例にも示されているように、八七号木簡から二一五号木簡は保存処理に際し、事前と事後に和田 萃氏・独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所の都城発掘調査部史料研究室・当センター職員で、釈文および内容の再検討を行った。本稿は、その際の渡辺晃宏氏の記述をもとに大橋が本文を作成し、和田氏が加筆、監修したものである。なお、二〇一号木簡（勘籍木簡）の解説は、全て和田氏による。

なお検討会の参加者は次の諸氏である（敬称略）。

京都教育大学名誉教授 和田 萃

都城発掘調査部史料研究室 渡辺晃宏、馬場 基、市 大樹、山本

崇、浅野啓介

（財徳島県埋蔵文化財センター） 藤川智之、服部 靖、大橋育順

た木簡が八六点であったため、木簡番号は八七号木簡から二一五号木簡になる。各層の出土数は表二二の通りであるが、S R四〇〇一・S R五〇〇一から出土した木簡は、時期的にIX層に対応するものとして扱った。赤外線写真で墨痕を確認したが文字と判断しなかったもの、形状や表面の削りが木簡と共通しているが、墨痕が確認されなかったものについては、その他の項目に分類した。各層位の年代は共伴遺物から判断し、II層は中世以降、III層は一〇世紀前半～一一世紀初頭、IV層は九世紀後半～一〇世紀前半、V層は八世紀後半～九世紀前半、VI層は八世紀半ば、VII層は八世紀第2四半期、VIII・IX層は八世紀前半以前の年代を想定した。

八七号木簡

・「国府小三かんおんじ」  
 稲飯昭代  
 「  
 ・「国府小三かんおんじ」  
 いない  
 「

一四八×五四×六〇一一

完形。文字面は両面とも、ほぼ平坦。上端中央部に穿孔がある。小学校での水泳授業時に使用する「命札」と呼ばれるものである。孔に紐を通して持ち運び、遊泳中はプールサイドに立てかけて遊泳中であることを示す。学校名、学年、名前を両面に書き、毎年各自で作成した。裏面の「いない」は「稲飯」の意。「国府小」は、観音寺遺跡の所在する南環状道路の東約一・五kmに所在する徳島市立の小学校（徳島市国府町中）である。「かんおんじ」は集落名「観音寺」。昭和三〇年代のもので、発掘調査で遺物として取り上げられた最新の木簡である。現代の舌洗川の堆積層から出土。

八八号木簡

〔東郡カ〕  
 「阿波国名□□国府村大□□□□」  
 「

(一五五)×四八×八〇八一

分厚い板に記された木簡。四周削りだが、右辺上部と左辺下部に僅かに欠損がある。左辺上部がやや細くなっているが、原形を留めるとみられる。中央部右寄りに穿孔が一つあるが、木簡の用途に伴うものか否かは不詳。

木簡としては大きさの割に異例に分厚く、出土状況や保存状況からも古代の木簡でない可能性が高い。「国府村」は遺跡近傍の村名であり、近世から近代にかけての遺物と考えられる。一行目「大」以下は地名、二行目は字数は定めなかったが、人名の可能性が考えられる。現代の舌洗川の堆積層から出土。

八九号木簡

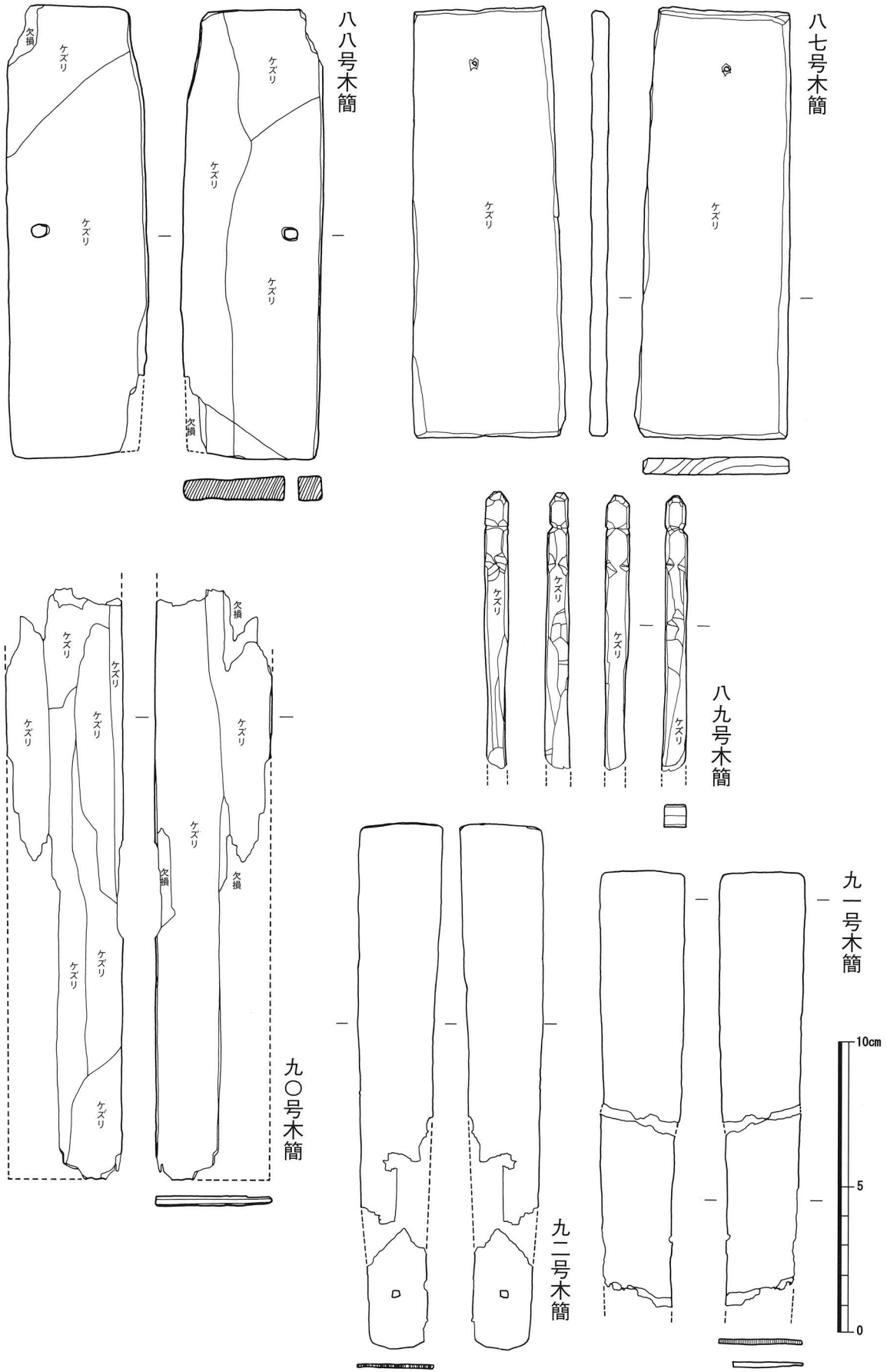
・ □ □ □ □ (表面)  
 ・ □ □ □ □ (左側面)  
 ・ □ □ □ □ (裏面)  
 ・ □ □ □ □ (右側面)

(九五)×八×八〇六一

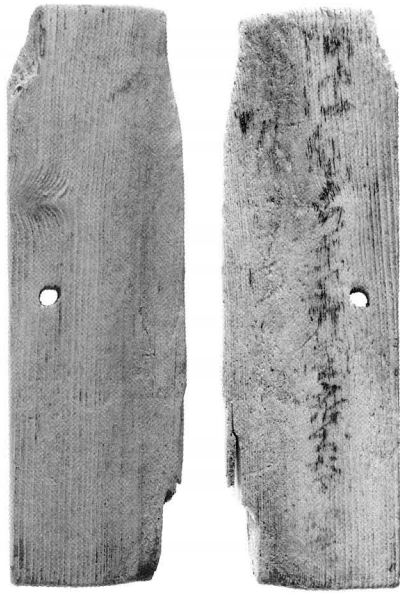
小型の角塔婆状木製品である。上部に二段の切り込みがあり、一つ目の切り込みの上部に一文字、一つ目と二つ目の切り込みの間に一文字、二つ目の切り込みの下部に二文字程度の墨痕がある。表面は上部の二文字は梵字、下部の二文字は漢字とみられる。裏面末尾は「人」の可能性がある。また、表面末尾は三文字で「□十一」の可能性もある。木簡の下端は欠損している。Ⅱ層出土の木簡。



第五〇〇図 木簡実測図①



図版八二



八八号木簡



八七号木簡



九二号木簡



九一号木簡



八九号木簡



九〇号木簡

九〇号木簡



(二〇四)×四一×三三 〇八一

三片が接合する。上端は折れ、右辺の大部分は割れているが、下端と左辺は削りにより原形を留める。やや小振りの文字で記されるが釈読はできない。Ⅱ層出土の木簡。

九一号木簡

「望丸物マ望丸

(二四六)×二九×一一 〇六一

本遺跡で出土した墨書のない檜扇と比較して、薄手で幅広のものに墨書したもの。中央部で折れて二片が接続するが、下端は欠損。次の九二号木簡にも、「物マ望丸」がみえている。一〇世紀前半～一一世紀初頭の阿波国衙の官人とみられる。檜扇の用途の一端を示す。阿波国における物部姓は、一六一号木簡に名方郡櫻間郷の「物マ□嶋」、海マ郷（阿波国那賀郡か）に「物部首魚万呂」（奈良国立文化財研究所 一九八七『平城宮発掘調査出土木簡概報(19)』二六頁下段）、阿波郡秋月郷に「物マ小龍」（木簡学会 一九九二『木簡研究』一四号 一三四頁）、阿波郡高井郷に「物マ」（木簡学会 一九九八『木簡研究』二〇号 三三三頁）がみえている。Ⅲ層出土の木簡。

九二号木簡

・「望丸物マ望丸

・「六月十六日三斗□下□三升食米□□

(二八三)×二九×一一 〇六一

九一号木簡と同一の檜扇を構成する骨材の両面に墨書がある。四片からなり、うち二片が接合する。下端部に、骨材を綴じるための小穴を穿つ。Ⅲ層出土の木簡。

九三号木簡

〔勘省掌カ〕

□□□山得人

書生安曇豊主

二二五×六七×七 〇一一

下端と左辺は削りで整形されているが、上端は二次的切断か。右辺に削りの痕跡はみられない。下端部が曲線を呈しているので、曲物の底板など転用材の可能性もある。大型の文書木簡の下端部の断片とみられる。中央から派遣された某省の省掌と国衙の書生が、何らかの勘検作業を実施したことを示すものか。一一四号木簡に、名東郡の人である「安曇継見」がみえる。名東郡は国衙の所在地であったから、同郡の白丁課役の民が国衙の書生として任用されていた可能性もある。Ⅲ層出土の木簡。



九四号木簡



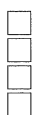
(五五)×一八×三 〇三九  
二片が接合する。上端と左右両辺は削り、下端は折れている。上部に切り込みがあり、付札である。Ⅲ層出土の木簡。

九五号木簡



(二七四)×(三二)×五 〇八一  
上下両端は折れ、左辺は削り。右辺は割れているが、文字の一部がみえるため、木簡を割裁したものと考えられる。Ⅲ層出土の木簡。

九六号木簡



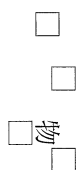
(五二)×二五×一 〇六一  
檜扇の骨の断片に墨書がある。上下両端が折れている。僅かな墨痕があるが積読は出来ない。Ⅲ層出土の木簡。

九七号木簡



(二九四)×(二三)×一一 〇八一  
上下両端折れ。左辺削り。右辺割りか。二片接続。二文字目は「返」「互」など、三文字目は「枝」「板」「枚」など、六文字目は「枝」「板」「枚」「被」などの可能性がある。いずれにしても、同じ文字が繰り返して記されているようであり、習書木簡の可能性が高い。Ⅲ層出土の木簡。

九八号木簡



(一〇)×一九六×二 〇八一  
三片が接合する。上下両端が折れ、左右両辺は二次的に削られている。両面ともに縦長の削り面で構成される。薄い横材木簡の断片である。左から二行目の文字は「役」「伎」などの可能性がある。Ⅲ層出土の木簡。

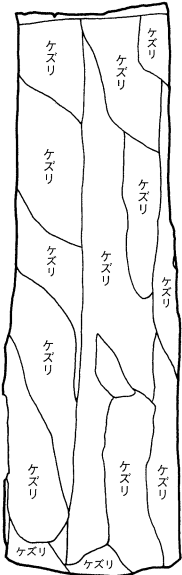
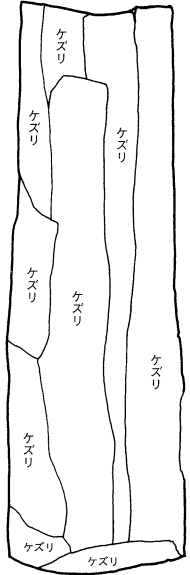
九九号木簡



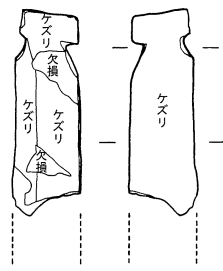
(三三五)×二二×五 〇八一  
二片が接合する。上下両端は折れ、左右両辺は削りによる。両面ともに、縦に長い削りによって整形される。中央部に「小」のような字画が

第五〇一図 木簡実測図②

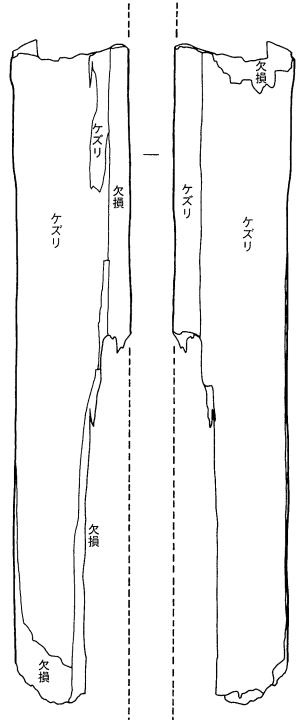
九三号木簡



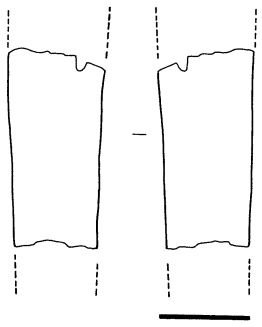
九四号木簡



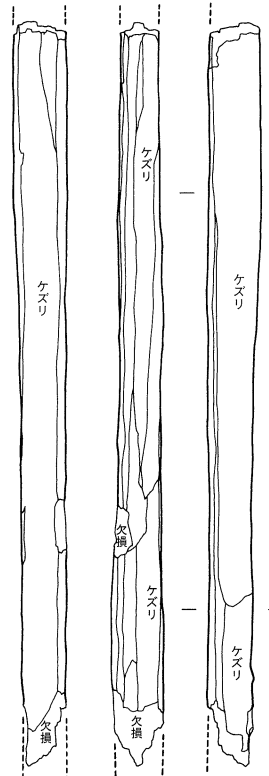
九五号木簡



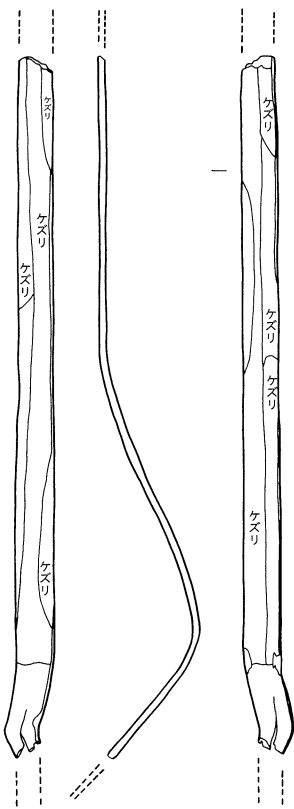
九六号木簡



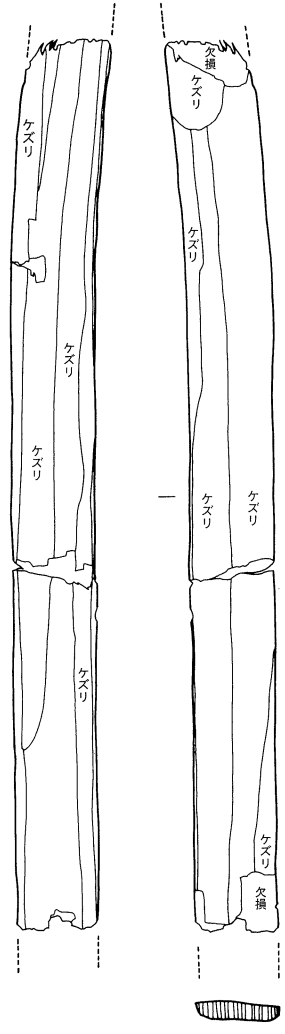
九七号木簡



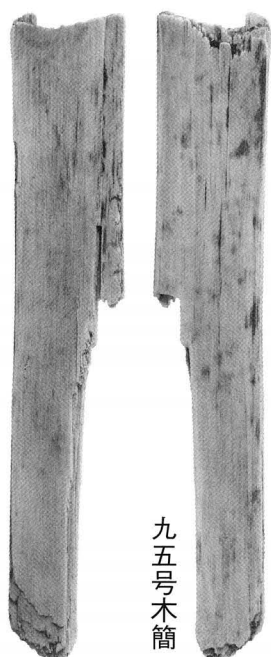
九八号木簡



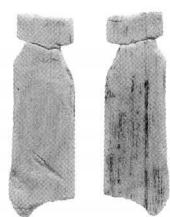
九九号木簡



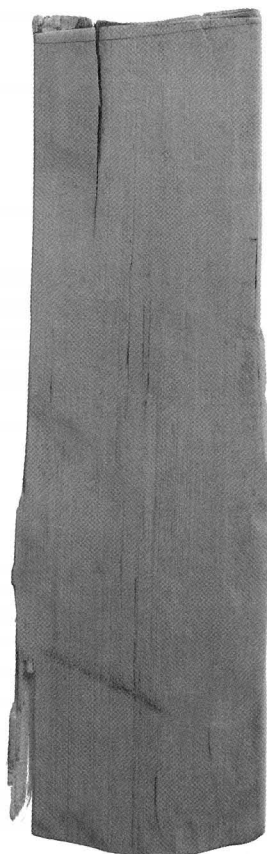
图版八三



九五号木简



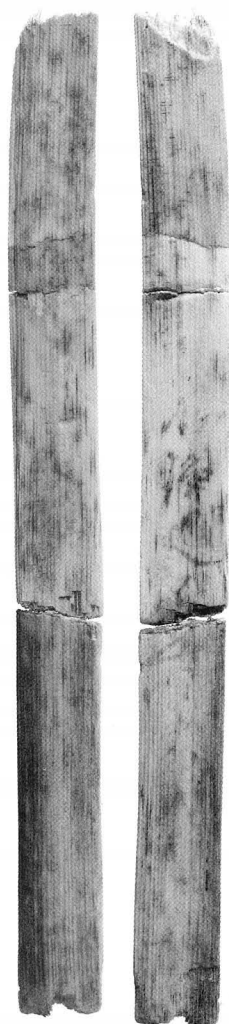
九四号木简



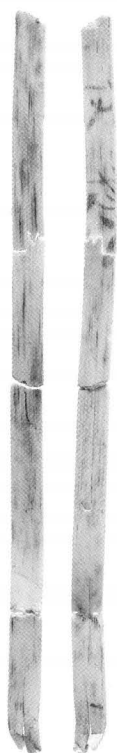
九三号木简



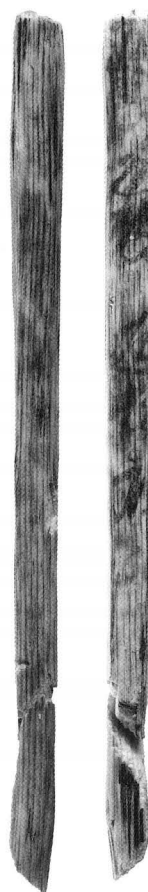
九六号木简



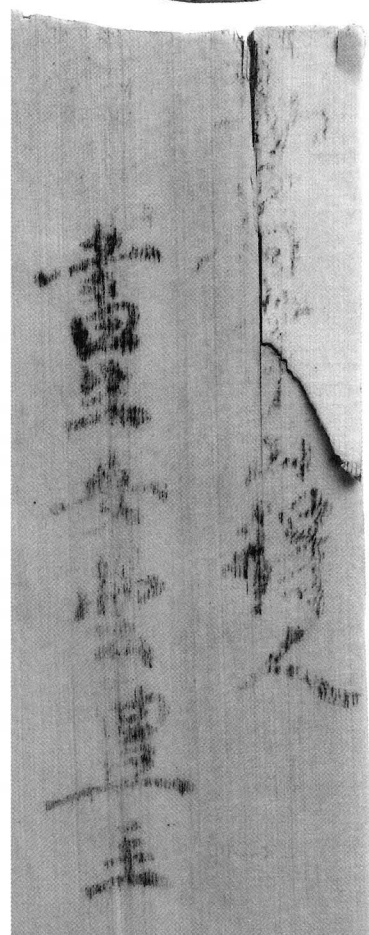
九九号木简



九八号木简



九七号木简



九三号木简放大



残るが、「北」「心」などの可能性もある。三文字目は「迎」、四文字目は「奉」「来」などの可能性がある。裏面には墨痕がない。Ⅲ層出土の木簡。

一〇〇号木簡



(一一六)×一八×三 〇五九

上端は折れているが、左右両辺は削り。下端は左右からの削りにより山形に尖らせる。文字面は細かな削り面によって整形されている。わずかに墨痕がみられるが釈読はできない。Ⅲ層出土の木簡。

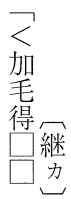
一〇一号木簡



(八二)×一三×三 〇一九

上端と左右両辺は削り、下端は折れている。縦長の削りによって両面が平坦に整形されている。表面一文字目は「里」を左肩にもつ文字の可能性がある。Ⅲ層出土の木簡。

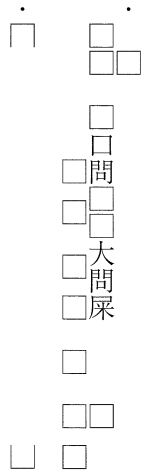
一〇二号木簡



(八七)×二九×五 〇三九

上端と左右両辺は削り、下端は折れ。上端には両側からの切り込みが施され、付札の形状を呈する。文字面には縦長の削り面がみられるが、裏面には整形はみられない。「加毛得継」は人名であろう。なお、阿波国名方郡に賀茂(刊本『和名類聚抄』では加毛)郷がある。Ⅲ層出土の木簡。

一〇三号木簡



(三〇五)×(四五)×三 〇八一

上下両端は折れ、左右両辺は割れている。薄い木簡で両面に削り面はみえないが、薄い墨痕で多くの文字が確認できる。習書木簡か。表面の上端と左行には同一文字の繰り返しが見られる。Ⅲ層出土の木簡。

一〇四号木簡

〔忌カ〕  
□□十□十一日平□□。』  
□。』

(二三八)×二〇×三 〇六一

檜扇の骨材の上端が折れたもの。檜扇である九一号木簡、九二号木簡は、下部に及ぶに従って狭まるが、本例は同一幅である。下端と左右両辺削り。二文字目は「忌」の可能性があり、物忌札とすれば、日付を書く珍しい事例となる。「日」の下は平姓で人名か。裏面の文字は、「西」または「物」、あるいは記号の可能性もある。Ⅲ層出土の木簡。

一〇五号木簡

阿波國司等可申上□

(二三二)×一六×四 〇八一

上下両端は折れ。左右両辺は削りが残る。表面には、ほとんど削り面はみえないが、文字の残りは良好である。末尾の文字は「事」「条」などの可能性がある。阿波國司らの申状。二次的に転用され、下部を尖らせたものか。Ⅲ層出土の木簡。

一〇六号木簡

□□□□□□□□

(九八)×一六×三 〇八一

上下両端は折れ、左右両辺は削り。中央部で折れ、左半分が欠損している。上片に三文字、下片に四文字残るが積読はできない。Ⅲ層出土の木簡。

一〇七号木簡

□□□□

(五二)×一三×一 〇八一

三片が接合するが、上下両端は折れている。左右両辺は削りによるが、二次的削りの可能性もある。墨痕が薄く積読はできない。Ⅲ層出土の木簡。

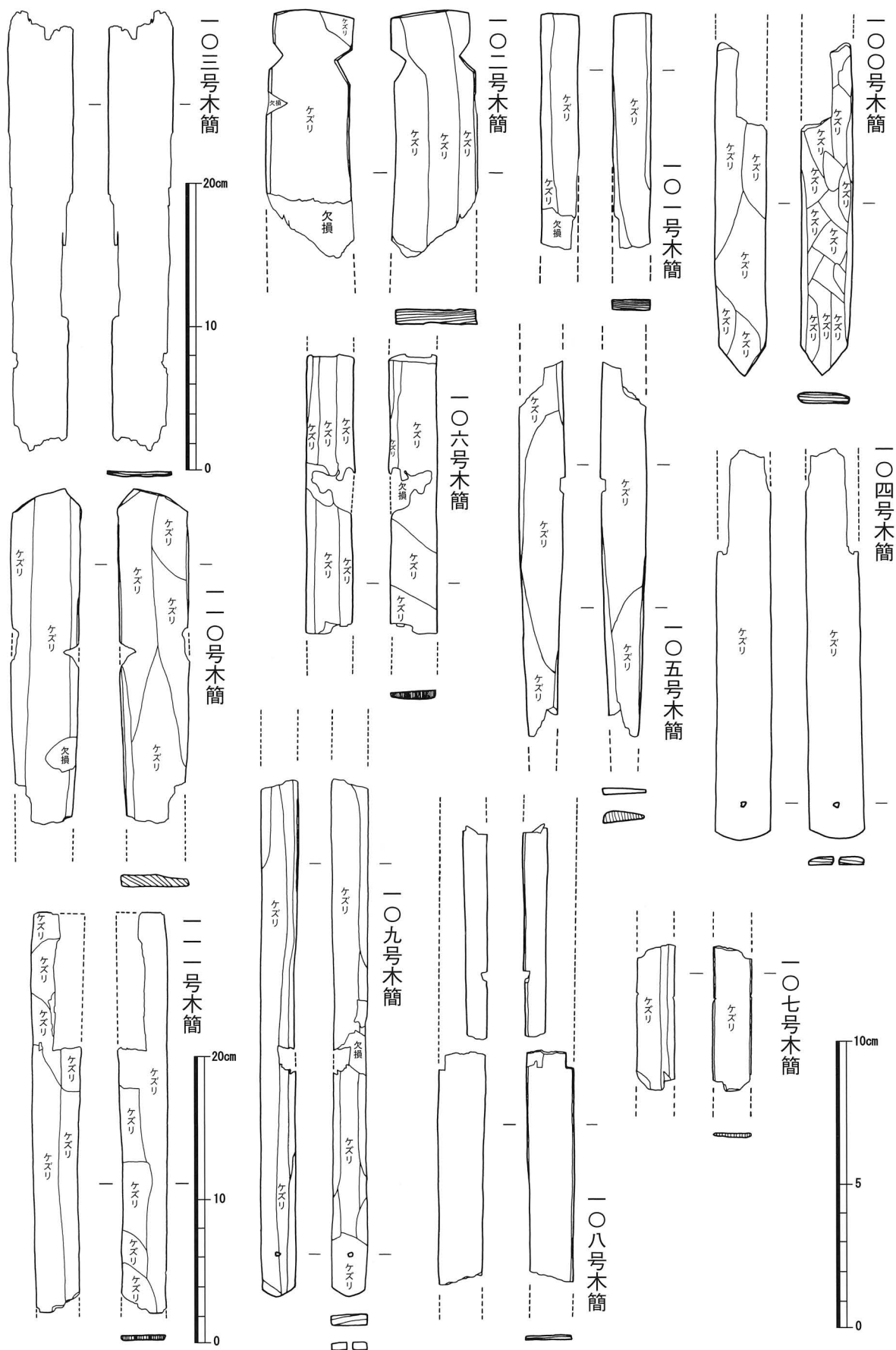
一〇八号木簡

□□□□

(七四十八二)×一七×二 〇六一

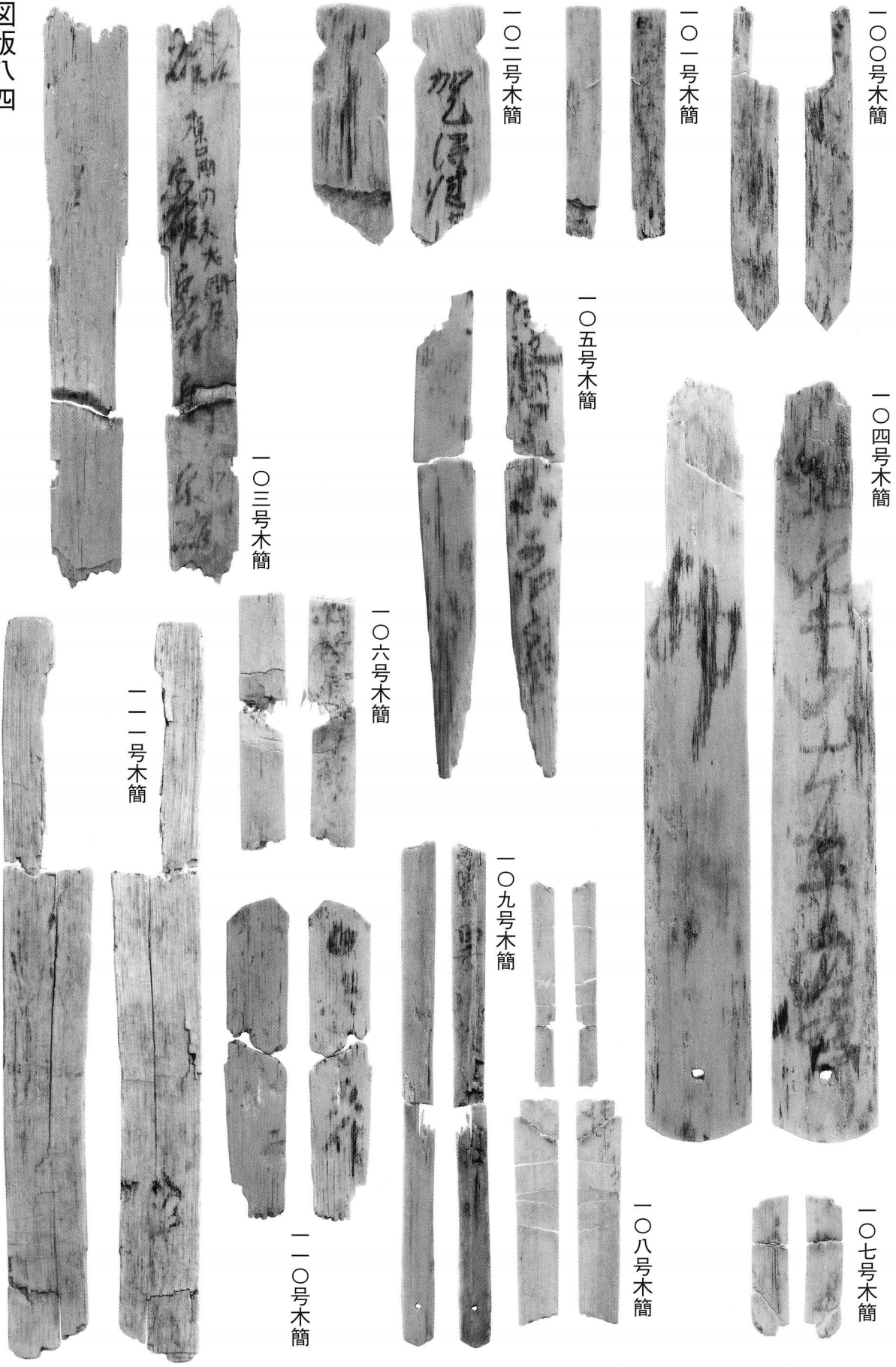
上下両端は折れ。左右両辺削りであるが、右辺は字配りからみて割れの可能性も残る。檜扇の骨に墨書したものと考えられる。一文字目は漢字、二文字目から四文字目までは仮名であろう。文字の部分の大半が欠損しているため積読はできない。Ⅲ層出土の木簡。

第五〇二図 木簡実測図③





図版八四



一〇九号木簡

□ □ 。

(二七九) × 一二 × 三〇六一

上端は折れ、下端と左右両辺は削り。檜扇の骨材に墨書したものである。途中に「田方」と読み取れそうな部分があるが、字画が整わない。Ⅲ層出土の木簡。

一一〇号木簡

「白米五斗

(一一六) × 二四 × 四〇一九

二片が接合する。上端は山形に削り、下端は折れ。左右両辺は削りにより原形を留める。両面とも縦長の削り面によって整形され、裏面の方が平坦である。Ⅲ層出土の木簡。

一一一号木簡

「八嶋……………□□」

(二七八) × 三四 × 三〇八一

上端と左右両辺削り。下端折れ。左辺上部を欠損する。「八嶋」は木簡の中央下寄りの位置に記されており、上部には大きな余白がある。なお、裏面には墨線状のものがあるが文字にはならない。曲物の側板か。Ⅲ層出土の木簡。

一二二号木簡

・ 「(絵)」

・ 「□□□」

一〇〇 × (二四) × 三〇八一

上下両端削り。左右両辺割れ。馬または鳥の絵の描かれた板の裏面に、木目と直交する方向に墨書がある。絵は馬とみると文字とは天地の方向が逆で、顔を左向きに描く。鳥の場合は木目方向の絵とも解釈できる。Ⅳ層出土の木簡。

一一三号木簡

「白米處」

一八六 × (四三) × 七〇六五

矩形の材の一端に、軸状の部分を作り出す用途不明の木製品。矩形部分に墨書がある。矩形部分の左辺のみ割れ。その他の部分は原形を留める。二片接続。矩形部分の右辺には、木釘状のものが詰まった孔が三カ所ある。また、上端に二カ所、下端に一カ所の方形の切り欠きが残る。これらもあるいは孔の痕跡の可能性もある。軸状部分が中心に位置していたとすると、頭の部分は本来方板状を呈し、上端に三カ所、及びこれに対応する下端に二カ所(軸の取り付き部分にはなし)の切り込みがあったとみられる。形態としては題籤軸状を呈するともいえるが、題籤に相当する部分が異例に大きく、また軸部分が短い。前記のような類例のない加工も施されており、題籤軸とは考えにくい。墨書はこの木製品に二次的に転用する前のものの可能性もある。国衙に置かれた「所」

の一つか。IV層出土の木簡。

一一四号木簡

〔名カ〕

□東郡人安曇継見

三七二×(四七)×七 〇八一

上端と右辺は削り。右上はやや丸みを帯びる。下端は二次的な切断か。左辺割れか。二片接続。厚手の板の右上部に墨書されている。名方郡は八九六年(寛平八)に名東・名西二郡に分割されており、この木簡はそれ以降のもの。九三号木簡に、「書生安曇豊主」がみえる。IV層出土の木簡。

一一五号木簡

「。□□」

一八四×四〇×九 〇一一

厚手の板の四周を削り、上部には右上・左下に並ぶ二つの穿孔がある。下端は両角を削り、稜をもつ円形に整形している。上部の二つの穿孔は木簡の用途に伴うものか否かは不詳。木簡の幅からみて、比較的大型の木簡を截断して二次的に整形している可能性がある。IV層出土の木簡。

一一六号木簡

□□ □□

(二四八)×八×四 〇三二

上端は削り、下端が折れている。左右は二次的な削りにより、細長く整形されている。IV層出土の木簡。

一一七号木簡

・ < □ □  
・ < □ □

(八一)×二二×四 〇三九

上端と左右両辺は削り、下端は欠損している。切り欠きは深く、上部が極端に小さい付札状を呈する。表面は摩滅しているが、両面に僅かな墨痕が残る。IV層出土の木簡。

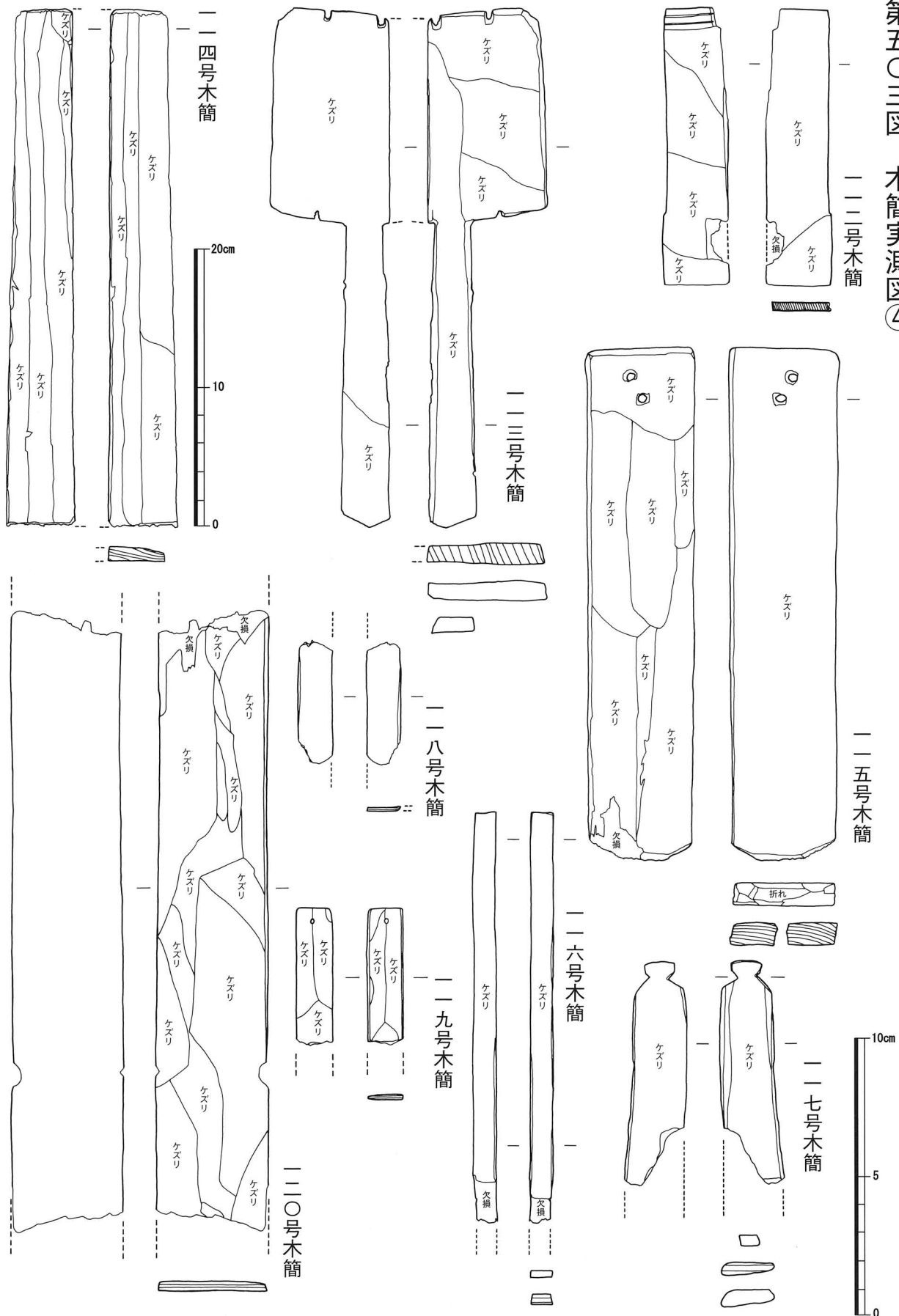
一一八号木簡

□

(四四)×(二二)×一 〇八一

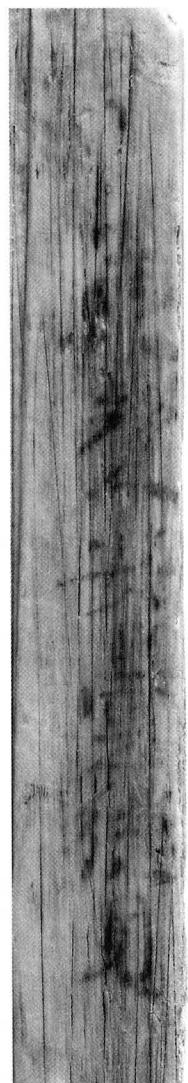
上下両端は折れている。左辺は削り、右辺は割れである。薄い材に僅かに墨痕が残る。IV層出土の木簡。

第五〇三図 木簡実測図④

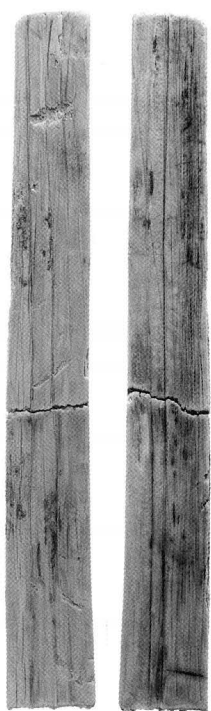




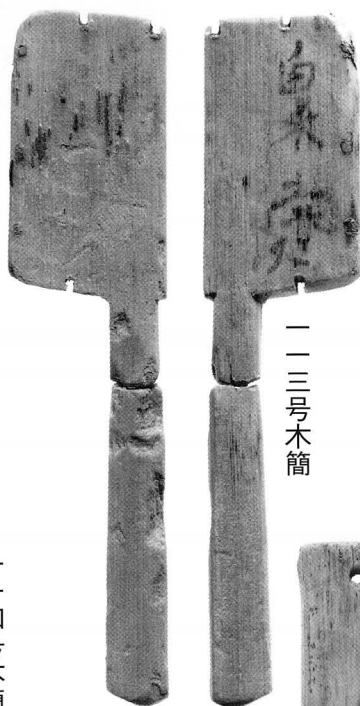
图版八五



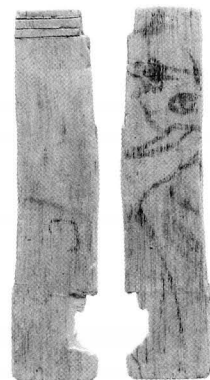
一一四号木简放大



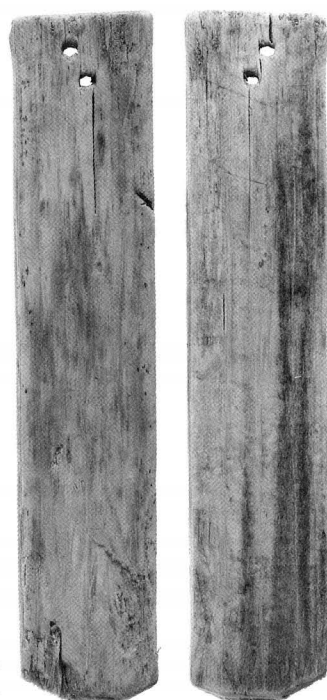
一一四号木简



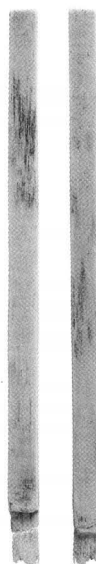
一一三号木简



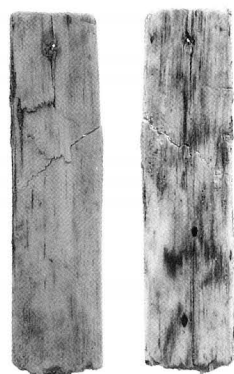
一一二号木简



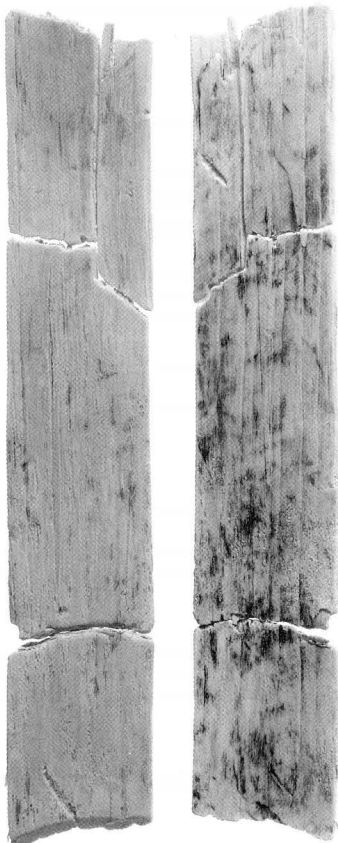
一一五号木简



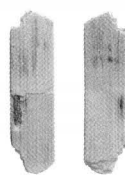
一一六号木简



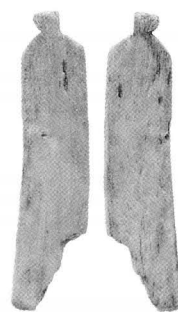
一一九号木简



一二〇号木简



一一八号木简



一一七号木简

一一九号木簡



(四九)×一三×二〇一九

上端と左右両辺は削り、下端は折れている。上端に小さな穿孔があるが、木簡の用途に伴うものかは不明である。両面に縦長の削り面がみられる。僅かに墨痕が残り二文字目は「川」、三文字目は「口」、「内」の可能性はある。IV層出土の木簡。

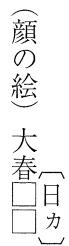
一二〇号木簡



(二二四)×四一×三〇八一

四片が接合する。上下両端は折れ、左右両辺は削りによる。文字面は大まかな削りによって整形され、表面は荒れている。複数の薄い墨痕がみられるが、釈読はできない。第一行二文字目は「道」などの可能性がある。なお阿波国板野郡出身の采女、栗直若子は栗凡直若子、板野采女栗国造若子とも記された。同郡には栗凡直のほか凡直がみえ、また養老七年の阿波国造墓碑に、「阿波国造名方郡大領正□位下栗凡直弟臣」とみえる。IV層出土の木簡。

一二二号木簡



(二二八)×二三×二〇六一

人形に墨書したものの。上端と左辺は原形を留めるが、下端は折れ右辺は割れている。眉毛と目が墨書され、左辺には腕の表現の切り込みが残る。文字は右辺下部に残存するが、右半分が欠落しているため、釈読は困難である。四文字目は二文字の可能性はある。IV層出土の木簡。

一二三号木簡



(二〇八)×二六×三〇八一

上下両端が折れ、左辺は削り、右辺は割れている。文字面には細かな削り面があり、墨痕が明瞭にみえる。文字の中央で半裁されているが、木偏・手偏・牛偏の可能性はある。IV層出土の木簡。

一二三号木簡

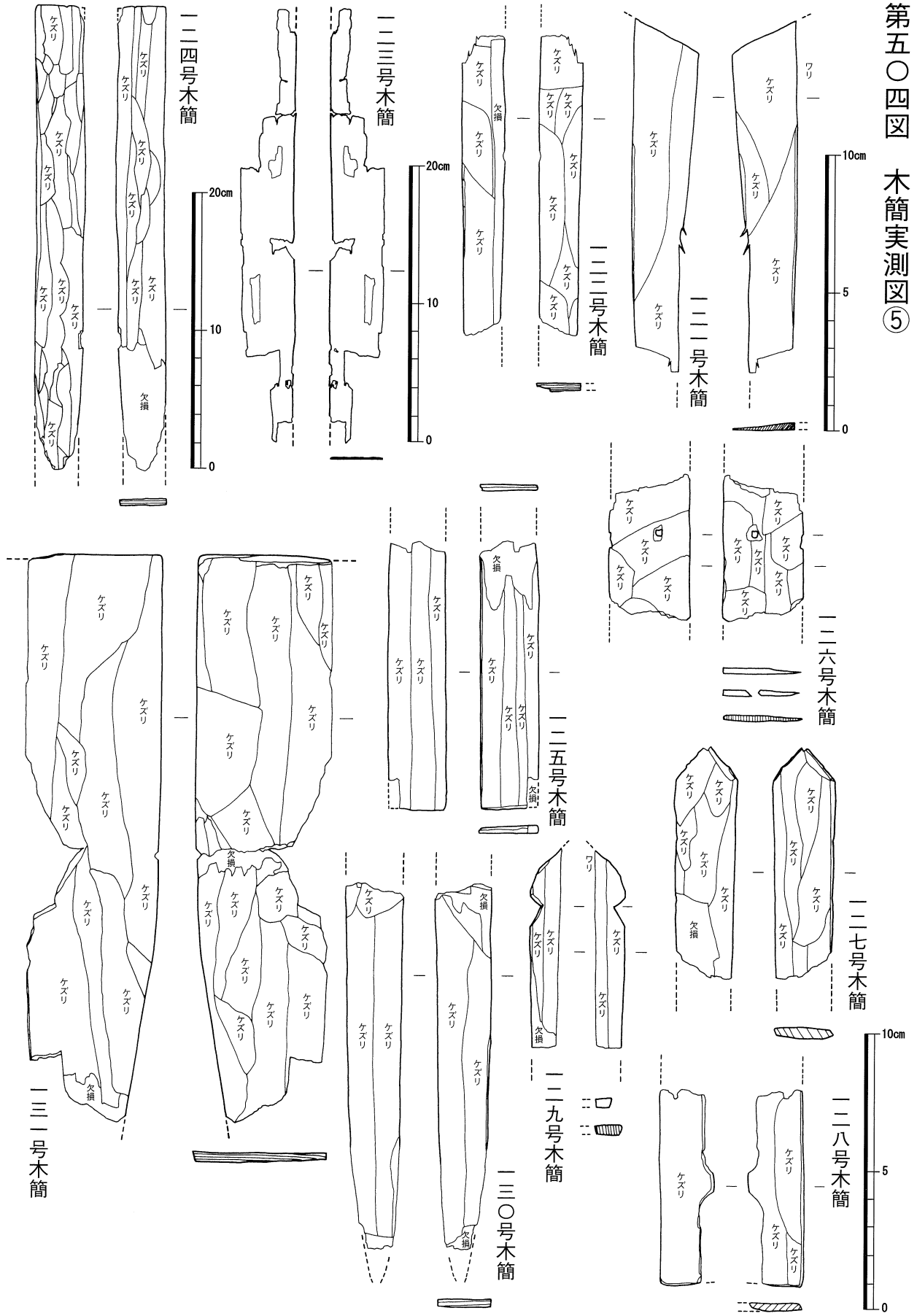


(二二五)×三九×二〇八一

薄い板が細片に分離し、一一の断片が接合する。欠損部分も多いが、残存部分から上端と左右両辺の削りが確認できる。下端は折れ。下部に

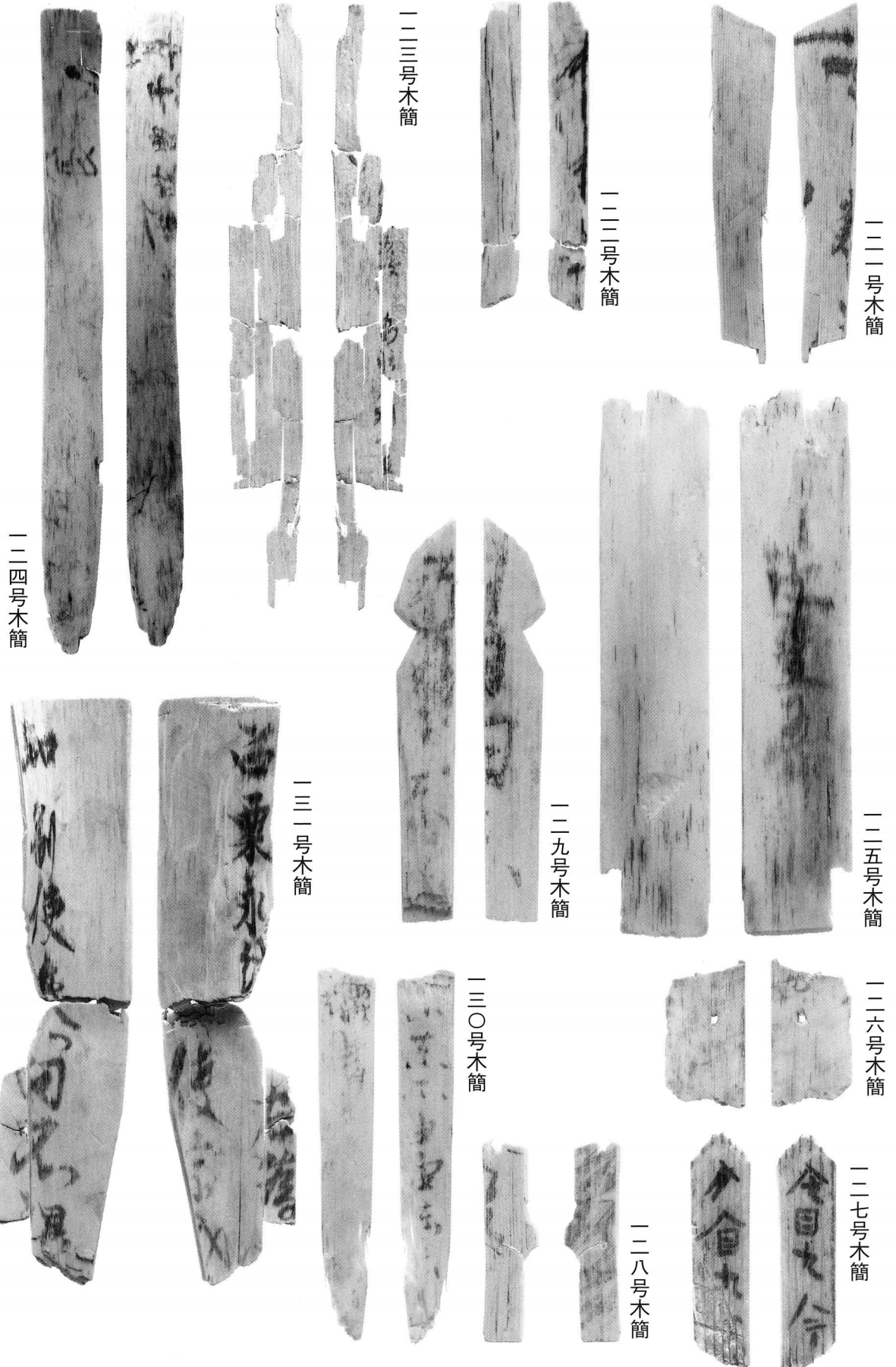


第五〇四図 木簡実測図⑤





図版八六



一二八号木簡

・□□□  
・□□

(七二)×(二〇)×三〇八一

上端は折れ、左辺は割れている。下端と右辺は削り。表面とした面には削り面がみられるが、裏面は整形された痕跡はみられない。両面に明瞭な墨書があるが、欠損部が多く釈読はできない。IV層出土の木簡。

一二九号木簡

・<□日日□  
・<□□□

(七二)×(二二)×三〇八一

木簡を二次的に整形し、一端を宝珠形に尖らせて左右に一对の切り込みを入れたものの断片。下端切断。左辺割れ。一面に「日」を連書するが、呪符を二次的に整形することは考えにくいので、符籙ではなく習書とみられる。IV層出土の木簡。

一三〇号木簡

〔由カ〕  
・□□□由□□□  
・□申

(一一三)×二〇×三〇八一

上下両端折れ。左右両辺削り。文字は比較的明瞭だが断定は難しい。表面の二・六文字目は「東」または「束」の可能性がある。三文字目は同じ文字を崩して記している可能性がある。また、一文字目は「小」の字形のみが残り、これらと同じ文字の一部の可能性もある。いずれにしても、この木簡も同じ文字を繰り返して記しており、習書木簡の可能性が高い。IV層出土の木簡。

一三一号木簡

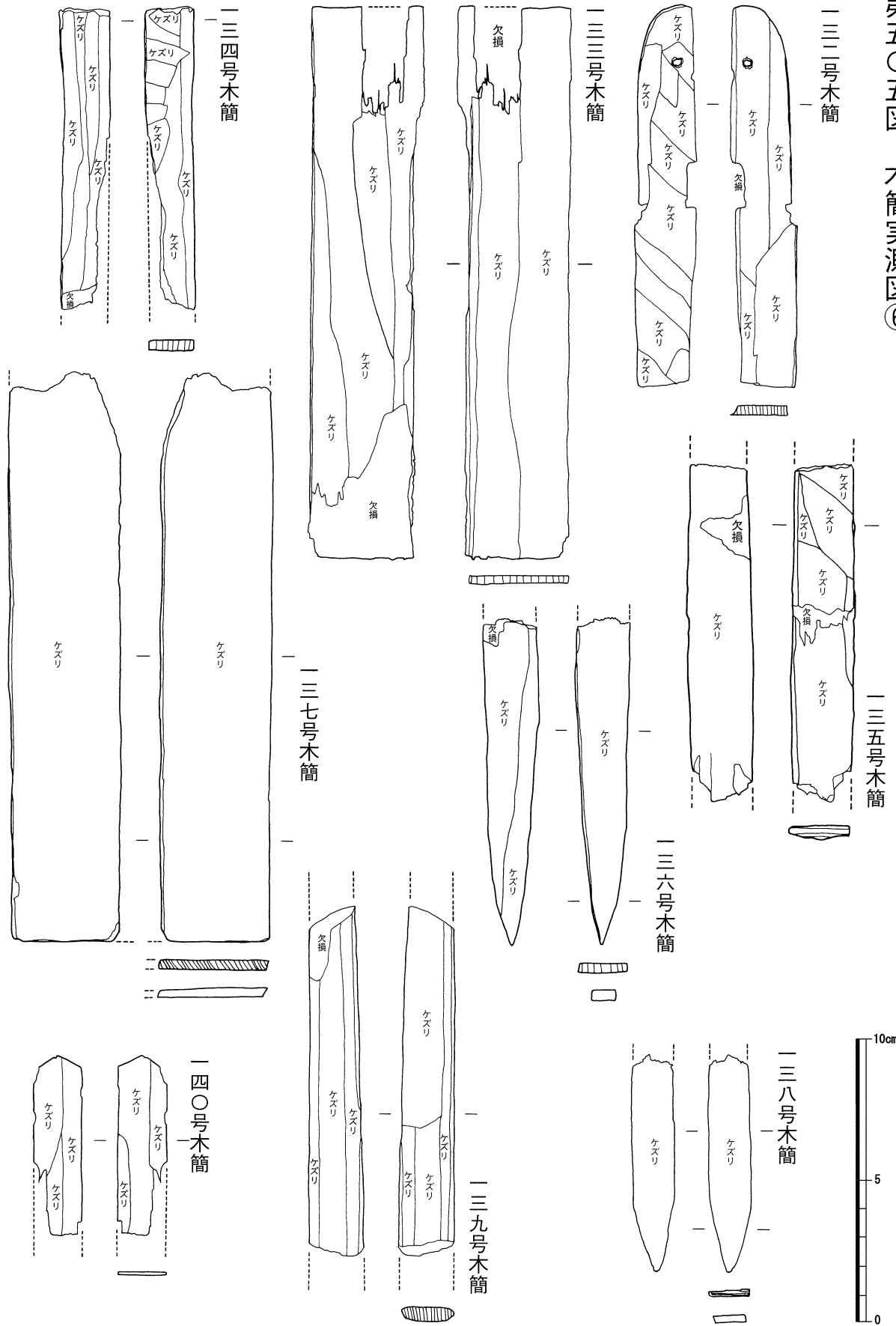
〔継カ〕  
・「召粟永□ 右為×  
使宗□×  
〔我カ〕  
〔知カ〕 〔得カ〕  
・□副使参向不□×

(二〇六)×(四九)×四〇八一

召文木簡の上部で、四片が接合する。上端と左辺は削り。下端は折れ、右辺は割れている。左辺下部は二次的にやや細く削り出されている。両面ともに縦長の大きな削り面で整形されている。残存する文字を中心に折り返すと幅八cm程度となり、長さも六〇cm(二尺)程度の大型の木簡であった可能性が高い。「召」+人名+「右為」という召文の書式は、福岡県長野角屋敷遺跡出土木簡に類例がある(財北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室 一九九九『長野角屋敷遺跡』)。板野郡の粟直、粟凡直、凡直、名方郡の粟凡直については、一二〇号木簡を参照。「宗我」については、「板野郡田上郷戸主宗何部麻呂」がみえる(木簡学会 一



第五〇五図 木簡実測図⑥





图版八七



一三四号木简



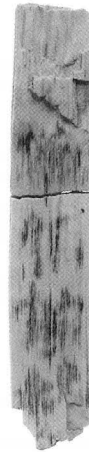
一三三号木简



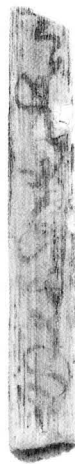
一三二号木简



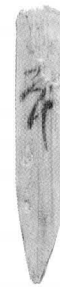
一三七号木简



一三五号木简



一三九号木简



一三八号木简



一四〇号木简



一三六号木简

一三五号木簡

〔雑雑カ〕

・ □ □ 雑雑物物 □ □



(一一八) × 二三 × 四 ○一九

二片が接合する。上端は切断され、下端は折れている。左右両辺は削り。両面ともに平坦に整形されるが、裏面の墨痕は薄く、判読しがたい。V層出土の木簡。

一三六号木簡

□ マ子人

(一一四) × 一八 × 四 ○五九

上端は折れている。左右両辺は削りで、下端は左右から削って尖らせる。肉眼では文字面全体に墨痕状のものが黒く付着するが、赤外線写真には写らず、墨ではない。一文字目は「王」または「生」の可能性があり、姓ミブの一部とみられる。一八六号木簡に名方郡井上郷の「生王マ満万呂」、三七号木簡(南)に「生マ諸光」がみえる。また「那賀郡武芸駅子戸主生部東方戸同部毛人」もみえる(木簡学会 一九八七『木簡研究』九号)。V層出土の木簡。

一三七号木簡

〔金カ〕

× 平寶字八年二月十日附使弓金マ □ 進上

(二〇〇) × (三八) × 三 ○八一

上端は欠損している。下端と右辺は削りにより原形を留めるが、左辺は割れている。ほぼ平坦な木簡の片面に僅かに墨書がある。長大な文書木簡の末尾部分の断片であろう。天平寶字八年は七六四年。名方郡井上郷に弓金・弓金マが分布していたことは、一七二号木簡や一八八号木簡、三四号木簡(南)で確認できる。V層出土の木簡。

一三八号木簡

五斗

(七七) × 一四 × 三 ○五九

上端は折れ、左右両辺と下端は削り。下端は左右から削って尖らせる。両面とも、ほぼ平坦な木簡で墨痕は明瞭にみえる。「五斗」とのみ記し、一一〇号木簡の記載様式と異なる。V層出土の木簡。

一三九号木簡

・ (絵カ)



(一一三) × 一九 × 五 ○六五

上端は折れ、下端は切断されている。左右両辺は二次的整形の可能性

がある。両面に僅かに墨痕が残るが釈読は出来ない。V層出土の木簡。

#### 一四〇号木簡

〔八万カ〕  
□□□郷□□□

(六四)×一七×一〇八一

上端と左右両辺は削り。下端折れ。上端は山形に削る。「八」にあたる部分はシミが多数あり、墨痕は判然としない。「八万郷」は『和名抄』にみえる阿波国名方東郡八万郷にあたる。徳島市中心部から、やや東南の眉山南麓に徳島市八万町が広がっている。郷名に続く二文字は「海マ」の可能性があり、「郷名十人名」の付札の類例の一つ。V層出土の木簡。

#### 一四一号木簡

〔生螺百貝〕

一一〇×二二×四〇三二

完形の付札木簡。上部に切り込みが施されている。文字面はほぼ平坦だが、左側に細かな削り面が残る。裏面は縦長の面のみで構成され、やや右下がりの刻線が一〇本引かれている。単なる傷とは思わず、荷物のチェックに関わる可能性がある。その場合、「螺」が一〇個単位で一〇の荷物に梱包されていた可能性を示唆する。「螺」は巻貝の一種の総称。カワニナ・ウミニナ・イソニナなどがある。現在でも吉野川の河口から一〇kmほどは汽水界で、春先には潮干狩りの光景がみられる。「貝」

が数詞として用いられているのも興味深い。阿波国衙と旧吉野川の距離は「生螺」を運べるほどのものだったことがわかる。国衙所在地の名方に海直が分布していた(『日本三代實録』貞観六年四月二十二日条)。V層出土の木簡。

#### 一四二号木簡

〔海部カ〕  
□□□□□□□□

(一〇六)×二〇×二〇八一

上下両端は折れ。左右両辺のみに削り。ほぼ平坦な木簡の片面に、僅かに墨痕がある。三文字目は「也」または「是」を旁らにもつ文字。V層出土の木簡。

#### 一四三号木簡

〔多比魚廿口国〕

一一二×二〇×五〇一一

四周削り。完形の木簡。「多比」は鯛のこと。「多比魚」は例が少ないが、藤原宮跡出土木簡に「多比魚十五斤」という類例がある(奈良県教育委員会 一九六八『藤原宮跡出土木簡概報』)。単位が口であるのは、「多比」の容器に付けた木簡だからか。末尾の文字は「国」で問題ない。国府用の意か。そうとすれば、併設していたとみられる名方郡家が念頭にあるのかも知れない。V層出土の木簡。

一四四号木簡

・「<皮麦五斗阿波郡□□」〔佐比カ〕

・「< 八月七□」

(九七)×一七×四 ○三二

上端と左右両辺は削り。下端折れ。「皮麦」は大麦の一系統で、裸麦に対応する。「佐比」は『和名抄』には対応する郷名はみえないが、六〇号木簡(南)に「佐井五十戸」がみえるのと関係があるかも知れない。

但し、同木簡に「佐井五十戸」と並んでみえる「波尔五十戸」と「高志五十戸」はともに名方郡内に対応する郷名があるので、「佐井五十戸」も阿波郡の郷名ではない可能性がある。なお、阿波国阿波郡の小麦の付札が平城京跡から出土している(奈良国立文化財研究所 一九九五『平城京木簡』一―一二六)。一二五号木簡に「□皮麦五斗」がみえる。V層出土の木簡。

一四五号木簡

「<□□□」

一三六×二九×五 ○三二

完形の付札木簡であるが、裏面の上部が欠損し剥離している。両面とも縦長の削り面で構成されるが、下端に小さな削り面がみられる。片面に薄い墨痕を確認できるので、積読は出来ない。V層出土の木簡。

一四六号木簡

五斗『知牛万呂』

(一〇四)×二八×四 ○五九

上端の大部分が欠損している。下端は左右両側から削って尖らせる。基本的に縦長の削り面で構成されるが、文字面の方がやや細かな整形が施される。郷名のみ、米の付札か。「知」は担当者を示す可能性がある。V層出土の木簡。

一四七号木簡

「<忌部郷長上 葭」

(八〇)×九×五 ○三九

下端が欠損した付札である。非常に幅が狭く、切り込みが浅い特異な形状をしている。両面とも平坦に整形されている。「忌部郷」は阿波国麻殖郡内の郷名。「郷長上」は郷長が貢進主体であることを示すとみられる。郷長が貢進主体となる付札は稀であるが、平城京出土木簡には類例がある(奈良文化財研究所 二〇〇一『平城宮発掘調査出土木簡概報(36)』五二など)。「葭」とした文字は、草冠に「口」を四つ書く字形。「葭」は「葦」に同じ。「葭」の付札は類例がない。「忌部郷」は阿波忌部氏の本地地で、吉野川市山川町忌部山を中心とした一帯。延喜式神名帳には、同郡に名神大社の忌部神社がみえている。中世には山崎市(忌部市)が立って賑わった。神社の裏山にあたる忌部山には忌部山古墳群が所在する。V層出土の木簡。

一四八号木簡

・ 櫻間漢人福継

〔得カ〕



(一〇二)×(一六)×二〇八一

上端は折れ。下端は本来尖っていたものを、二次的に削って平らにしたと考えられる。左右両辺は割れている。文字面は比較的平らで削り面が少ないが、裏面は全面を縦長の削りで整形される。裏面にも薄い墨痕がある。「郷名十人名」の付札の類例の一つ。「櫻間」は阿波国名方郡内の郷名。櫻間郷は一六一号木簡、一八五号木簡、一八七号木簡、二一一号木簡(「櫻間里」とする)にもみえる。「櫻間」の地名は、現在も徳島市国府町桜間として残り、すぐ西側の石井町高川原に桜間神社が鎮座している。「漢人」の氏名は三〇号木簡(南)、六六号木簡(南)に、また那賀郡にも漢人姓がみえている(『大日本古文书』一五―二七、二五―一四八)、延喜二年の「板野郡田上郷戸籍」には漢人直がみえる。V層出土の木簡。

一四九号木簡

「阿波國進 御贄甲羸壹缶」

(一一二)×一五×三〇三一

二片に分離し中間を僅かに欠くが、ほぼ完形。上下両端には、阿波国の贄に特徴的な台形状の切り込みを作ろうとする意図がみえる。両面は縦長の削りによって整形し、裏面の下半分に斜め方向の削り面がみえ

る。平城宮跡内裏北外郭官衙の土坑SK八二〇出土の阿波国の贄の木簡

に非常に似た書風を示す(奈良国立文化財研究所 一九六六『平城宮木簡』一―四〇三)。二条大路木簡に阿波国の贄でウニの付札が出土して

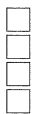
いる(奈良国立文化財研究所 一九九〇『平城宮発掘調査出土木簡概報

(22)』)。ウニについては、延喜主計式に棘甲羸・甲羸と表記する。徳島県

南部の海部郡美波町などではウニの漁獲量が多く、馬糞ウニは加工してビン詰とし、出荷されている。V層出土の木簡。

一五〇号木簡

如何

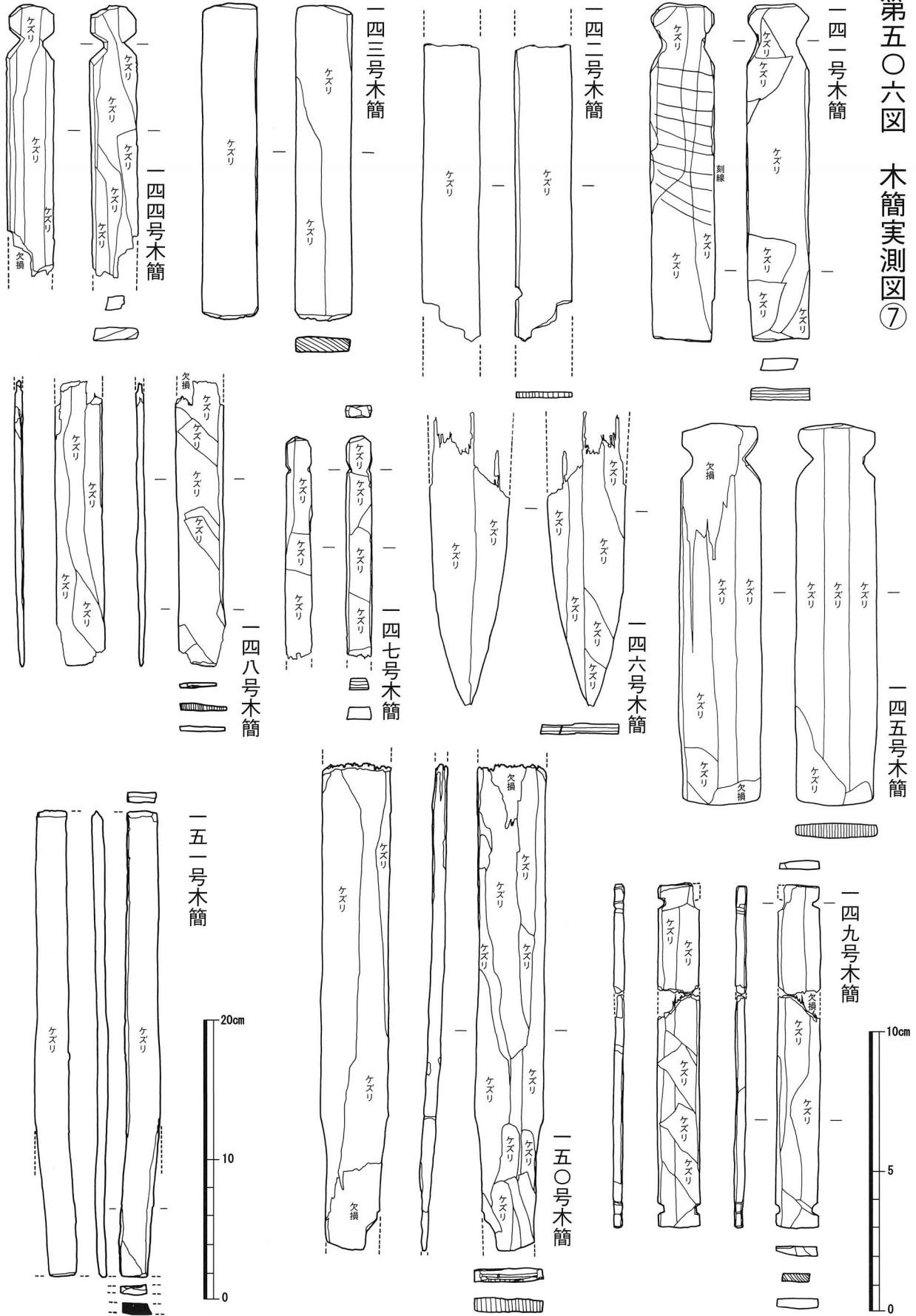


(一七四)×二四×五〇四九

上端折れ。下端は二次的整形の後、折れて表面が剥離している。左右両辺の削りによって封緘状を呈するが、裏面は割りのままではなく、縦長の削り面で構成されている。文字面は基本的には縦長の削り面で構成されるが、下端部に細かな整形がみられる。左上部の削り面によって、文字の左半分が削り取られている。割りを入れる前の封緘木簡の未製品に習書したもののか。V層出土の木簡。



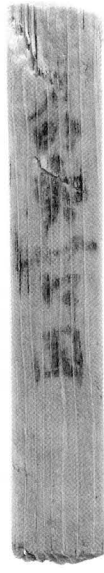
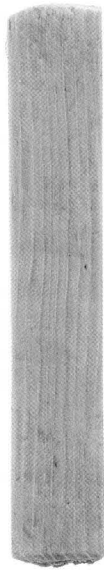
第五〇六図 木簡実測図⑦



图版八八



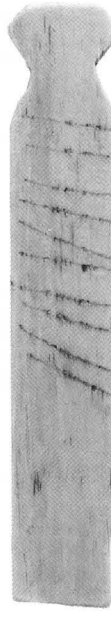
一四四号木簡



一四三号木簡



一四二号木簡



一四一号木簡



一五一号木簡



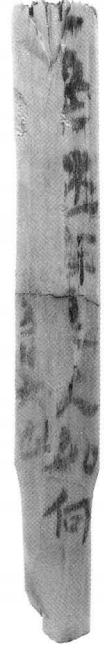
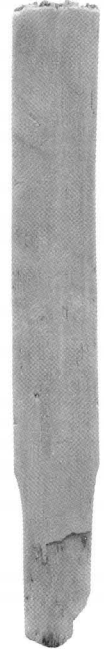
一四七号木簡



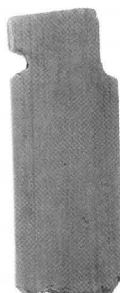
一四六号木簡



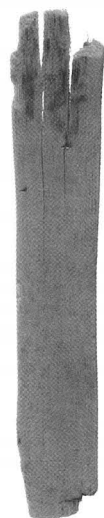
一四五号木簡



一五〇号木簡



一四九号木簡



一四八号木簡



一五五号木簡



(九三) × 二六 × 七 〇六一

題籤軸の題籤部分である。軸部は根本から折れている。題籤部の長さは約八五mmで異例に長大であるが、長岡京跡出土「東院内候所収帳」の題籤(木簡学会 二〇〇一『木簡研究』二三号)に類例がある。両面とも縦長の削り面で構成されている。墨痕が薄く釈読困難であるが、両面に文字があったと考えられる。V層出土の木簡。

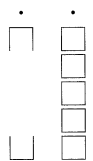
一五六号木簡



(八六十八〇) × 一六 × 五 〇一九

合計五片が接合するが、中間部分を欠損する。上端は切断され、下端は削り。左右両辺は二次的削りによって細くなっている。表裏両面に細かな削り面が連続している。上部の文字の右側には、線状の墨痕が残るが文字にはならない。文字の多くは「反」あるいは「支」のような字形を旁にもつが、左半分を欠き釈読はできない。下部は二行の可能性もある。V層出土の木簡。

一五七号木簡



(九八) × (五) × 六 〇八一

上下両端は折れ。左右両辺は二次的に割裁され、断面形状は文字面よりも側面の方が広い長方形を呈する。表面の文字は、いずれも偏のみ残るが釈読はできない。裏表で天地が逆の可能性もある。V層出土の木簡。

一五八号木簡



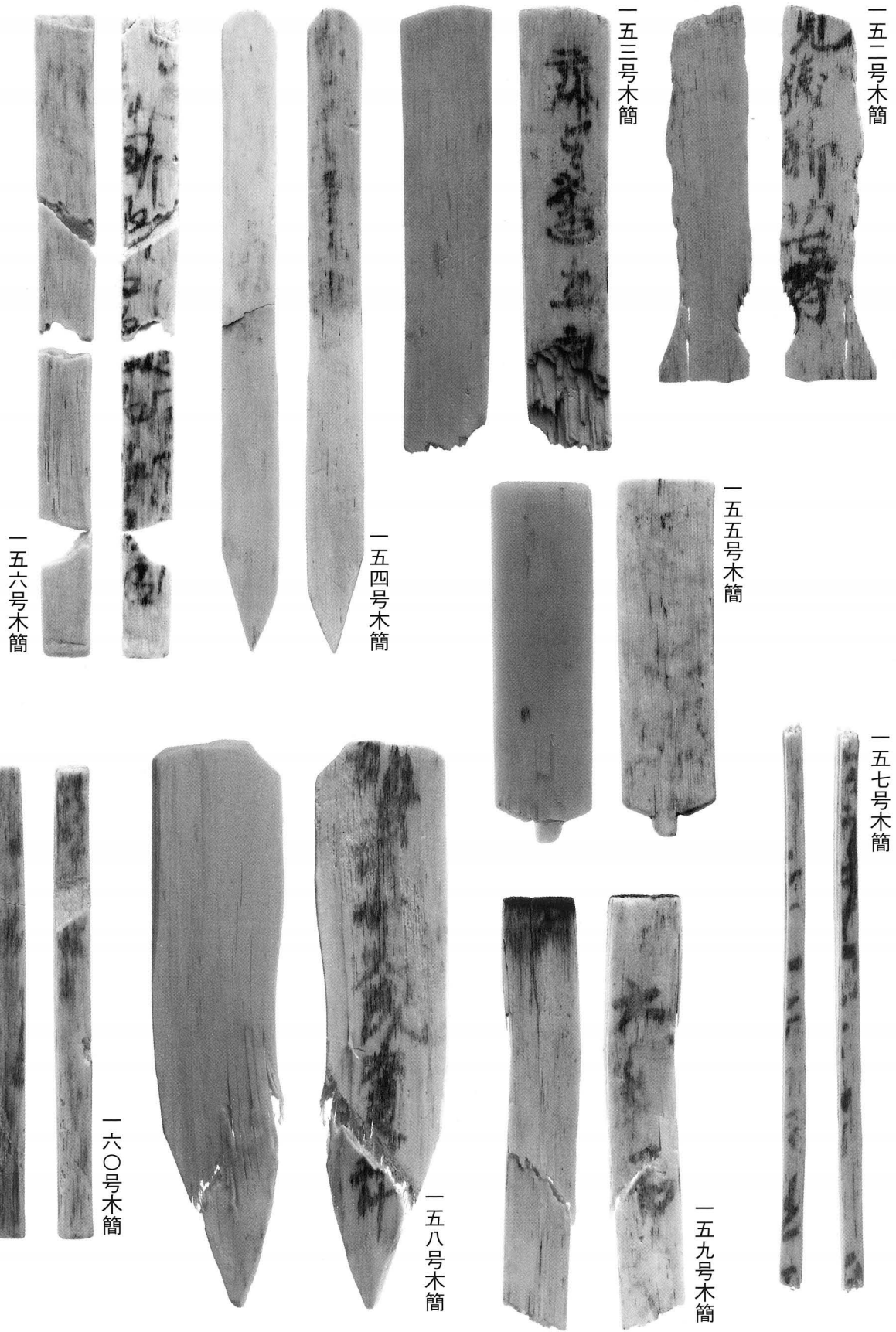
九九 × 二五 × 三 〇五一

上端は切断。左右両辺は削り。左の上端は角を少し削り、下端は左右両側からの削りによって尖らせる。両面ともに細い縦長の削りで整形されている。「埴土」は阿波国名方郡内の郷名。「大茂」の上の「大茂」は人名の一部か。「郷名+人名」の大麦の付札であろう。左辺上部の角が切り落とされており、切り込みの痕跡の可能性はある。高山寺本『和名抄』では、名方西郡(名西郡)に「埴郷」を掲げているが、刊本では「埴土郷」とする。六〇号木簡(南)に「波尔五十戸」がみえる。大麦の一系統である皮麦については、一四四号木簡を参照。V層出土の木簡。





図版八九



一五九号木簡

「大□石

(七五)×(二四)×四 〇八一

上端と左辺は削りにより原形を留めるが、下端は折れ右辺も割れている。裏面上端が黒く塗られているが、墨によるものかは不明である。人名か。V層出土の木簡。

一六〇号木簡

・□ □  
・□ □

八一×七×六 〇一一

完形。四周とも二次的な削りによって整形され、断面形状が正方形を呈する。二条大路木簡の算木と考えられている木簡(「安」「左」などと墨書のあるもの。このうち「安」とあるものに特に酷似する。木簡学会編 二〇〇三『日本古代木簡集成』)と形状が類似する。V層出土の木簡。

一六一号木簡

「櫻間物マ□嶋」

一四一×一九×三 〇五一

完形。上端は弧状に整形され、下端は左右両側からの削りによって尖らせる。両面には削りはみられないが、ほぼ平坦である。中央部で分離

して表面の一部が剥離している。「櫻間」は阿波国名方郡内の郷名。「郷名十人名」の付札。人名は「網嶋」または「継嶋」か。櫻間郷について

は一四八号木簡、阿波国の物部は九一号木簡の項を参照。淡路国津名郡、土佐国香美郡に物部郷がみえ、注目される。V層出土の木簡。

一六二号木簡

「殖栗長谷宮成

(二一九)×(一一)×一 〇八一

細長く薄い木簡の片面に文字が書かれている。上端と左辺は削りにより原形を留めているが、下端は折れ、右辺の上部は欠損している。「殖栗」は阿波国名方郡内の郷名。「郷名十人名」の〇五一型式の付札の断片か。殖栗郷については一三四号木簡を参照。阿波国における「長谷」は初見史料。V層出土の木簡。

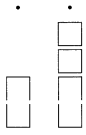
一六三号木簡

□□□公

(五四)×一五×三 〇一一

上端は切断され、下端は折れている。左右両片は削りによる。文字面は平坦で整形はみられないが、裏面には縦長の削り面がみられる。V層出土の木簡。

一六四号木簡



八〇×六×五 〇一一

上下両端は切断、左右両辺は削り。断面が正方形に近い形状を呈する。いずれも二次的な整形とみられるが、比較的加工が粗い。一六〇号木簡、二一〇号木簡などとともに、算木とみられる木簡に形状が類似する。表面一文字目は「殿」の可能性がある。二文字目は禾部（のぎへん）の文字。二文字に分かれる可能性もある。V層出土の木簡。

一六五号木簡

十七又十束六（刻書）

(七三)×一四×三 〇八一

上下両端が折れ、左右両辺は削りで丁寧な面取りを施す。刻書によって文字を記している。稲の数量を連記したものであろう。V層出土の木簡。

一六六号木簡



(一四六)×五×七 〇八一

上下両端は折れている。左右両辺は二次的に割裁されて、断面形状が

文字面よりも側面の幅が広い長方形を呈する。文字の一部が確認できるが、積読できない。V層出土の木簡。

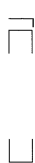
一六七号木簡



(九二)×五×七 〇八一

上端は切断され、下端は折れている。左右両辺は二次的に割裁されて、断面形状が正方形を呈する。三片が接合するが、文字の一部が確認できるのみである。表面一文字目は横画を六本もつ文字。「軍」などの可能性がある。V層出土の木簡。

一六八号木簡



(一一三)×(一一)×二 〇一一

二片が接続する。上端と左辺は削り。下端は折れ、右辺は割れている。両面ともに平坦だが、上部に小さな削り面がみられる。V層出土の木簡。

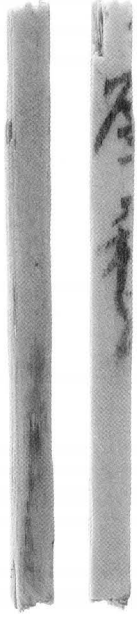
一六九号木簡



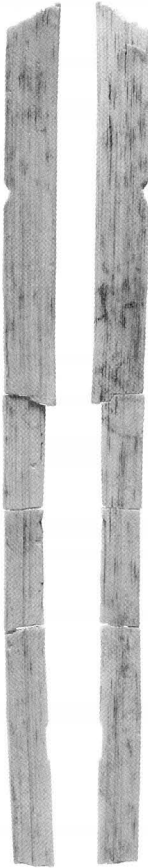
(一四七)×(一六)×六 〇八一



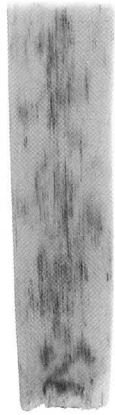
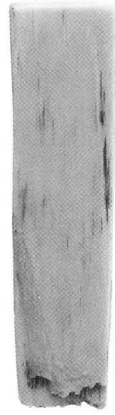
図版九〇



一六四号木簡



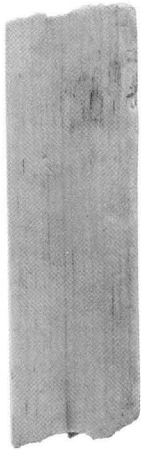
一七〇号木簡



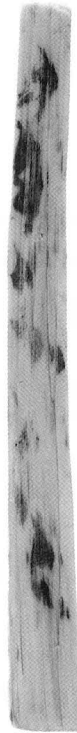
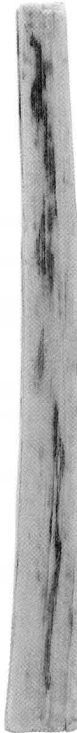
一六三号木簡



一六五号木簡



一七一号木簡



一六九号木簡



一六八号木簡



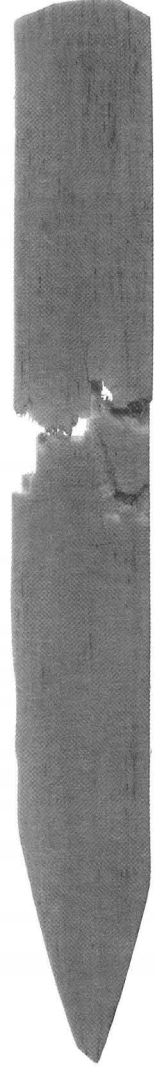
一六七号木簡



一六六号木簡



一六二号木簡



一六一号木簡

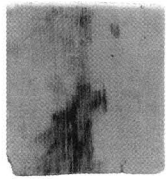
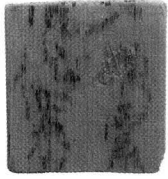








図版九一



一七六号木簡



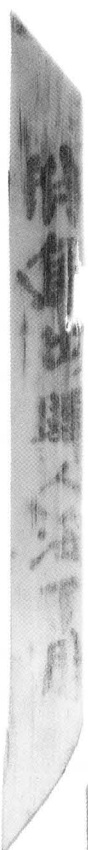
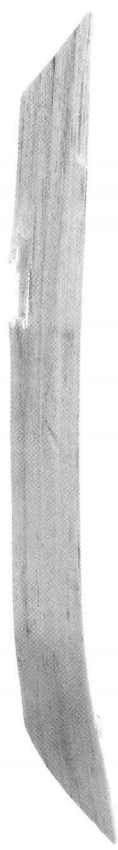
一七八号木簡



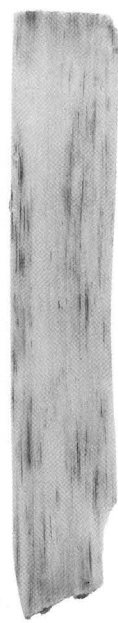
一七八号木簡人物画拡大



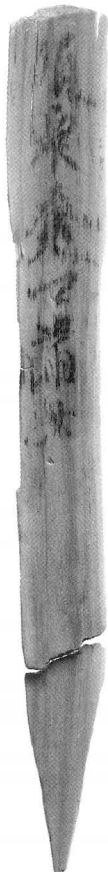
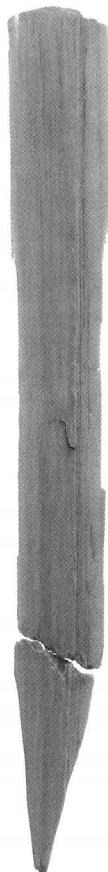
一七五号木簡



一七三号木簡



一七二号木簡



一七七号木簡



一七四号木簡

両側から削って尖らせる。裏面はほとんど未調整で、断面が三角形を呈する。文字面の整形も粗く、僅かに墨痕が残り、赤外線写真により文字を確認した。「殖栗」は阿波国名方郡内の郷名。「郷名十人名」の付札。但し、同種の付札で女性名なのは類例がない。名方郡殖栗郷については一三四号木簡を参照。「秦人マ」は二〇一号木簡（勘籍木簡）に、「名方郡殖栗郷戸主秦人マ麻呂」がみえている。V層出土の木簡。

一七八号木簡

・「鳥道第第勝□(人物画)賜霜家  
 ・「鳥第第説(記号)蘭蘭

(二八〇)×四四×二〇一九

上端と左右両辺は削り、下端は折れ。両面ともに大きな削り面が残る。明瞭な墨痕がみえるが、表面の整形がやや粗いため、墨が滲んでいる部分がある。表面六文字目は、肉月に「寺」「鳥」を並べる。七文字目は「鶴」の異体字。人物画は僧侶のような人物の横顔を丁寧を描く他は、簡略な筆致で跏坐する様子を描写する。裏面の記号は「+」を縁取りする形状。V層出土の木簡。

一七九号木簡

□□□斗  
 <□

(一五六)×二四×九〇三九

上下両端は折れ、左右両辺は削り。上端の折れは僅かで、付札の切り込みの上部が折れたものと考えられる。両面とも大きな削りて整形は粗い。下から二文字目は数字で、「二」「三」「五」の可能性がある。V層出土の木簡。

一八〇号木簡

〔殖 諸カ〕  
 □栗秦□□

(六七)×(一六)×一〇八一

薄い板が三片接合するが、上下両端は折れている。左辺は割れているが、右辺には削りが残る。「殖栗」は阿波国名方郡内の郷名。「秦諸□」は人名であろう。「郷名十人名」の付札の断片である可能性が高い。名方郡殖栗郷および秦氏については一三四号木簡を参照。V層出土の木簡。

一八一号木簡

〔津 迹カ〕  
 ・「<□□郷□□  
 ・「<□□

(九〇)×一九×四〇三九

上端と左右両辺は削り、下端は折れ。上部に切り込みがあり、付札の下部を欠損したものである。文字面より裏面に多くの削り面がみられる。表面一文字目は王偏のような残画が残り「津」の可能性が高い。「津迹郷」は、『和名抄』にはみえないが、九号木簡(南)に「津迹郷野縁



里」がある。裏面は「一石」の可能性がある。V層出土の木簡。

一八二号木簡

「  
〔請〕  
〔麦〕  
〔伍〕  
〔合〕  
〔二〕  
〔升〕  
〔内〕  
〔カ〕  
延暦三年四月廿四日  
」

二二〇×三三×三三 〇五一

完形。上下両端とも、左右両側からの削りによって山形に尖らせているが、二次的整形の可能性もある。両面ともに大きな削り面で構成される。地肌が黒く変色しているため、墨痕は明瞭ではないが、赤外線写真により文字を確認することができた。「伍合」には合点が付されている。麦の上の文字は「皮」または「又」。「請」の文字の次は「処（處）」の可能性がある。「皮麦」は一三五号木簡、一四四号木簡に類例がある。延暦三年は七八四年。保存処理に際しての再検討の結果により、釈文を改めた。V層出土の木簡。

一八三号木簡

「  
〔百〕  
〔カ〕  
謹解申神原田稻苺得事 合卷  
〔柒〕  
〔拾〕  
〔四〕  
〔東〕  
〔カ〕  
留玖拾四  
〔東〕  
〔カ〕  
〔捌〕  
〔拾〕  
〔東〕  
〔カ〕  
天平勝寶二年八月十五日  
〔虫〕  
〔足〕  
二六二×五二×五二 〇一一

四周とも原形を留めるが、上端の大半は欠損している。両面ともに、大きな削り面によって平坦に整形されている。墨痕は両面に確認できる。「神原田」で収穫した稲一七四束について、留めた九四束とそうでないもの八〇束の内訳を国衙に報告した解文木簡。天平勝寶二年は七五〇年。『木簡研究』第三号（木簡学会 二〇〇一）に報告したが、保存処理に際しての再検討で釈文を改めた。V層出土の木簡。

一八四号木簡

「八万大名」

一六八×一五×二一 〇五一

二辺が接合する。上端は切断、左右両辺は下端が細くなるように削られている。上端は折れた可能性もある。「八万」は阿波国名方郡内の郷名。「大名」は名か。「郷名十人名」の付札。「八万郷」については一四〇号木簡を参照。V層出土の木簡。

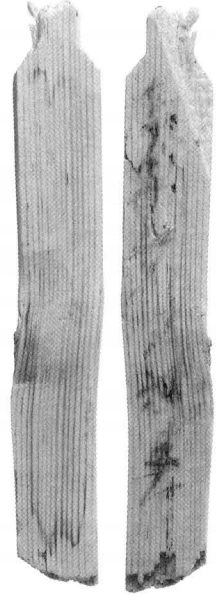
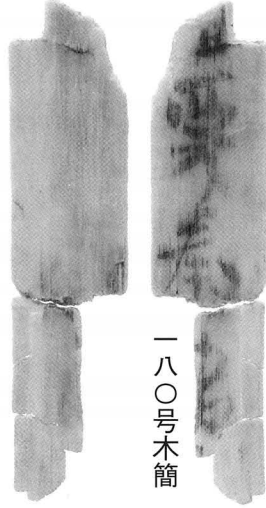
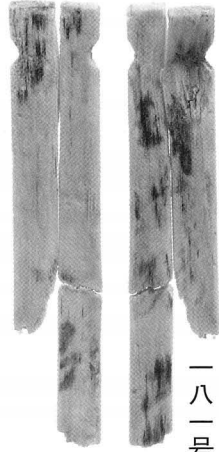
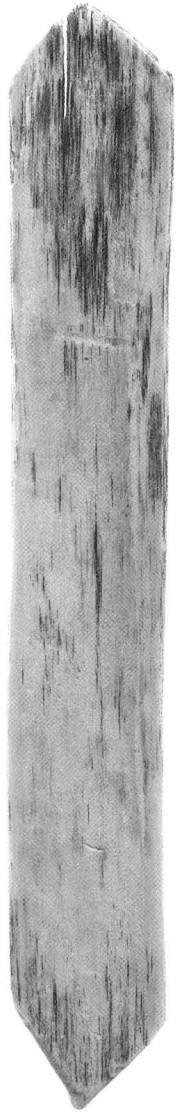
一八五号木簡

「櫻間猪使廣山」

七六×一五×二一 〇一一

上端は両側からの削りによって、角度の浅い山形に整形され、左右両辺も削りにより原形を留めている。下端は切断されているが、二次的切断の可能性が高い。文字面には若干の削り面があるが、裏面は削りのままである。「櫻間」は阿波国名方郡内の郷名。「郷名十人名」の〇五一型





一七九号木簡

一八一号木簡

一八〇号木簡



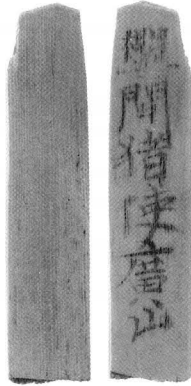
一八七号木簡



一八六号木簡



一八四号木簡



一八五号木簡



一八三号木簡

一八二号木簡

式の付札を二次的に整形したものとみられる。「櫻間郷」については一四八号木簡を参照。「猪使」は猪養(甘)部の伴造氏族。天武一三(六八四)年一二月に、猪使連は宿禰の姓を賜った。阿波国の「猪使」は本例が初めてである。藤原宮跡出土木簡に「板野評津屋里猪腊」(奈良国立文化財研究所 一九七五『飛鳥・藤原宮発掘調査出土木簡概報(2)』)、平城宮跡出土木簡に「阿波国贄猪薦纏」(奈良国立文化財研究所 一九九三『平城宮発掘調査出土木簡概報(2)』)、延喜主計式には阿波国の中男作物に「猪脯」がみえる。V層出土の木簡。

一八六号木簡

「井上生王マ満万呂」

一四九×一五×二〇五一

上端は切断か、または折損の可能性がある。左右両辺削りで、下端は両側からの削りによって尖らせている。文字面は整形されているが、裏面にはほとんど整形はみられない。「井上」は阿波国名方郡内の郷名。「生王マ」は「壬生マ」に同じ。「郷名十人名」の付札。「井上郷」については一七二号木簡、「生王マ」については一三六号木簡を参照。V層出土の木簡。

一八七号木簡

「<櫻間米五斗『真黒』>

(一七八)×二三×三〇三二

上端は山形に尖らせ、切り込みをつける。下端は折れているが、左辺

下部に切り込みの上半が残るため、上下に切り込みが施された付札と考えられる。両面には細かな削り面がみられる。断面形状をみると文字面は平坦であるが、裏面は凸レンズ状を呈している。「櫻間」は阿波国名方郡内の郷名。「真黒」は追筆。「郷名十品名・数量」のみの米の付札。「櫻間郷」については一四八号木簡を参照。V層出土の木簡。

一八八号木簡

「井上弓金佐流

(一三八)×二二×二〇一九

上端は稜をもつ円形に整形している。下端は欠損であるが尖らせていた可能性が高い。両面ともに縦長の削り面が残る。「井上」は阿波国名方郡内の郷名。「弓金」は姓。「弓金マ」に同じ。三四号木簡(南)、一三七号木簡に類例がある。「郷名十人名」の〇五一型式の付札の断片か。「井上郷」については一七二号木簡、「弓金」については一三七号木簡を参照。上端部を弧状に整形し下端部を尖らせた形状については、一五四号木簡でふれた。V層出土の木簡。

一八九号木簡

「大豆不請」

(一五二)×(九)×五〇八一

上端は折れ、下端は削りによる。左右両辺は制裁されているため、上

部は文字の一部分が確認できるのみ。筆の割れが著しい。別筆部分は大振りだが、細めの筆画で墨色が濃い。平城宮跡から「太里大豆一斗八升」と記す木簡が出土している（奈良国立文化財研究所 一九八二『平城宮発掘調査出土木簡概報(15)』）。「太里」は那賀郡大野郷の地名で、史料には「太郷」ともみえる。延喜民部省式には、阿波国の交易雑物に「大豆八十石」とみえている。V層出土の木簡。

#### 一九〇号木簡

「<官不□末醬」

一二五×二四×五 〇三二

完形。上端は切断後に表裏両面から削り、縦の断面が山形になるように整形されている。下端は裏面からの切り折りとみられる。左右両辺は削り。上端に切り込みを施している。切り込みは、台形状に入れようと意図した比較的丁寧なものである。「□」は「用」「動」などの可能性がある。国衛の膳所で、未使用または不使用の「末醬」容器に付けた付札であろうか。V層出土の木簡。

#### 一九一号木簡

「<棘甲羸二斗四升」

九八×二三×四 〇三二

ほぼ完形。左辺下部のみ僅かに欠損している。切り込みは台形状を呈し、阿波国の贄の特徴を示す。ウニの付札。文字面には縦長の削り面が

あるが、裏面はほとんど整形されていない。全体に滲みが著しく筆画を追いくい。ウニの付札は数量を記さないもの（奈良国立文化財研究所 一九六六『平城宮木簡』一―一六）や、土器単位のものが多い。数量を記すものは五升が唯一で（同上 一九九〇『平城宮発掘調査出土木簡概報(22)』）、二斗四升は異例に多い。阿波国のウニについては、一四九号木簡を参照。V層出土の木簡。

#### 一九二号木簡

「□ □」

二四五×二二×七 〇一一

上下両端は切断、左右両辺は削りによる整形。四周とも二次的に整形の可能性はある。V層出土の木簡。

#### 一九三号木簡

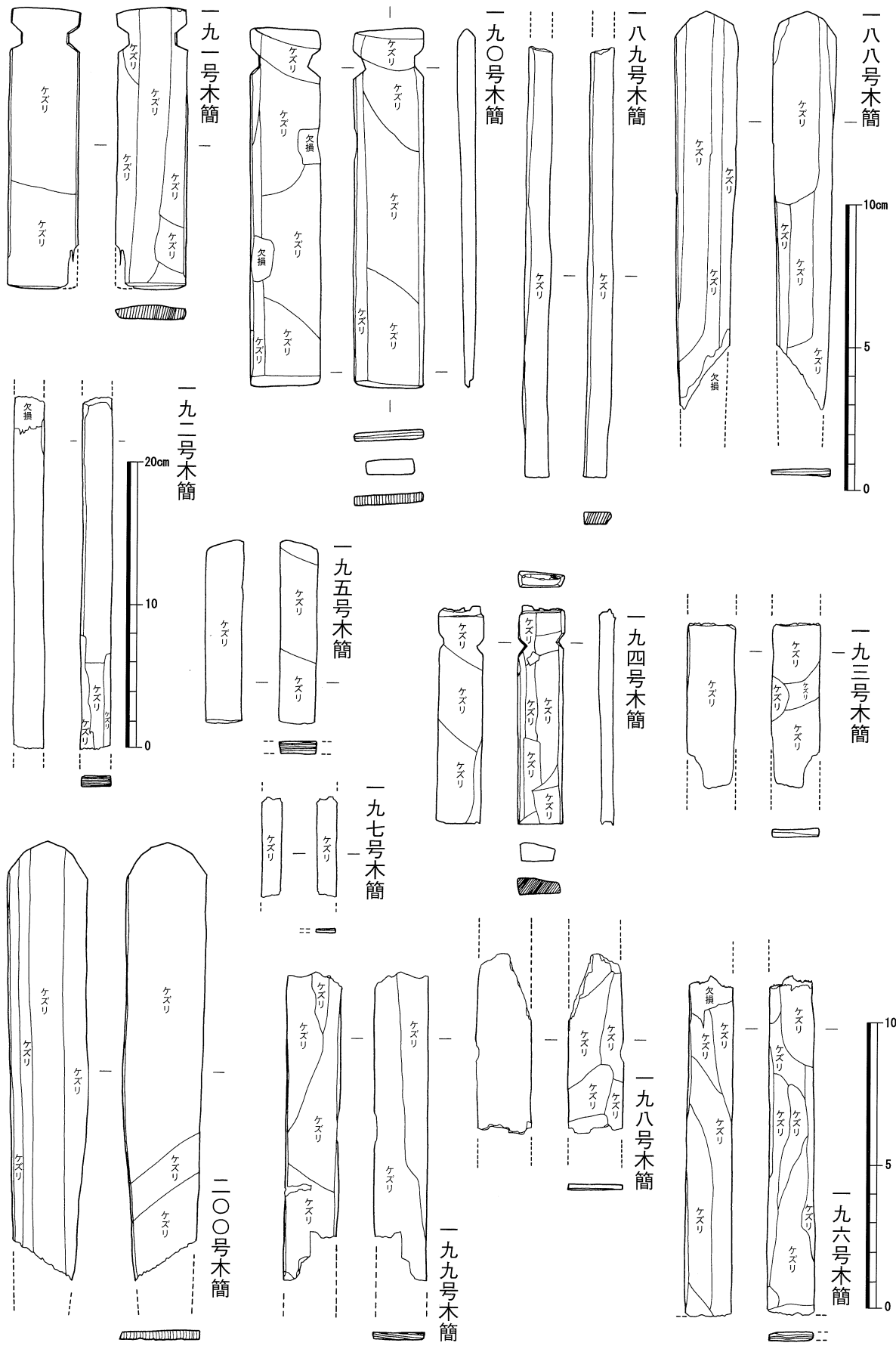
「井カ」

「新□錦マ嶋」

(五七)×一七×三 〇一九

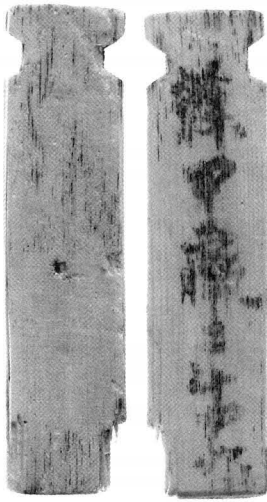
二片が接合する。上端は切断。左右両辺は削りにより原形を留めている。下端は折れている。「新井」は、阿波国名方郡内の郷名(高山寺本「和名抄」では「迺比為」、刊本「爾比井」、あるいは勝浦郡新居(高山寺本「迺比乃為」、刊本では「爾比乃井」と訓みを付す)郷。「綿マ」は五四号木簡(南)に「鴨里錦部鹿津」がみえ、名方郡賀茂郷に錦部が分布していた。また名方郡

第五一一図 木簡実測図⑫





図版九三



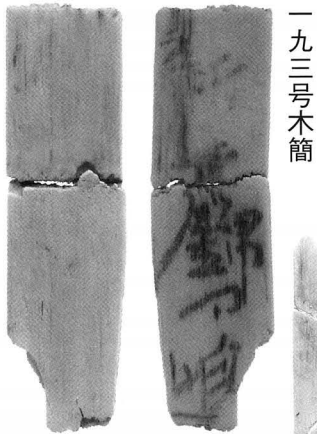
一九一号木簡



一九〇号木簡



一八八号木簡



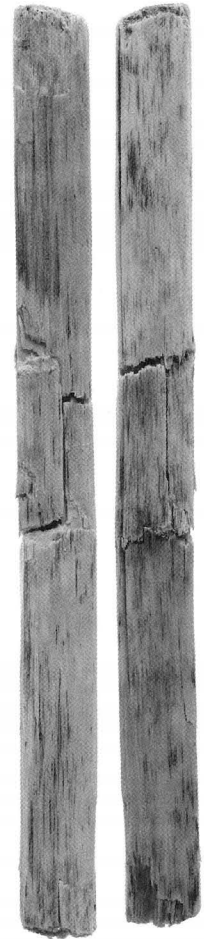
一九三号木簡



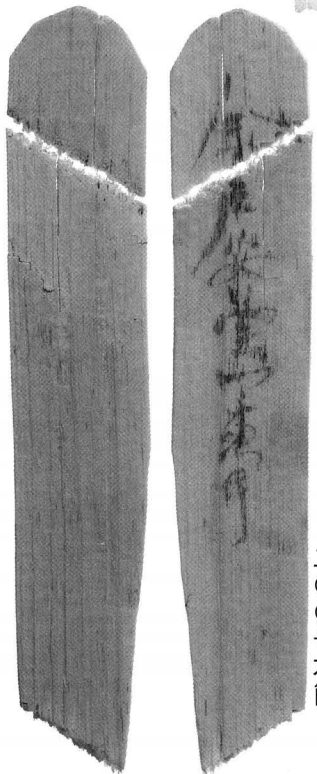
一九四号木簡



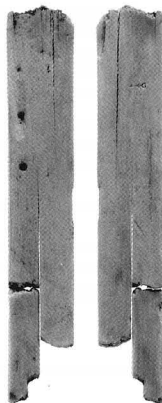
一九五号木簡



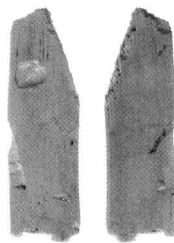
一九二号木簡



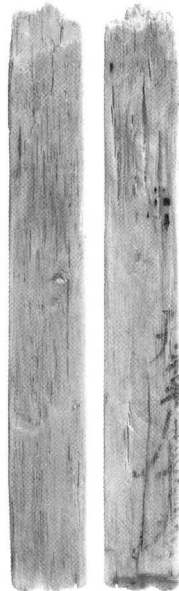
二〇〇号木簡



一九九号木簡



一九八号木簡



一九六号木簡

所在の新島庄に「錦部志止祢」がみえるので、『大日本古文書』四一二〇六)、本木簡は名方郡新井郷とみるべきだろう。「郷名十人名」の〇五一型式の付札の断片である可能性が高い。V層出土の木簡。

#### 一九四号木簡

「<生海藻頭一古」

七六×一六×六 ○三二

完形。上端は表裏両面から刃を入れた切り折りによって切断されている。下端と左右両辺は削りによる整形である。上端に切り込みを施している。文字面には細かな削り面がみられる。生のメカブの付札。「古」は籠の意。海藻に関わる木簡として、二八号木簡(南)に「□海藻一籠」、五八号木簡(南)に「交軍布」がみえる。また、平城宮跡出土木簡に「阿波国進上御贄若海藻老籠板野郡牟屋海」(奈良国立文化財研究所 一九六六『平城宮木簡』一)、「阿波国那賀郡中男海藻六斤」(木簡学会 一九八一『木簡研究』第三号)、「阿波国贄切海藻」(木簡学会 一九八九『木簡研究』第一号)がある。V層出土の木簡。

#### 一九五号木簡

□

六五×(二三)×四 ○八一

上端は削り、左右両辺は割裁されている。下端は切断によるが、二次的整形の可能性がある。記号のような墨痕が明瞭に残るが積読できない。

い。V層出土の木簡。

#### 一九六号木簡

□  
□<sup>〔殖栗郷カ〕</sup>  
□<sup>長秦</sup>

(二一九)×(一六)×三 ○八一

上端は折れ、下端は二次的整形の可能性がある。左辺は原形を保つが、右辺は割れている。両面ともに縦長の削り面がみられる。文字は右辺下部にみられるが、木簡が文字の中央から割裁されているため、偏のみが残存している。「殖栗郷」については一三四号木簡を参照。V層出土の木簡。

#### 一九七号木簡

□<sup>□</sup>  
□<sup>□</sup>

(三五)×(七)×一 ○八一

薄い小破片の四片が接合する。上下両端は折れ。右辺は原形を保つが、左辺は割れている。上端は下から上に向けて表面が削り落とされている。一文字目は「直」が読み取れるが、偏が付く可能性が高く、「殖」などが考えられよう。V層出土の木簡。

一九八号木簡



(六三)×一九×二〇八一

上下両端折れ。左右両辺は削りであるが、右辺は二次的削りの可能性がある。文字面には複数の削り面があり、僅かに墨痕がみられる。V層出土の木簡。

一九九号木簡



(一〇八)×一九×二〇八一

上下両端は折れ、左右両辺は削り。右辺は二次的削りの可能性がある。両面に縦長の削り面がある。僅かに墨痕が残るが積読はできない。V層出土の木簡。

二〇〇号木簡

「余戸安曇マ東万呂

(一五三)×二八×三〇一九

上端は削りにより稜のある円頭状に整形され、一八八号木簡と類似した形状である。下端は欠損している。左右両辺は削り、左辺下部は僅かに斜めに削りだしているため、下端は尖っていた可能性が高い。文字面の整形は粗く、裏面に削り面が多く残る。「郷名十人名」の〇五一型式の付札の断片か。観音寺遺跡出土木簡には「郷」を省略する事例が多い。

本例もそうした事例で余戸郷の意。刊本の『和名抄』には板野郡に全戸郷がみえ、余戸郷の誤りの可能性が大きい。また勝浦郡にも餘戸郷がみえている。九三号木簡に「安曇豊主」、一一四号木簡に「名東郡人安曇

継見」がみえるほか、「名方郡佐濃郷刀杵阿曇部古麻呂」(木簡学会一九九八『木簡研究』第二〇号)、「那賀郡幡羅郷海部里戸主阿曇部大嶋」(木簡学会一九九〇『木簡研究』第一二号)がみえている。余戸郷との関わりでいえば板野郡余戸郷か。V層出土の木簡。

二〇一号木簡



「阿波國司牒」  
淡路國カ  
牒  
右被今月廿三日牒備國依牒旨仰当郡司与使人共依數乞徵已畢者國仍差那賀直綿麻呂  
令向  
「使發遣如前仍注事狀付使綿麻呂故牒」  
充カ

「阿波國司解」  
申勘籍資人事秦人マ大宅年式拾陸部下名方郡殖栗郷戸主秦人マ人麻呂戸口者  
即附佐伯費大長

五七九×(五〇)×五〇八一

上下両端と左辺は削りにより原形を留めているが、右辺には削りはみられず、割裁されたものと考えられる。上下両端とも右辺に向かって広がる曲線状を呈し、折敷などの木製品を木簡として再利用した可能性もある。埋没後に中央部が湾曲し、上部に折れが認められる。両面ともに多数の削り面で構成される。上部に細かな削り面がみられるが、下部は縦長の面で構成される。裏面中央部には、左上から右下方向への平行な

線状痕が連続している部分があるが、これは板を割った際についた刃物傷の可能性がある。部分的に消えており、表面の整形によって刃物傷が削り取られたと考えられる。板は表面からみて左辺は薄く、右辺は厚い。V層出土の木簡。

## 二〇一号木簡（勘籍木簡）

本木簡の形状には、次のような特色がある。

- (1) 上・下端ともに整形面を残す、長さ五七・九cmの長大な木簡である。
- (2) 表の右側辺は割裁されており、もともとは六cm前後の幅だったらしい。
- (3) 両面ともに何度も削られた痕跡があり、表面からみて左半分は薄くなっている。右側辺が五〜四mmの厚さであるのに対し、左側辺は二・五〜一・五mmで、〇・八mmの薄さの所もある。
- (4) 前項の(3)とも関わることであるが、裏面の中央上部に「」で示した削り残しの部分がある。

(1)〜(4)の特色を踏まえると、本木簡は長さ二尺（一尺は二九・七五cm前後）、幅二寸の大型木簡で、以下の類例から見ると、公用に供される木簡を利用して、国衙内で公文書の案文（下書き）を習書した際のものとして推測される。

これまでに出土した大型木簡の幾つかを列挙すると、滋賀県鴨遺跡出

土の、刈り取った稲の数量を日ごとに記した貞観十五年（八七三）の木簡（一六六・五cm）（木簡学会 一九八〇『木簡研究』第二号）、長屋王邸跡から出土した都祁水室に関わる和銅五年（七二二）の木簡（一二五cm）（奈良国立文化財研究所 二〇〇一『平城京木簡』二）、藤原宮跡にあった宮所庄の弘仁二年（八一〇）の帳簿木簡（長さ九八・二cm）（木簡学会 一九八三『木簡研究』第五号）、平城京の東三坊大路側溝から出土した、九世紀初頭の告知札（長さ八七・六cm）（木簡学会 一九九四『木簡研究』第一六号）などがある。

それぞれ五尺六寸、四尺二寸、三尺三寸、二尺九寸に相当する。これらは、文書化する際に必要な備忘・メモとして書き継がれた記録木簡であり、また不特定多数の人々に情報を伝える告知札（近世の高札に相当する）であったから、自ずから長大な木簡を必要としたのである。

一方、公用木簡（公文書に準用された木簡）には、二尺三寸前後のものとして、滋賀県大津市の北大津遺跡から出土した天智朝の音義木簡（木簡学会 一九九〇『日本古代木簡選』岩波書店）、兵庫県山垣遺跡出土の、水田の稲数を記した八世紀初頭の木簡（木簡学会 一九九八『木簡研究』第二〇号）、二尺二寸前後のものに、平城宮跡の下層から出土した藤原京時代の過所木簡（木簡学会 一九八〇『木簡研究』第二号）がある。音義木簡や過所木簡も、多くの人々の目にふれるところから、長大であることが要求されたのだろう。近年、その存在が明らかとなった歌木簡も同様に考えられる。

長さが二尺前後の公用木簡が出土していて、注目される。兵庫県袴狭遺跡出土の「国府」木簡（「府」は「符」の誤り、もしくは通用か。五五cm。折損している）（木簡学会 一九九七『木簡研究』第一九号）、福

鳥取荒田目条里遺跡の「郡符」木簡（五九・二cm）（木簡学会 二〇〇二『木簡研究』第二四号）、新潟県八幡林遺跡の「郡司符」木簡（五八・五cm）（木簡学会 一九九一『木簡研究』第二三号）、兵庫県吉田南遺跡（明石郡家と推定）出土の「播磨国移」と記す木簡（五九・四cm）（木簡学会 一九九〇『日本古代木簡選』岩波書店）などである。本木簡も、これらの公用木簡に準じるものとみてよい。

本木簡には、裏面中央上部の削り残しの部分を除けば、三通の案文を記す。表の面にみえる「阿波國司牒」で始まる三行の案文（Aとする）、裏面の「已畢」で始まる案文（Bとする）と、「阿波國司解」で始まる案文（Cとする）である。

問題はA・B・Cが同筆か否かという点であり、本木簡の内容を理解する上できわめて重要である。書体・書風をどのように見るのか、見解の分かれるところであろう。そのため積文では断案を下さずに表記を避けているが、当初から釈読作業に従事してきた者として、筆者（和田）はCを別筆とする判断に傾いている。

AとBは墨痕が全体的に薄く、文字はCに比しやや大き目で、書風も柔らかな印象を受ける。またAとBで共通する文字と語句、例えば國・依・者・故や「已畢」「事状」を比較すると、同筆とみてよいと思われる。一方、Cは墨痕が濃く、文字はやや小振りで、書風も円みを欠き鋭角的である。A・Bに共通する文字と語句として、人・郡・戸や「阿波國」があるが、明らかに別筆であろう。したがってAとBは同筆とみてよいが、Cは別筆と判断している。ただしAとBは同筆であるものの、Aの文末が「故牒」で完結しているのに対し、Bは「已畢」から始まっており、明らかに前文を欠く。理由は不明であるが、その内容は戸籍に

関わっており、その意味ではCとも関わりがある。

次にA・B・Cの内容を検討する。

Aは「阿波國司牒」で始まるが、保存処理にともなう木簡積文の再検討により、牒の宛て先が淡路国である可能性が浮かび上がってきた。しかし牒の宛て先の主体がよくわからないため、文意が判然としない。阿波國司は、淡路国の主体からの牒旨に基づき、当郡司（阿波國那賀郡司か）と使人（那賀直綿麻呂）に命じて、徴収させることが出来たとみえるので、その主体は阿波國那賀郡に何らかの権益を有していたかと推測される。王臣家の庄園、あるいは社寺の封戸などを想定しうるかもしれない。那賀直綿麻呂は那賀郡司の一族だろう。

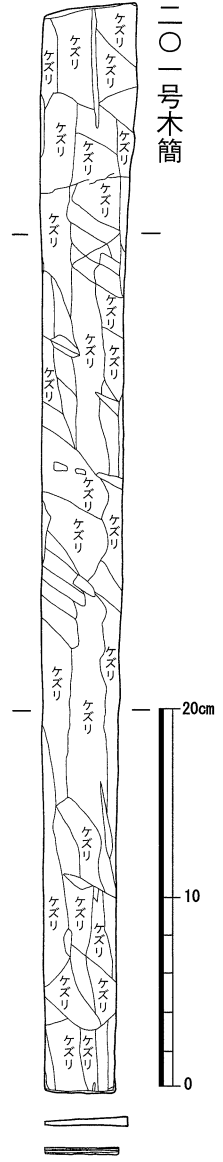
BはAと同筆と判断されるが、内容は異なる。ある人物の本籍を、阿波國から平城京内に移したいとの解状の趣旨に基づき、阿波國司は国衙に保管する戸籍を調査させて、本籍に間違いを確認し、その旨を記した書状を佐伯費大長に附して、淡路国に移すとの内容である。これも勘籍に関連するものであり、Cとの関連がうかがえる。

Cは、平城京で資人して任用されたか、あるいは既に資人として働いていた秦人マ大宅について、民部省から阿波國司に照会があった。それで国衙で保管されていた戸籍に基づき、国司はその年齢・本籍・戸主などを、解文で民部省に上申したものであり、勘籍にあたる。正倉院には勘籍に関する文書が九通残されているが、木簡で確認されたのは本例が最初である。まことに貴重な木簡である。

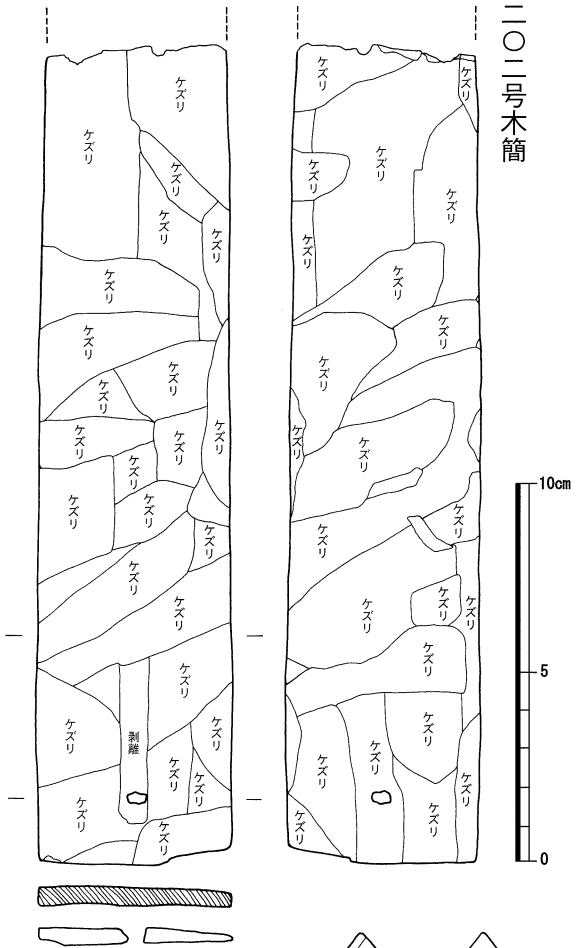
これまで観音寺遺跡では、「板野国守」と記す木簡や「波尔五十戸税」などと記した木簡が出土し、阿波國府の国衙に近いことが確認されていたが、この勘籍木簡の出土により、木簡出土地近くに阿波國衙の所在し

第五二二図 木簡実測図⑬

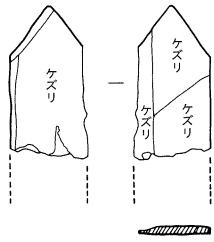
二〇二号木簡



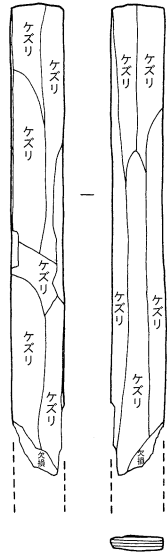
二〇二号木簡



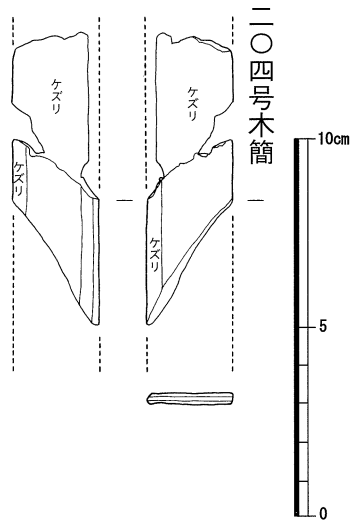
二〇六号木簡



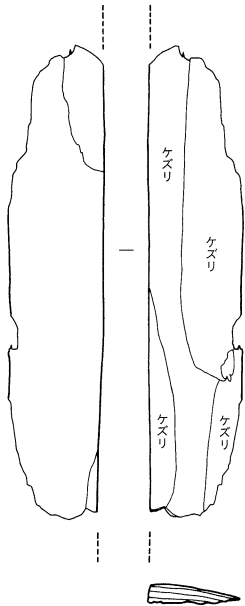
二〇五号木簡



二〇四号木簡



二〇七号木簡



二〇八号木簡

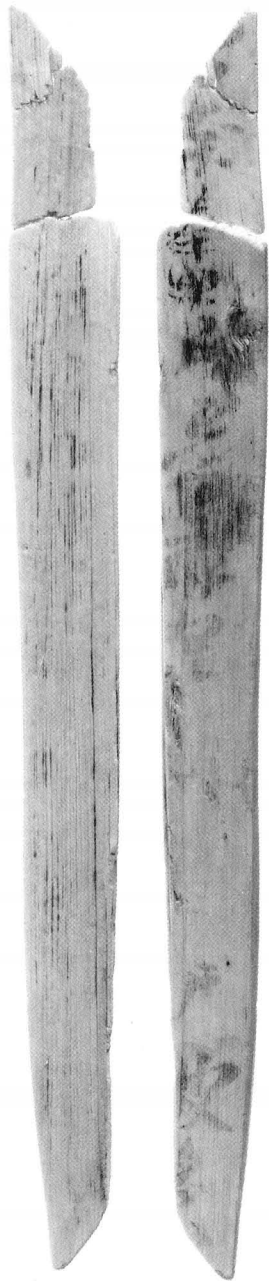




图版九四



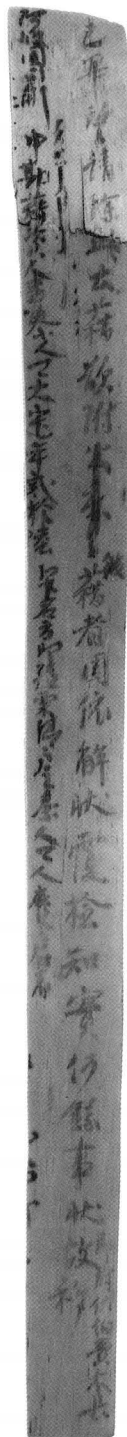
二〇四号木简



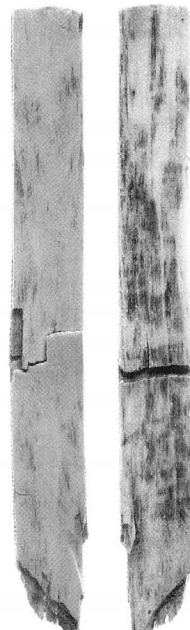
二〇八号木简



二〇二号木简



二〇一号木简



二〇五号木简

二〇七号木简



二〇六号木简

ていたことが確実になった。また中央政府と阿波国衙との間で、勘籍の手続きが実際に行なわれていたことを、木簡で確認できるといふ希有の事例となった。観音寺木簡のもつ歴史的意義の大きさを如実に示すものと言えよう。

## 二〇二号木簡

・ 秦□□斛 斛斛有有  
稲足一斗 斛斛 斛斛斛。  
□秦百足一斗斛斛斛斛  
〔秦カ〕

・ 又六  
□□久四人□

(二二六)×五一×五 〇一九

上端折れだが、下端と左右両辺は削り。下部中央に穿孔がある。両面ともに細かな削り面で構成され、平坦ではない。凹面状の削りが連続し、ヤリガンナのような刃物で削ったと考えられる。厚さは均一ではなく、下部の穿孔部分は特に薄くなっている。表面三行目上端の「□〔秦カ〕」とした部分は、「一斗」の可能性もある。「斛」はいずれも習書。木簡の上部に合計記載があり、「斛」の文字があったことに基づくものである。裏面には他にも文字として読み取れない墨痕がある。「秦」については一三四号木簡参照。V層出土の木簡。

## 二〇三号木簡

「く。阿波國大贄■大□進□」  
〔贄カ〕〔上カ〕

(二二六)×三三×三 〇三九

上端と左右両辺は削りによる整形で、下端は折れている。埋没後に変形し、中央部で屈曲している。上部には切り込みが施され、中央に穿孔がある。左辺下部に斜めに削る痕跡があり、下端を失わせる〇三三型式の可能性もある。四字目の「大」は第一画が極端に短く、また「贄」も「貝」がみえない。書き損じたものか。V層出土の木簡。

## 二〇四号木簡

□佐波

(七七)×二二×三 〇八一

二片が接合する。下部の左右両辺には削りが残るが、上部の大部分と下端は欠損である。「佐波」は人名か。VI層出土の木簡。

## 二〇五号木簡

〔殖栗語カ〕  
□□□マ佐留

(二二四)×一四×四 〇一九

上端と左右両辺は削り。下端折れ。三片が接続する。一文字目は「殖」とみて残面に矛盾はない。「郷名十人名」の付札の可能性が高い。ただ、

そう考えた場合、一文字目の上部にやや余白があることになり、書き出しの高さに不自然さは残る。「殖粟（郷）」については一三四号木簡を参照。「語部（マ）」は延喜二年の「板野郡田上郷戸籍」にみえる。Ⅶ層出土の木簡。

### 二〇六号木簡

□□

(四〇)×二〇×二〇一九

上端は山形に削る。下端折れ。左右両辺削り。裏面には現状では墨痕は確認できず、剥離の可能性もある。当初四文字とみて、一〜三文字目に「天平七」の可能性を考えていたが、二〇八号の別筆部分と酷似しており、上端を鋭く尖らせる形状から齋串の可能性が考えられる。文字も年号ではなく、齋串としての用途に伴うとみる方がよいと思われる。Ⅶ層出土の木簡。

### 二〇七号木簡

□彼里人

(一一四)×(二四)×五〇八一

上下両端は折れ、右辺は割れ。左辺のみ原形を留めている。文字面には縦長の削り面が残るが、裏面は剥離している。左辺から右辺に向かって薄くなり、削屑状を呈する。大振りな文字で記される。左辺上部の斜めの部分は、切り込みの痕跡の可能性が有る。里名から書き出す付札の

可能性がある。「彼」は乙類の「ヒ」として用いられるが、『和名抄』にみえる阿波国の郷名で該当するものはない。Ⅶ層出土の木簡。

### 二〇八号木簡

□奈□□□□□□□皮□  
〔忌麻呂カ〕

一六九×一六×三〇八一

四周すべて二次的整形。下部はやや細く削り出す。その上で、上下両端とも左辺から削って尖らせる。二片接続。別筆部分の一文字目は「奉」または「秦」、一文字目は「史」または「米」の可能性が有る。「皮」は偏が付く可能性もある。木簡を二次的に整形して齋串に加工し、別筆部分を記したとみられる。別筆部分は二〇六号と酷似する。類似した機能をもつ木簡とみるべきであろう。Ⅶ層出土の木簡。

### 二〇九号木簡

□□  
〔生大万呂カ〕  
□□□□□□

(一一二)×二三×四〇五九

上端折れ。左右両辺削り。下端は左右両辺から削って尖らせる。三片接続。二文字目は「郷」の可能性が有る。下部は人名とみられ（壬生大万呂か）、「郷名十人名」の付札の可能性が考えられる。「壬生」は「生王」、「生」とも略記される。一三六号木簡を参照。Ⅶ層出土の木簡。

第五一三図 木簡実測図⑭

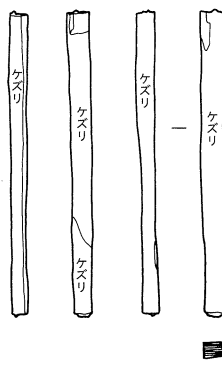
二〇三号木簡



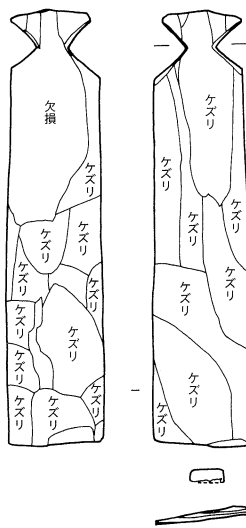
二〇九号木簡



二二〇号木簡



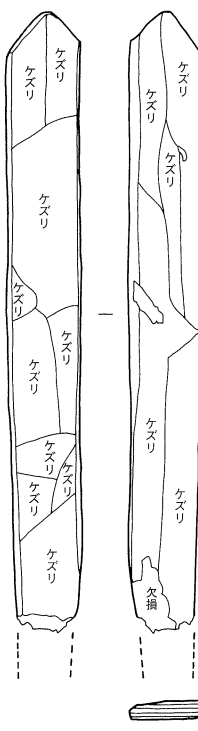
二二二号木簡



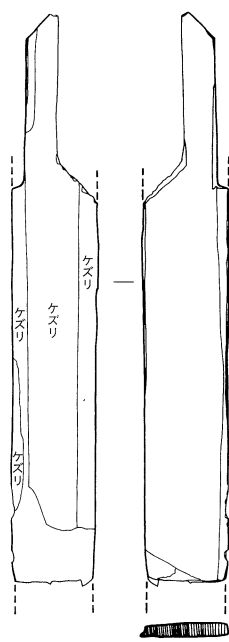
二二一号木簡



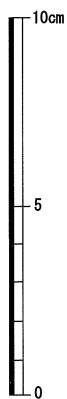
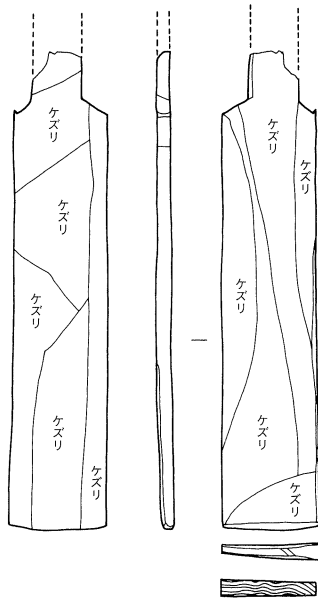
二二四号木簡



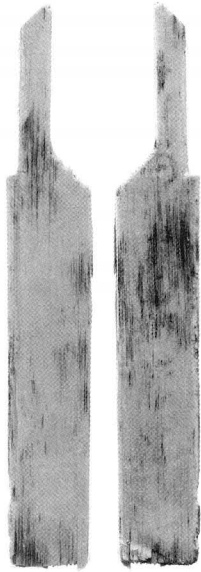
二二三号木簡



二二五号木簡



図版九五



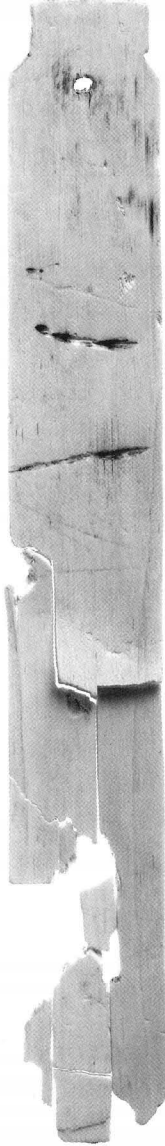
二二三号木簡



二二二号木簡



二二一号木簡



二〇三号木簡



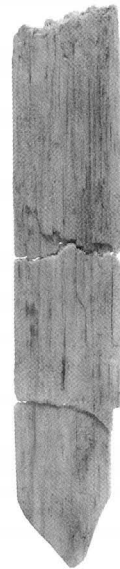
二二五号木簡



二二四号木簡



二二〇号木簡



二〇九号木簡

二一〇号木簡

〔代カ〕  
海石 □ □ □

八一×五×四 〇一一

四周すべて二次的整形で、一六〇号木簡、一六四号木簡と同様に、算木とみられる木簡に類似する。木簡を算木に二次的に整形した可能性が高い。□〔代カ〕とした文字は旁のみ残る。『和名抄』によれば那賀郡に海部郷があり、平城宮跡出土木簡に「那賀郡幡羅郷海部里」(奈良国立文化財研究所 一九九〇『平城宮発掘調査出土木簡概報(22)』)がみえている。海部・海マについては、一四二号木簡や一七三号木簡にみえるほか、板野郡に海部の分布がみられ(同上(1))、名方郡には海直もみえている(『日本三代実録』貞観六年八月八日条)。Ⅷ層出土の木簡。

二一一号木簡

〔<櫻間里小 □ 斗<〕

一三八×二一×四 〇三一

中央部を欠損し、二片が接合する。左辺下部は割れているが、上下両端に切り込みをもつ付札である。両面ともに縦長の削り面で構成されるが、下部は傷みにより数字にあたる一文字分の墨痕が欠落している。品目の二文字目は上端の「十」部分のみが残り、「麦」の可能性がある。「櫻間里」は阿波国名方郡内の里名。里制下の木簡。櫻間の地名については一四八号木簡を参照。平城宮跡出土木簡に、「阿波国阿波郡小麦」「宝亀七年」と記すものがあり(奈良国立文化財研究所 一九九〇『平城宮発

掘調査出土木簡概報(22)」、また延喜民部省式に、阿波国の交易雑物として「小麦七十石」がみえている。Ⅸ層出土の木簡。

二一二号木簡

・ <〔木〕(重書)  
三間三間間

・ < □ □ □ □

一一五×二六×三 〇三二

完形。上部に切り込みをもつ。切り込みは木簡の幅三分の一度に及ぶ、深く大きなものである。両面ともに細かな削り面によって構成されている。特に裏面下部は細かな削りによって整形され、薄くなっている。付札の文字を二次的に削って習書したものか。表面の文字で「三間」は阿波国美馬郡のことか。釈読した文字以外にも全体にこれらと重なる墨痕がある。裏面の二、三文字目は同じ文字。飛鳥池出土木簡に、「三間評小豆□□」と記すものがある(奈良国立文化財研究所 一九九八『飛鳥・藤原宮発掘調査出土木簡概報(13)』)。SR四〇〇一(Ⅸ層に対応)出土の木簡。

二二三号木簡

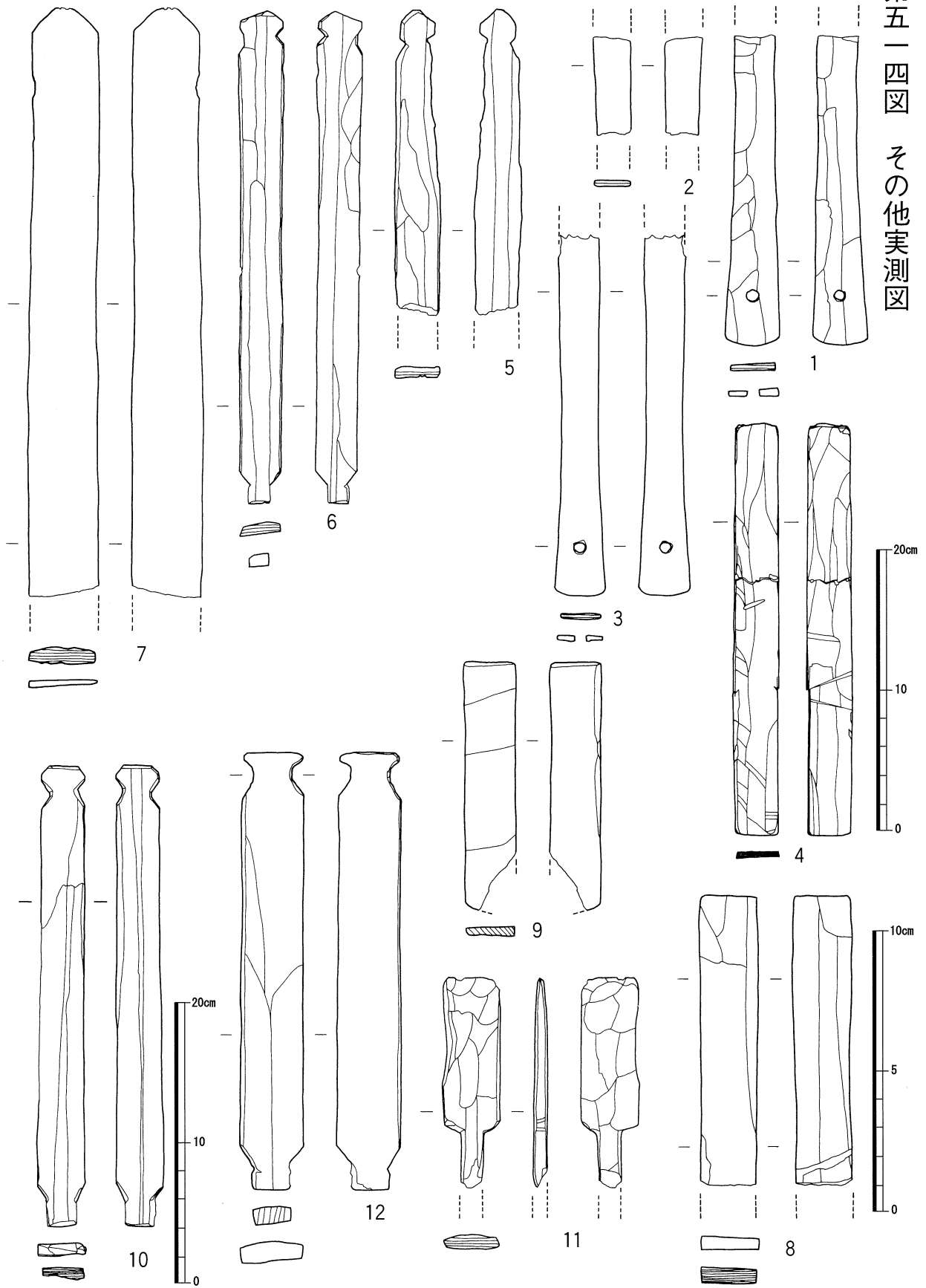
〔留カ〕  
□ □ □ □ □ □ □ □ □ □

(一五二)×二三×四 〇六五





第五一四図 その他実測図



図版九六



### III まとめ

#### 一 観音寺遺跡出土木簡の年代について

木簡の出土した場所が特定時期に埋没した遺構とは異なり、自然流路の堆積層は埋没後に攪乱され、必ずしも元位置を保っていないことが想定される。これは他の遺物の出土層位を検討した結果、各層にかなりの時間幅がみられることから明らかである。しかしここでは、木簡の年代を個々の木簡が出土した自然流路の堆積層の年代にしたがって想定し、大きく3つのグループ(群)に分類した。

観音寺遺跡では、八世紀前半以前の層位の一部に調査しているが、大半は八世紀中頃の層位が掘削限界となっているため、層位的な木簡の分布は条件を一定としていない。その前提で木簡の層位別出土数(表二二)をみると、八世紀後半を主体とするV層からの木簡が圧倒的に多く、一〇世紀から一一世紀初頭のⅢ層までに多いことがわかる。年代を直接的に示す紀年銘木簡は三点出土した。一八三号木簡の天平勝寶二(二七五〇)年、一三七号木簡の天平寶字八(七六四)年、一八二号木簡の延暦三(七八四)年である。いずれも八世紀後半の年号であり、V層からの出土である。さらに年代が押さえられるものに、「名東郡」と書かれた一一四号木簡が挙げられる。名東郡は寛平八(八九六)年に名方郡が名東郡、名西郡に分轄されたため、それ以降の木簡とみられる。この木簡が出土したIV層は九世紀後半から一〇世紀前半の年代が想定されている。ま

た、地名の表記からみると、「里」表記の木簡はIX層から出土したものに限られる。それより上層のものは、「郷」表記であることから、少なくとも郷里制以降の木簡であると考えられる。ただし、「郷」の文字が省略されているものが多いことから、木簡のみで判断することは不可能である。以上の点を考慮して、年代別にまとめると、大きく分類して、明確に「里」表記をもつIX層のA群。紀年銘木簡を含む八世紀後半を中心としたV層のB群、九世紀後半から一一世紀初頭のIV層、Ⅲ層のC群に大別される。出土層位のⅧからⅥ層に含まれるものは明確にA群に属するとは言えず、B群の古段階に位置付けた。よって観音寺遺跡で最古段階のA群は二一一号木簡から二一五号木簡の五点となる。ただし、そのうちの四点はSR三〇〇一の北側に隣接したSR四〇〇一・SR五〇〇一からの出土であり、SR三〇〇一では二〇〇〇年の調査で出土した二一一号木簡のみである。掘削可能であれば出土した可能性のある時期の木簡群で、八世紀前半以前の年代が想定される。

B群は八世紀半ばから九世紀前半の年代が与えられる。紀年銘木簡を三点含む一三一号木簡から二一〇号木簡である。最も多くの木簡が含まれるが、その種類も「勘籍」をはじめとした文書、付札、習書など多様で、観音寺遺跡の木簡群の中核をなしている。このうち一九八号木簡から二一〇号木簡までは、共伴遺物から、八世紀中頃の時期を想定している。

B群には、地名が書かれた付札が多く含まれている。その大部分は名方郡内の地名が書かれたものである。「郷名十人名」で、「郷」の文字を省くものが多い傾向がみえる。一方で、他の郡のものは僅かに二点にとどまっている。これらのことから、出土した付札は国衙に納められたも

のと考えるよりは、名方郡家に納められた際の付札であると推測され、国衙と名方郡家の併設を想定させるものと考えられる。

C群は九一号木簡から一三〇号木簡である。共存する土器から九世紀後半から一一世紀初頭の年代が与えられる。名東郡と書かれたものが含まれる。字体がくずれたものや、檜扇に墨書したものが多い特徴がある。その他、八七号木簡から九〇号木簡は、中世以降昭和までの木簡となる。特に現代の舌洗川の堆積から出土した木簡は近世から昭和のものを含まれていた。これらは調査の最初の段階で、偶然採取した木片に墨書がみられたものである。

## 二 木簡の形態について

出土した木簡の型式を、奈良文化財研究所に従って分類した結果、表二三のようになった。各層の木簡の特徴を、IX層から記述する。

最下層のIX層段階からは五点の木簡が出土している。このうちSR三〇一からは二一一号木簡の一点のみである。SR三〇一から出土した木簡で唯一「里」表記の付札で、上下に切り込みが施された〇三二型式である。これと同時期のSR四〇一、SR五〇一の木簡では、二一四号木簡、二一五号木簡に「里」表記のものがみられ、二一五号木簡は〇三二型式であった。

VIII層から出土した木簡は二一〇号木簡のみである。木簡を細く割裁して算木状に加工したもので、文字の一部が残存している。VII層は五点の木簡が出土している。調査区の南東部に存在する層から出土したもので

ある。二〇六号木簡は圭頭状の薄い木簡に文字がみえるが、大部分は欠損している。この層には完形のものはない。VI層の一点も形状不明の破片であった。

V層は、最も多くの木簡が出土した。〇一・〇三・〇五型式のものが

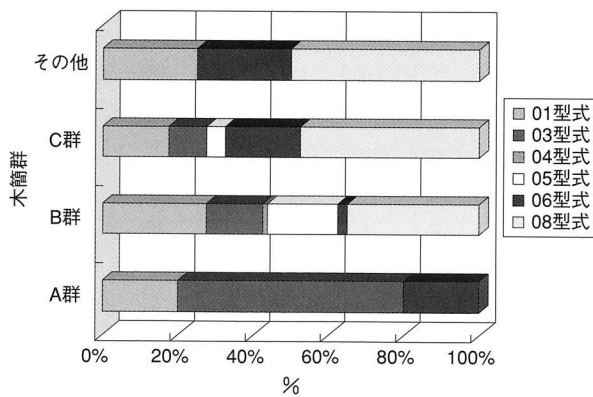
表23 木簡型式別出土数

	011	019	031	032	039	049	051	059	061	065	081	合計
近世以降	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	2
II層	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	2
III層	1	2	0	0	2	0	0	1	6	0	9	21
IV層	1	3	0	1	1	0	1	0	1	1	10	19
V層	10	9	2	6	4	1	11	3	1	1	25	73
VI層	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1
VII層	0	2	0	0	0	0	0	1	0	0	2	5
VIII層	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
IX層	0	1	1	2	0	0	0	0	0	1	0	5
合計	14	17	3	9	7	1	12	5	9	3	49	129

多い。〇一型式の木簡は、文書木簡などの用途が考えられ、七三点中一九点を占める。「天平勝寶二年」の紀年銘をもつ一八三号木簡などが含まれる。これ以外にも「天平寶字八年」の紀年銘のある一三七号木簡は、上部と左辺が割れているため、〇八一型式としたが、本来は一八三号木簡と同様の〇一一型式の木簡と考えられる。二〇一号木簡も上部が若干湾曲し、縦に割裁されているため〇八一型式としたが、〇一型式の可能性もある。一三一

号木簡は、小片に割れているため〇八一型式としたが、両面に文字があり、内容からも文書木簡であることがわかる。〇三型式は切り込みが施された付札である。末端形状の不明な〇三九型式を合わせると一二点が含まれる。一四九号木簡の「御贄」は、上下両端に台形状の切り込みがあり、平城宮跡出土の御贄木簡と形状が共通し、阿波国の贄に特徴的なものと考えられる。木簡の両面は丁寧な削られており、極めて細い筆で書かれている。一九〇号木簡、一九一号木簡の切り込みにも同じ特徴がみられる。〇三一型式の一八七号木簡も両面に細かなケズリ面があり、丁寧な整形の印象を受けるが、文字は太く雑に書かれている。〇五型式は長方形の木簡の一端を尖らせたもので、これも付札の一種であろう。一四点の木簡が該当する。一六一号木簡や一七二号木簡は、薄く割った木簡の末端を尖らせたものに、郷名と人名のみが書かれている。一方、一七五号木簡のように、厚みのある木簡の両面を整形したものに、郷名と人名のみが書かれたものもある。末端が欠損しているため〇一九型式に分類した一八八号木簡や一九三号木簡、二〇〇号木簡なども、この型式に分類されると考えられる。これら〇三・〇五型式の付札はV層の木簡総数の三五%にあたり、国衙や名方郡家に納められた貢進物に付けられた付札が、SR三〇〇一に投棄されたものと考えられる。その他、一五〇号木簡は封緘木簡の未製品に習書したものであり、〇四九型式に分類した。VI層以下では木簡の出土数は激減することから、SR三〇〇一に木簡が投棄された時期の中心はV層段階以降であったと考えられる。

IV層出土の木簡は一九点である。半数は形状不明の〇八一型式であるが、短冊形の〇一型式がやや多い。題籤軸状の木簡に「白米處」と墨書された一一三号木簡、人形に墨書のある一二一号木簡など、形態は様々



第515図 木簡の型式別組成

群	01型式	03型式	04型式	05型式	06型式	08型式	合計
C群	7	4	0	2	8	19	40
B群	22	12	1	15	2	28	80
A群	1	3	0	0	1	0	5
その他	1	0	0	0	1	2	4
合計	31	19	1	17	12	49	129

である。V層段階と比較すると、付札類の減少が顕著である。自然流路の堆積は継続しているため、木簡の投棄地点の変更などの可能性が考えられる。

III層から出土した木簡は合計二二点である。形状の不明な〇八一型式を除けば、用途の明瞭な木製品に墨書のある〇六一型式が六点を占める。これは檜扇に墨書したものが多いためである。墨書のある檜扇は、無いものと比較すると、幅が広い板を素材とする特徴がある。〇一、〇三、〇五型式も、それぞれに少数ではあるが存在する。九三号木簡は曲物などの転用材を素材に文書木簡として使用している。一〇二号木簡は上部に切り込みが施された付札であるが、III層もIV層と同じように付札

類が少ない傾向がみられる。Ⅱ層は角塔婆状のものなど、中世のものである。

最後に、各群別に含まれる木簡型式の組成を第五一五図に表した。最も下層のA群の木簡は五点で、数が少ないため比較の対象にはならないが、切り込みをもつ〇三型式のものが多く、B群では、八〇点の内の二〇%が〇一型式となり、〇五型式、〇三型式と続く。〇一型式は文書木簡、〇三、〇五型式は付札の可能性が高いものであり、国衙での使用を示す木簡群であることが想定される。C群では、四〇点の内の二〇%は〇六型式で、〇一型式がこれに続く。B群で多くみられた付札類は、ここでは〇三、〇五型式合わせても一五%にすぎない。〇六型式は木製品に墨書のあるもので、その多くは檜扇であり、B群とは性格の異なる木簡群である。

このように、B群とC群の間には木簡の組成に変化があることが明らかとなった。これは、自然流路の流路の変化にも大いに関係があると考えられるが、国府内の建物配置の変化などを反映している可能性も考えられる。

表24 木簡

木簡番号	グリッドなど (調査区)	層位	法量 L (cm)	法量 W (cm)	法量 H (cm)	型式	木取	備考1 (残存部分 に関する情報)	備考2 (形状に関する情報)	表面の状態	X	Y	Z	出土状況
87	δ-IV G-3 (04-1)		14.8	5.4	0.6	011	柁目	完形。	上端中央部に穿孔有り。	滑らか				現在の舌洗川の河道から出土。
88	δ-IV G-6 (05-2)		(15.5)	4.8	0.8	081	柁目	右辺上部と左辺下部に欠損有り。	分厚い板の中央部右寄りに穿孔有り。	滑らか				現在の舌洗川の河道から出土。
89	δ-IV B-11 (05-1)	II	(9.5)	0.8	0.8	061	辺材	下端折れ。	上端に2段の切り込みが有る。小型の角塔婆状木製品。	やや粗い	118808.42	89852.082	4.777	
90	δ-III M-17 (04-2)	II	(20.4)	4.1	0.3	081	板目	上端折れ、右辺割れ。		粗い	118860.976	89784.58	4.158	
91	δ-IV D-3 (04-1)	III	(14.6)	2.9	0.1	061	柁目	下端折れ。	薄く幅広い楡扇。	粗い	118815.0917	89812.6613	3.9593	重なって出土。
92	δ-IV D-3 (04-1)	III	(18.3)	2.9	0.1	061	柁目	下端折れ、2片接合。	薄く幅広い楡扇。	粗い	118815.0177	89812.6942	3.9591	重なって出土。
93	δ-IV F-4 (05-1)	III	22.5	6.7	0.7	011	柁目	上端2次的整形か。	下端部を弧状に整形。曲物の底板などを転用か。	滑らか	118827.643	89819.724	3.869	文字面が下向き。
										118827.767	89819.893	3.817		
94	δ-IV F-5 (05-1)	III	(5.5)	1.8	0.3	039	柁目	下端折れ。	上部に切り込み有り。	滑らか	118827.789	89819.623	3.857	
95	δ-IV A-10 (05-1)	III	(17.4)	(3.1)	0.5	081	板目	上下両端折れ、右辺割り。	木簡を中央で割裁したもの。	滑らか	118804.75	89846.01	3.958	
										118804.644	89845.944	3.971		
96	δ-IV C-7 (05-2)	III	(5.2)	2.5	0.1	061	柁目	上下両端折れ。	楡扇の断片。	やや粗い	118813.943	89832.545	3.86	流れに直交。文字の書き出しは北側から。文字面が上向き。
										118813.903	89832.571	3.837		
97	γ-IV T-9 (05-2)	III	(19.4)	(1.3)	1.1	081	柁目	上下両端折れ、右辺割りか。	厚手の板を半裁。側面を丸く整形。	滑らか	118799.066	89842.833	4.028	流れに平行。文字の書き出しは北西側から。文字面が下向き。
										118799.253	89842.702	4.01		
98	δ-IV B-8 (05-2)	III	(1.0)	19.6	0.2	081	板目	上下両端折れ。	薄い横材の断片。	滑らか	118808.025	89839.821	3.762	流れに平行。文字の書き出しは東側から。文字面が上向き。
										118808.013	89839.64	3.803		
99	δ-IV C-9 (05-2)	III	(23.5)	2.2	0.5	081	柁目	上下端折れ。		やや粗い	118810.203	89841.762	3.845	流れに直交。文字の書き出しは北側から。文字面が上向き。
										118810.362	89841.68	3.856		
100	δ-IV C-7 (05-2)	III	(11.6)	1.8	0.3	059	板目	上端折れ。	下端は左右両側からの削りで山形を呈する。	滑らか	118813.352	89832.047	3.803	
101	δ-IV B-9 (05-2)	III	(8.2)	1.3	0.3	019	板目	下端折れ。		滑らか	118806.754	89841.721	3.857	流れに直交。文字の書き出しは北東側から。文字面は上向き。
										118806.672	89841.698	3.838		
102	δ-IV B-8 (05-2)	III	(8.7)	2.9	0.5	039	板目	下端折れ。	上部に切り込み有り。	やや滑らか	118809.281	89836.13	3.789	流れに平行。文字の書き出しは西側から。文字面が下向き。
										118809.244	89836.05	3.757		
103	δ-IV D-7 (05-2)	III	(30.5)	(4.5)	0.3	081	板目	上下両端折れ、左右両辺割れ。		やや粗い	118816.506	89833.584	4.048	流れに平行。斜めに突き刺さった状態。文字の書き出しは東側から。文字面が上向き。
										118816.522	89833.523	3.823		
										118816.507	89833.476	3.772		
104	δ-IV E-6 (05-2)	III	(13.8)	2.0	0.3	061	板目	上端折れ。	楡扇の上端が折れたもの。下部に要用の穿孔有り。	滑らか	118820.067	89826.628	4.018	文字面が下向き。
										118819.962	89826.643	3.929		
105	δ-IV B-9 (05-2)	III	(13.1)	1.6	0.4	081	柁目	上下両端折れ。		粗い	118805.589	89844.461	3.873	流れに平行。文字面が下向き。
										118805.512	89844.569	3.84		
106	δ-IV F-6 (05-2)	III	(9.8)	1.6	0.3	081	柁目	上下両端折れ。		やや粗い				
107	δ-IV C-8 (05-2)	III	(5.1)	1.3	0.1	081	柁目	上下両端折れ。		やや粗い				
108	δ-IV C-8 (05-2)	III	(7.4) (8.1)	1.7	0.2	061	板目	上下両端折れ。	楡扇の断片か。	滑らか				
109	δ-IV C-8 (05-2)	III	(17.9)	1.2	0.3	061	板目	上端折れ。	楡扇の上端が折れたもの。下部に要用の穿孔有り。	滑らか				
110	δ-III G-20 (00-1)	III	(11.6)	2.4	0.4	019	柁目	下端折れ。	上端は山形に整形。	やや粗い	118831.936	89796.711	4.052	
111	γ-IV T-15 (98-1)	III	(27.8)	3.4	0.3	081	柁目	下端折れ、左辺上部欠損。		やや粗い				
112	γ-IV T-15 (98-1)	IV	10.0	(2.4)	0.3	081	柁目	左右両辺割れ。	裏面上部に3条の野引線有り。	滑らか				
113	δ-III H-18 (04-2)	IV	18.6	(4.3)	0.7	065	柁目	矩形部分の左辺のみ割れ。	矩形の材の一端に、軸部を作り出す用途不明の木製品。	滑らか	118838.1094	89788.8037	4.1453	
										118838.2552	89788.8699	4.0569		
114	δ-III H-19 (04-2)	IV	37.2	(4.7)	0.7	081	板目	下端は二次的切断か。左辺割れか。	厚手の板の上部に墨書。	やや粗い	118836.6554	89790.9416	3.8732	
										118836.7384	89790.9209	3.8501		



木簡 番号	グリッドなど (調査区)	層位	法量 L (cm)	法量 W (cm)	法量 H (cm)	型式	木取	備考1 (残存部分 に関する情報)	備考2 (形状に関する情報)	表面の状態	X	Y	Z	出土状況	
115	δ-IV E-2 (04-1)	IV	18.4	4.0	0.9	011	板目	完形。	厚手の板の上部中央に2ヶ所の穿孔有り。下端は稜をもつ円形に整形。	やや滑らか	118820.899	89813.505	3.859		
116	δ-IV F-2 (04-1)	IV	(14.8)	0.8	0.4	032	板目	下端折れ。		滑らか	118825.501	89805.049	4.072		
117	δ-IV D-3 (04-1)	IV	(8.1)	2.2	0.4	039	板目	下端折れ。	上部に深い切り込み有り。表面は摩滅している。	両面黒塗り	118819.717	89810.95	3.836		
118	δ-IV D-5 (04-1)	IV	(4.4)	(1.2)	0.1	081	板目	上下両端折れ、右辺割れ。		粗い					
119	δ-IV C-3・4 (04-1)	IV	(4.9)	1.3	0.2	019	板目	下端折れ。	上部中央に小さな穿孔有り。	滑らか					
120	δ-IV E-1 (04-1)	IV	(22.4)	4.1	0.3	081	板目	上下両端折れ。		滑らか	118820.531	89803.055	3.859		
											118820.681	89803.141	3.93		
121	δ-IV C-7 (05-2)	IV	(12.8)	(2.3)	0.2	061	柱目	下端折れ、右辺割れ。	左辺下部に切り込み有り。人形に墨書したものの。	滑らか	118811.808	89832.006	3.569	流れに平行。文字の書き出しは東側から。文字面が下向き。	
											118811.81	89832.129	3.558		
122	δ-IV E-8 (05-2)	IV	(10.8)	(1.6)	0.3	081	板目	上下両端折れ、右辺割れ。	中央部で半裁。	滑らか	118820.8	89836.574	3.836	流れに平行。文字の書き出しは北西側から。文字面が下向き。	
											118820.874	89836.503	3.797		
123	δ-IV D-7 (05-2)	IV	(31.5)	3.9	0.2	081	板目	下端折れ。	薄い板が細かく割れたもの。	滑らか	118816.555	89834.388	3.445	流れに平行。文字面が下向き。	
											118816.59	89834.343	3.446		
124	δ-IV E-7 (05-2)	IV	3.7	(33.7)	0.5	051	板目	一端折れ。	横材木簡の一端を二次的に整形し尖らせるが、先端は折れたもの。	滑らか	118822.759	89834.207	3.797	流れに平行。上端が西側。表面が下向き。	
											118822.942	89834.496	3.791		
125	δ-IV F-6 (05-2)	IV	(9.8)	2.2	0.2	019	板目	上端折れ、下端切断。		滑らか	118827.909	89827.342	3.758	流れに平行。文字の書き出しは西側から。表面が下向き。	
											118827.909	89827.259	3.732		
126	δ-IV A-7 (05-2)	IV	(5.3)	2.9	0.2	081	柱目	上下両端折れ。	やや左寄りに穿孔有り。	滑らか					
127	γ-IV T-12 (98-1)	IV	(8.4)	2.2	0.4	019	柱目	下端折れ。	上端は山形に整形。	滑らか					
128	γ-IV T-14 (98-1)	IV	(7.1)	(2.0)	0.3	081	柱目	上端折れ、左辺は割れ。		やや粗い					
129	γ-IV T-14 (98-1)	IV	(7.1)	(1.1)	0.3	081	柱目	下端切断、左辺割れ。	一端を宝珠形に尖らせて、切り込みを入れたものの断片。	滑らか					
130	γ-IV T-14 (98-1)	IV	(13.2)	2.0	0.3	081	板目	上下両端折れ。		滑らか					
131	δ-III D-20 (04-1)	V	(20.6)	(4.9)	0.4	081	板目	下端折れ、右辺割れ。4片が接合する。	接合した上片。	滑らか	118819.018	89798.416	3.679	2片が折り重なった状態で出土。上片の表面が上向きになり、その上に下片の裏面が上向きで重なって出土。	
									接合した下片。左辺下部は二次的にやや細く削り出されている。		滑らか	118819.079	89798.389		3.704
											滑らか	118819.028	89798.315		3.711
132	δ-IV D-4 (04-1)	V	(13.7)	2.0	0.3	081	柱目	下端と左辺は二次的整形。	上端に穿孔有り。左辺を二次的に整形したため、やや左寄りに位置する。	やや粗い	118813.097	89819.632	3.498		
											118813.049	89819.719	3.537		
133	δ-IV E-4 (04-1)	V	19.5	(3.6)	0.3	011	柱目	上端一部欠損、下端二次的折断。左辺割り。	大型の文書木簡の断片か。	滑らか	118820.531	89816.896	3.583	流れに平行。文字の書き出しは南東側から。習書面が上向きで出土。	
134	δ-IV F-4 (04-1)	V	(10.7)	1.7	0.4	019	柱目	下端折れ、左辺下部は欠損。		滑らか	118820.398	89817.037	3.555		
135	δ-IV D-1 (04-1)	V	(11.8)	2.3	0.4	019	板目	下端折れ。中央で2辺に分かれて出土。	接合した上片。	滑らか	118817.818	89802.996	3.488	流れに直交。文字の書き出しは北東側から。文字面が上向きで出土。	
									接合した下片。		やや粗い	118817.8286	89802.9382		3.5638
136	δ-IV F-3 (04-1)	V	(11.4)	1.8	0.4	059	柱目	上端折れ。	下端を左右両側からの削りで尖らせる。	滑らか	118827.276	89813.997	3.658		
137	δ-IV E-5 (04-1)	V	(20.0)	(3.8)	0.3	081	柱目	上端折れ、左辺割れ。	長大な文書木簡の末尾の断片か。	やや滑らか	118821.127	89820.978	3.553	流れにほぼ平行。文字の書き出しは西側から。文字面が下向き。	
138	δ-III D-20 (04-1)	V	(7.7)	1.4	0.3	059	板目	上端折れ。	下端を左右両側からの削りで尖らせる。	粗い	118818.842	89797.317	3.537	文字面が上向き。	
139	δ-III H-19 (04-2)	V	(12.3)	1.9	0.5	065	柱目	上端折れ、下端切断。	左右両辺は二次的整形。	やや粗い	118837.9451	89791.5021	3.8578		
140	δ-IV D-2 (04-1)	V	(6.4)	1.7	0.1	081	板目	下端折れ。	上端は山形。	やや粗い	118817.454	89807.147	3.414	流れにほぼ平行。文字の書き出しは西側から。文字面が下向き。	

本番番号	グリッドなど(調査区)	層位	法量 L (cm)	法量 W (cm)	法量 H (cm)	型式	木取	備考1 (残存部分に関する情報)	備考2 (形状に関する情報)	表面の状態	X	Y	Z	出土状況
141	δ-IV F-4 (04-1)	V	12.0	2.1	0.4	032	板目	完形。	上部に切り込み有り。	滑らか	118828.654	89815.258	3.485	流れに平行。文字の書き出しは東側から。文字面が上向き。
											118828.699	89815.152	3.483	
142	δ-IV D-5 (04-1)	V	(10.6)	2.0	0.2	081	柃目	上下両端折れ。		粗い	118814.212	89821.305	3.183	流れに平行。文字面が上向き。
143	δ-IV E-4 (04-1)	V	11.2	2.0	0.5	011	柃目	完形。		滑らか	118820.484	89815.055	3.272	
											118820.598	89815.029	3.271	
144	δ-IV E-2 (04-1)	V	(9.7)	1.7	0.4	032	板目	下端折れ。	上部に切り込み有り。	やや滑らか	118825.889	89798.049	3.854	流れにほぼ平行。文字の書き出しは南東側から。表面が上向き。
145	δ-III C-20 (04-1)	V	13.6	2.9	0.5	032	柃目	ほぼ完形。	上部に切り込み有り。	やや粗い	118814.454	89798.028	3.41	
146	δ-IV C-5 (04-1)	V	(10.4)	2.8	0.4	059	板目	上部折れ。	下端は左右両側からの削りで尖らせる。	滑らか	118812.88	89819.637	3.191	
147	δ-III S.T-15. 16 (03-8-2)	V	(8.0)	0.9	0.5	039	板目	下端折れ。	細い棒状で上部に小さな切り込み有り。	滑らか				
148	δ-IV D-12 (05-1)	V	(10.2)	(1.6)	0.2	081	柃目	上端折れ。	下端は尖っていたものを平坦に削る。	粗い	118815.66	89853.026	3.71	流れに直交。文字の書き出しは北東側から。文字面が上向き。
149	δ-IV C-12 (05-1)	V	(12.2)	1.5	0.3	031	柃目	中央で折れているが、ほぼ完形。	両端に台形状の切り込み有り。阿波国の貫に特徴的なものか。	滑らか	118814.214	89853.592	3.555	流れに平行。
150	δ-IV C-10 (05-1)	V	(17.4)	2.4	0.5	049	柃目	上下両端折れ。	下端は二次的整形で細く、封緘状を呈する。	上部表面左半に削り痕	118812.695	89849.004	3.537	流れに平行。文字の書き出しは南東側から。文字面が上向き。
											118812.645	89849.176	3.524	
151	δ-IV C-10 (05-1)	V	32.5	(2.2)	0.7	081	柃目	左辺割れ。右辺の下1/3が割れ。	厚みがある板に習書。	滑らか	118813.843	89850.14	3.438	流れにほぼ平行。文字の書き出しは西側から。表面が上向き。
											118813.691	89849.846	3.431	
152	δ-IV C-10 (05-1)	V	(9.7)	(2.2)	0.4	081	柃目	上端折れ、左右両辺割れ。	左辺下部に切り込み有り。木筒を用途不明の木製品に再加工したものの。	粗い	118813.571	89848.462	3.456	流れに平行。文字の書き出しは北西側から。文字面が上向き。
153	δ-IV C-10 (05-1)	V	(11.5)	2.5	0.7	019	板目	下端折れ。	比較的厚手で、断面形が凸レンズ状を呈する。	滑らか	118811.395	89848.184	3.43	流れにほぼ直交。右側面を上にした斜めの状態で出土。文字の書き出しは南西側から。文字面が上向き。
											118811.471	89848.277	3.408	
154	δ-IV C-10 (05-1)	V	16.6	1.5	0.4	051	板目	完形。	上端は両角を削って弧状に整形。下端は左右両側からの削りで尖らせる。	裏全面黒塗り	118811.598	89849.019	3.464	流れにほぼ平行。文字の書き出しは西側から。文字面が上向き。
											118811.64	89849.177	3.441	
155	δ-IV A-10 (05-1)	V	(9.3)	2.6	0.7	061	板目	軸部折れ。	題籤軸の題籤部分。	滑らか	118803.108	89849.293	3.532	
156①	δ-IV F-9 (05-1)	V	(8.6)	1.6	0.5	019	板目	上端は切断。中間に欠損部分が多い。		滑らか	118827.23	89840.847	3.673	流れに直交。文字面が上向き。
											118827.235	89840.932	3.685	
156②	δ-IV F-9 (05-1)	V	(8.0)	1.6	0.5	019	板目			滑らか	118827.299	89841.155	3.774	流れに平行。文字の書き出しは南東側から。文字面が下向き。
											118827.342	89841.239	3.785	
157	δ-IV E-10 (05-1)	V	(9.8)	(0.5)	0.6	081	板目	上下両端折れ、左右両辺割れ。	断面形状は、文字面よりも側面の方が広い長方形を呈する。	滑らか	118824.925	89845.964	3.854	流れに直交。文字の書き出しは北東側から。表面が下向き。
											118824.869	89845.956	3.928	
158	δ-IV G-10 (05-1)	V	9.9	2.5	0.3	051	板目	上端は左の角を削り、下端は左右両側からの削りで尖らせる。		粗い	118830.144	89844.706	3.804	流れに直交。文字の書き出しは南側から。文字面が上向き。
											118830.244	89844.705	3.836	
159	δ-IV D-9 (05-1)	V	(7.5)	(1.4)	0.4	081	板目	下端折れ、右辺割れ。		表面が黒い	118818.899	89843.412	3.742	流れに直交。文字の書き出しは南側から。文字面が上向き。
											118818.973	89843.368	3.75	
160	δ-IV E-9 (05-1)	V	8.1	0.7	0.6	011	板目	完形。	断面形状が正方形を呈する。算木か。	滑らか				流れに直交。
161	δ-IV F-11 (05-1)	V	14.1	1.9	0.3	051	柃目	完形。	上端は弧状に整形。下端は左右両側からの削りにより尖らせる。	粗い	118829.962	89853.243	3.623	流れに直交。文字の書き出しは北東側から。文字面が下向き。
											118830.066	89853.279	3.687	
162	δ-IV D-11 (05-1)	V	(11.9)	(1.1)	0.1	081	柃目	下端折れ。		滑らか	118819.934	89852.874	3.838	流れに直交。文字の書き出しは南西側から。文字面が下向き。
											118819.874	89852.765	3.851	
163	δ-IV G-8 (05-1)	V	(5.4)	1.5	0.3	011	板目	上端切断、下端折れ。		滑らか	118833.883	89838.283	3.838	流れに平行。文字の書き出しは北西側から。文字面が下向き。
											118833.852	89838.327	3.804	
164	δ-IV B-10 (05-1)	V	8.0	0.6	0.5	011	板目	上下両端切断。	断面形状が正方形を呈する。	滑らか				
165	δ-IV B-11 (05-1)	V	(7.3)	1.4	0.3	081	柃目	上下両端折れ。	左右両辺は削りで面取りを施す。	やや粗い				

木簡番号	グリッドなど (調査区)	層位	法量 L (cm)	法量 W (cm)	法量 H (cm)	型式	木取	備考 1 (残存部分 に関する情報)	備考 2 (形状に関する情報)	表面の状態	X	Y	Z	出土状況
166	δ-IV F-9 (05-1)	V	(14.6)	0.5	0.7	081	板目	上下両端折れ。	断面形状は、文字面よりも側面の方が広い方形を呈する。	滑らか				
167	δ-IV F-9 (05-1)	V	(9.1)	0.5	0.7	081	板目	上端切断、下端折れ。	左右両辺が割裁され、断面形状が正方形を呈する。	滑らか				
168	δ-IV F-9 (05-1)	V	(11.3)	(1.1)	0.2	011	板目	下端折れ、右辺割れ。		滑らか				
169	δ-IV A-9 (05-2)	V	(14.7)	(1.6)	0.6	081	板目	上端切断、左右両辺は割裁。		やや粗い	118804.253	89841.213	3.451	流れにほぼ直交。
170	δ-IV B-9 (05-2)	V	(23.1)	1.5	0.3	081	柱目	上下両端折れ、左辺下半分割れ。		やや粗い	118806.49	89842.113	3.533	流れに平行。文字面が下向き。
											118806.609	89841.977	3.528	
											118806.546	89842.233	3.534	
171	δ-IV D-8 (05-2)	V	(6.0)	1.8	0.4	081	板目	上下両端折れ。		滑らか	118817.652	89839.567	3.363	流れに直交。文字の書き出しは南側から。文字面が上向き。
											118817.594	89839.554	3.371	
172	δ-IV E-7 (05-2)	V	(12.3)	2.5	0.3	051	板目	下端折れ。	上端は切り折り後に削り、右辺下部に削り有り。	滑らか	118824.062	89834.062	3.636	流れに平行。文字の書き出しは南東側から。文字面が上向き。
											118824.091	89834.17	3.647	
173	δ-IV C-8 (05-2)	V	17.0	1.7	0.2	051	板目	ほぼ完形。	上下両端とも、右辺から削り出して尖らせる。	やや粗い	118814.845	89836.526	3.4	流れに平行。文字の書き出しは西側から。文字面が下向き。
											118814.798	89836.395	3.465	
174	δ-IV B-6 (05-2)	V	26.5	3.7	0.6	051	板目	完形。	下端は左右から削って尖らせる。右辺から大きく削られる。	やや粗い	118807.837	89830.869	3.413	流れに平行。文字の書き出しは北西側から。文字面が下向き。
											118807.853	89830.687	3.397	
175	δ-IV G-6 (05-2)	V	17.2	1.7	0.5	051	板目	完形。	上端に切り込みの残存が有り、二次的に整形か。下端は尖らせる。	滑らか	118831.858	89826.059	3.66	流れにほぼ直交。文字の書き出しは南西側から。文字面が上向き。
											118831.718	89825.958	3.658	
176	δ-IV C-7 (05-2)	V	3.5	3.2	0.2	011	柱目	完形。	木簡を二次的に整形し、正方形にしたもの。	やや粗い	118812.527	89829.916	3.233	流れに平行。西側を上にして、斜めに突き刺さった状態で出土。文字の書き出しは東側から。文字面が東向き。
											118812.557	89829.933	3.292	
177	δ-IV F-6 (05-2)	V	17.3	2.2	0.3	051	板目	ほぼ完形。	ほとんど削りのない断面三角形の板材。下端は尖らせる。	粗い	118826.376	89824.925	3.422	流れに平行。北西側を上にして斜めに突き刺さった状態で出土。文字の書き出しは北西側から。文字面が下向き。
											118826.293	89825.044	3.357	
178	δ-IV D-7 (05-2)	V	(28.0)	4.4	0.2	019	板目	下端折れ。	表面の整形が粗いため墨が滲む。	やや粗い	118817.459	89833.087	3.373	流れに平行。文字の書き出しは東側から。表面が下向き。
											118817.531	89833.386	3.455	
179	δ-IV F-5 (05-2)	V	(15.6)	2.4	0.9	039	柱目	上下両端折れ。	上端に切り込みの痕跡有り。	粗い	118826.675	89821.885	3.461	流れに平行。文字の書き出しは北西側から。文字面が上向き。
											118826.636	89822.037	3.457	
180	δ-IV D-7 (05-2)	V	(6.7)	(1.6)	0.1	081	板目	上下両端折れ、左辺割れ。		やや粗い				
181	δ-IV D-7 (05-1)	V	(9.0)	1.9	0.4	039	板目	下端折れ。	上部に切り込み有り。	滑らか				
182	δ-III Q-20 (00-1-2)	V	22.0	3.3	0.3	051	板目	完形。	上下両端とも左右両側からの削りによって山形を呈する。二次的整形の可能性あり。	滑らか				
183	δ-IV H-1 (00-1)	V	26.2	5.2	0.5	011	板目	上端の大半欠損。	長方形の文書木簡。	やや滑らか	118835.390	89804.630	3.266	流れに直交。
											118835.520	89804.850	3.29	
184	δ-IV H-3 (00-1)	V	16.8	1.5	0.2	051	柱目	上端切断。	下端は左右両側からの削りにより細く尖らせる。	滑らか	118835.395	89814.165	3.378	流れに平行。文字の書き出しは南東側から。
											118835.290	89814.285	3.453	
185	δ-IV G-1 (00-1)	V	7.6	1.5	0.2	011	板目	下端切断。	上端は左右両側からの削りによって山形を呈する。	滑らか	118830.895	89801.645	3.597	流れに平行。文字の書き出しは西側から。文字面が上向き。
											118830.895	89801.710	3.532	
186	δ-IV G-3 (00-1)	V	14.9	1.5	0.2	051	板目	上端切断か。	下端は左右両側からの削りで尖らせる。	滑らか	118834.920	89811.255	3.143	流れに直交。文字の書き出しは北東側から。文字面が上向き。
											118834.970	89811.325	3.267	
187	δ-IV G-3 (00-1)	V	(17.8)	2.3	0.3	031	板目	下端折れ。	上端は山形を呈し、切り込み有り。左辺下部に切り込みの痕跡が残る。	滑らか				
188	δ-IV G-3 (00-1)	V	(13.8)	2.2	0.2	019	板目	下端折れ。	上端は稜をもつ円形に整形。	やや粗い	118834.712	89813.845	3.347	流れに直交。文字の書き出しは北東側から。文字面が下向き。
											118834.770	89813.890	3.445	
189	δ-III G-19 (00-1)	V	(15.1)	(0.9)	0.5	081	柱目	上端折れ、左右両辺は割裁。		滑らか	118830.155	89794.922	3.388	流れにほぼ直交。
											118830.022	89794.975	3.422	

木簡番号	グリッドなど (調査区)	層位	法量 L (cm)	法量 W (cm)	法量 H (cm)	型式	木取	備考1 (残存部分 に関する情報)	備考2 (形状に関する情報)	表面の状態	X	Y	Z	出土状況
190	δ-Ⅳ G-3 (00-1)	V	12.5	2.4	0.5	032	柁目	完形。	上端は切断後に表裏両面から削り、断面山形状を呈する。下端は切り折り。上部に切り込み有り。	滑らか	118831.170	89810.605	3.360	流れに直交。文字の書き出しは南西側から。
											118831.282	81810.642	3.355	
191	δ-Ⅲ G-19 (00-1)	V	9.8	2.3	0.4	032	柁目	ほぼ完形。	上部に切り込み有り。台形状を呈し、阿波国の贅の特徴を示す。	滑らか	118830.760	89794.110	3.309	流れに直交。文字の書き出しは南西側から。
											118830.840	89794.145	3.348	
192	(00-1)	V	24.5	2.2	0.7	011	板目	上下両端切断。		やや粗い				
193	δ-Ⅲ G-20 (00-1)	V	(5.7)	1.7	0.3	019	板目	上端切断、下端折れ。		滑らか	118833.359	89799.653	3.112	
194	δ-Ⅳ G-1 (00-1)	V	7.6	1.6	0.6	032	柁目	完形。	上端は切り折りによる切断。上部に切り込み有り。	滑らか	118830.871	89804.271	3.242	
195	δ-Ⅲ G-19 (00-1)	V	6.5	(1.3)	0.4	081	板目	下端切断、左右両辺割れ。		滑らか	118830.943	89794.943	3.020	
196	δ-Ⅳ G-3 (00-1)	V	(11.9)	(1.6)	0.3	081	板目	上端折れ、右辺割れ。	下端は二次的整形か。	滑らか	118832.809	89811.036	3.685	
197	(00-1)	V	(3.5)	(0.7)	0.1	081	板目	上下両端折れ、左辺割れ。		滑らか				
198	δ-Ⅳ G-10 (05-1)	V	(6.3)	1.9	0.2	081	板目	上下両端折れ。		やや粗い	118832.981	89846.686	3.266	
199	δ-Ⅳ C-10 (05-1)	V	(10.8)	1.9	0.2	081	板目	上下両端折れ。		滑らか	118813.577	89848.473	3.331	流れに平行。文字の書き出しは北西側から。文字面が上向き。
											118813.53	89848.501	3.414	
200	δ-Ⅳ F-5 (05-2)	V	(15.3)	2.8	0.3	019	柁目	下端折れ。	上端は稜のある円形。左辺下部は斜めに削る。	粗い	118829.11	89822.009	3.037	流れに直交。北から南へ斜めに突き刺さった状態。文字の書き出しは北側から。文字面が上向き。
											118829.264	89821.96	3.043	
201	δ-Ⅳ C-10 (05-1)	V	57.9	(5.0)	0.5	081	板目	右辺は割り。	上下両端とも、右辺に向かって曲線状に広がる。断面は左辺が薄く、右辺は厚い。	滑らか	118814.087	89847.882	3.55	流れにほぼ平行。南東側を上にして斜めに出土。北西側が湾曲。文字の書き出しは北西側から。表面が上向き。
											118814.333	89847.716	3.543	
											118814.567	89847.569	3.459	
202	δ-Ⅳ F-7 (05-2)	V	(21.6)	5.1	0.5	019	柁目	上端折れ。	下部中央に穿孔有り。	両面に削り痕削り痕	118830.037	89831.053	3.053	流れに平行。文字の書き出しは西側から。表面が上向き。
											118829.997	89831.271	3.058	
203	δ-Ⅳ E-7 (05-2)	V	(22.6)	3.3	0.3	039	板目	下端折れ。	上部に切り込みと穿孔有り。左辺下部に斜めに削る痕跡有り。	滑らか	118821.382	89830.364	3.061	流れに平行。「く」の字に折れた状態で出土。文字の書き出しは南東側から。文字面が下向き。
											118821.366	89830.597	3.093	
204	δ-Ⅳ F-4 (04-1)	Ⅵ	(7.7)	2.2	0.3	081	板目	上下両端折れ。		滑らか				
205	δ-Ⅳ G-4 (00-1)	Ⅶ	(12.4)	1.4	0.4	019	板目	下端折れ。	自然乾燥。	やや滑らか				L=3.108~2.962m。
206	γ-Ⅳ F-16 (98-1)	Ⅶ	(4.0)	2.0	0.2	019	柁目	下端折れ。	上端は左右両側からの削りによって山形を呈する。	やや粗い				
207	γ-Ⅳ T-13 (98-1)	Ⅶ	(12.4)	(2.4)	0.5	081	板目	上下両端折れ、右辺割れ。	裏面は剥離し、左辺から右辺にかけて薄く、削屑状を呈する。	滑らか				
208	γ-Ⅳ F-16 (98-1)	Ⅶ	16.9	1.6	0.3	081	柁目	ほぼ完形。	上下両端とも左辺から削って尖らせる。	やや粗い				
209	γ-Ⅳ T-16 (98-1)	Ⅶ	(11.2)	2.3	0.4	059	板目	上端折れ。	下端は左右両辺から削って尖らせる。	粗い				
210	δ-Ⅳ F-10 (05-1)	Ⅷ	8.1	0.5	0.4	011	板目	完形。	断面形状が正方形を呈する。算木か。	滑らか				
211	δ-Ⅳ N-1 (00-1-2)	Ⅸ	13.8	2.1	0.4	031	板目	左辺下部欠損。	上下両端に切り込み有り。	やや粗い	118867.050	89802.835	1.567	流れに直交。文字の書き出しは南西側から。文字面が下向き。
											118867.130	89802.950	1.541	
212	ε-Ⅲ O-10 (01-2)	Ⅸ	11.5	2.6	0.3	032	板目	完形。	上部に切り込み有り、木簡の幅1/3程度の深さ。	滑らか	118973.803	89746.379	2.382	SR4001
213	ε-Ⅲ O-10 (01-2)	Ⅸ	(15.1)	2.3	0.4	065	柁目	下端切断。		やや滑らか	118973.677	89747.294	2.39	SR4001
214	ε-Ⅲ N-12 (01-2)	Ⅸ	(16.4)	2.0	0.5	019	板目	下端折れ。	上端は左右両側からの削りによって山形を呈する。左辺下部は僅かに斜めに削る。	やや粗い	118968.752	89757.659	2.863	SR4001
215	ε-Ⅲ P-10 (01-1)	Ⅸ	12.6	2.6	0.4	032	板目	上端折れ。	上端に切り込みの痕跡有り。	やや滑らか	118977.104	89746.744	2.313	SR5001

表25 その他

遺物番号	グリッドなど	層位	法量 L (cm)	法量 W (cm)	法量 H (cm)	木取	備考1 (残存部分に関する情報)	備考2 (形状に関する情報)	表面の状態	X座標	Y座標	Z座標
1	δ-IV D-8 (05-2)	Ⅲ	(11.0)	1.9	0.3	板目	上端折れ。	檜扇の要用穿孔有り。	滑らか	118817.952	89835.425	3.95
										118817.996	89835.531	4.000
2	δ-IV D-8 (05-2)	Ⅲ	(3.5)	1.3	0.2	板目	上下両端折れ。	檜扇の断片。	滑らか	118818.61	89835.272	4.039
3	δ-IV D-8 (05-2)	Ⅲ	(12.9)	1.8	0.2	板目	上端折れ。	檜扇の要用穿孔有り。	滑らか	118818.471	89834.915	4.031
										118818.596	89834.959	4.035
4	δ-IV F-5 (05-2)	IV	(29.4)	3.2	0.4	板目	ほぼ完形。		滑らか	118827.952	89823.829	3.843
										118827.838	89824.097	3.851
5	γ-IV T-14 (98-1)	IV	(10.8)	1.7	0.4	板目	下端折れ。	上部に切り込み有り。	粗い			
6	δ-IV E-3 (04-1)	V	17.4	1.6	0.4	板目	ほぼ完形。	上下両端切り込み有り。	滑らか	118820.549	89813.921	3.531
										118820.413	89813.876	3.442
7	δ-IV D-10 (05-1)	V	(20.9)	2.5	0.6	板目	下端折れ。	上端は左右両側からの削りにより山形に整形。	両面に削り痕	118819.311	89845.396	3.806
									118819.466	89845.249	3.821	
8	δ-IV F-10 (05-1)	V	(10.3)	2.1	0.6	板目	完形。		滑らか	118828.133	89848.305	3.459
										118828.236	89848.324	3.415
9	δ-IV F-10 (05-1)	V	8.8	1.9	0.3	柱目	右辺下部欠損。		片面は粗い	118829.073	89844.462	3.463
									118829.094	89844.552	3.471	
10	δ-IV C-11 (05-1)	VI	32.6	3.1	0.9	板目	ほぼ完形。	上下両端切り込み有り。	やや粗い	118810.826	89851.068	3.283
									118811.112	89850.903	3.288	
11	δ-IV C-10 (05-1)	VI	(7.5)	2.1	0.5	板目	軸部折れ。	題籤軸の題籤部分。	やや滑らか			
12	ε-III 0-10 (01-2)	VII	15.5	2.3	0.7	柱目	ほぼ完形。	上下両端切り込み有り。	やや粗い	118972.991	89746.585	2.718

徳島県埋蔵文化財センター調査報告書 第71集

観音寺遺跡(Ⅳ)

道路改築事業(徳島環状線国府工区)関連埋蔵文化財発掘調査報告書

《第3分冊 木簡編》

発行日 平成20(2008)年3月25日

編集 財団法人 徳島県埋蔵文化財センター  
〒779-0108 徳島県板野郡板野町犬伏字平山86番2  
TEL (088) 672-4545 FAX (088) 672-4550

発行 徳島県教育委員会  
財団法人 徳島県埋蔵文化財センター

印刷 株式会社教育出版センター

阿波國司牒 淡路國カ  
右被今月廿三日牒備國依牒旨仰当郡司与使人共依数乞徴已畢者國仍差那賀直綿麻呂  
令向  
方

已畢望請除此土籍欲附出京戸籍者國依解狀覆檢知実仍録事狀故移  
彼  
即附佐伯費大長

(保存処理後)

阿波國司牒

淡路國カ

依

牒

右被今月廿三日牒備國依牒旨仰当郡司与使人共依数乞徴已畢者國仍差那賀直綿麻呂

令向

使發遣如前仍注事狀付使綿麻呂故牒

充カ

已畢望請除此土籍欲附出京戸籍者國依解狀覆檢知実仍録事狀故移  
彼  
即附佐伯費大長

阿波國司解 申勘籍資人事秦人マ大宅年式拾陸 部下名方郡殖栗郷戸主秦人マ人麻呂戸口者